

リュウノスケエ!!に殺された
シヨタの姉に転生しま
した。

シーボーギウム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なお特典は直死の魔眼

——それは、生きる意味を探す物

語 —— 197

E p i l o g u e —— 214

幕間の物語

想いは嗣がれ、記される。 —— 218

ほぼ奇襲 —— 231

増殖ロータス —— 240

多分ゴリラとかそういう類の生命体

249

第五次聖杯戦争編

P r o l o g u e —— 260

1. 冬の日、運命の夜 —— 267

2. ランサーVSライダー —— 274

3. 交渉 ——

4. 告白 ——

294 285

第四次聖杯戦争編

Prologue 1

その日も、私が過ごす日常は普通なもの筈だった。だが存外、日常というものは脆いらしい。

「嫌、だア！だずげツ！お、ねえ、ぢやつ！！あぎつ！！あがア、アア、!!?!」

おぞましい足が、グチャグチャと弟を挽く光景。強過ぎる血の臭いに吐き気がする。「恐怖という物には鮮度があります」

ずくと頭が痛む。同時に視界に走りはじめた、赤黒く脈動する無数の線が酷く鬱陶しい。

ああ、知っている。この光景を私は識っている。記憶がある、いや記憶を思い出した。今この時点を以って、本当なら泣き叫び、絶望する筈だった一介の小娘だった筈の私、蓮葉識姫^{はすはしき}は、一般から、通常から、普通から、平凡から、日常から逸脱した。

(そうだ、感情には鮮度がある)

それは恐怖に限らない。喜び、哀しみ、怒り、楽しみ。それらにも鮮度がある。私が今抱くこの感情にもだ。哀しみというには鋭過ぎ、怒りというには冷た過ぎる感情。こ

の感情も、時間が経てば冷めてしまう。

(何か武器を……………)

鞆を下ろし、その中から筆箱を取りだし、更にその中から普通の15cm定規を取り出した。鋭さは要らない。それはこの感情が補ってくれる。力は要らない。それはこの眼が証明してくれる。未だ喚く二体の害獣にゆるりと歩み寄っていく。扉の先、真つ暗な部屋の中で佇む獣共を睨み付けた。瞬間、獣共が、その身体に走る線にそつてズタズタになる光景を幻視した。

「直死」

駆け抜ける。呆然とする小さい方の獣のその頭部に向けて、その頭部に走る血のような線に向けて定規を振るう。獣の頭部が、ズルリとズレる。コレはもうどうでもいい。もう殺した。ならばもう一体の獣を殺さなければならぬ。

振り返るよりも早く迫る死の予感。倒れるように身体を揺り動かし、無数に迫る触手が作り出す殺人領域の、極僅かな安全圏に身を滑り込ませる。

再び、獣を見る。

深く深く、その身に走る「死」を注視する。線が増えていく。線が太くなる。獣を注視すればするほどに、その密度が濃くなつていく。そして、線が獣の全身を覆うその寸

前

の、経った数分の内に繰り広げられた地獄の中で、私の精神には致命的な欠陥が生まれていた。

世間において、今私の足元で転がるこの獣は殺人鬼とされるのだろう。だがそれは違う。コレは獣だ。ただ欲求に従い喰らい、殺す。本当の殺人鬼は、ただ定めた相手を、殺すと決めた相手を、なんの感慨を抱くことも無く殺し尽くす怪物のことだ。

普通の少女
私は、殺人鬼私に成った。

もう後戻りは出来ない。これから、私は何十人何百人と人を殺すだろう。それでも、家族が生きていたのなら、道を違えることは無かつただろう。

でもその家族は今日獣によつて死んだ。ならばもう、未練も無い。

急速に冷めゆく感情に、殺意に、再び熱を灯す。次にそれを向けるのは、自分自身。定規を首に当てる。目を瞑る。そして——

「お待ち下さい」

この日、私の運命は大きく変わった。

Prologue 2

「は？」

有り得ない。初めの感想はそれだった。私は彼女を知っている。一方的にだが識っている。艶やかな、腰まで届く長い髪。褐色の肌。露出の多い、しかし豪華で高貴な装束に身を包んだ美しく、艶かしい様相の美女。

真名をシエヘラザード。キャスターの装いにて、彼女は私の目の前に現界していた。「どう、いう……………」

「いけません、それだけは」

定規を持つ手を握られる。見れば、彼女の身体は震えていた。当然だ。ここまで死を想起させる状況は、何よりも死を忌避する彼女にとってみれば最悪と言っている。

「なんで、召喚されて……………」

「はい？ 貴女が召喚なされたのでは……………」

ああダメだ。許容量を超えた現実の濁流が、私の意識を押し流そうとする。力が入らない。掌から滑り落ちた定規が、床の上でカランと、この場の状況とは似つかわしくないう乾いた音を鳴らしたのを最後に、私は気絶した。

「……………ここ、は……………?」

「この街の下水道です。あの場に留まるのは気が引けましたし、一先ず落ち着ける場所を、と思いましたが」

「……………下水道には見えないけれど」

「陣地作成のスキルによるものです。安全性、秘匿性という点においては保証できると思います」

目覚めたのは、高級ホテルを思わせる外観へと改装された下水道だった。臭いもなく、気温や湿度も快適だ。匂いに関しては寧ろシエヘラザードから甘い香りが漂っているくらいだ。

どうやら、私は彼女の膝の上で眠っていたらしい。体調は悪くない。身体を起こそうと力を入れて、しかしそれは彼女によって阻まれた。

「……………何?」

「お疲れのようですから、あまり無理はなさらない方が良いかと」

「疲れてないよ」

「身体はともかく、貴女の精神は酷く疲弊こじろしています。そんな状態では、いつ死んでしまいかも分かりません」

「死んでしまう？それなら望むところなんだけど」

家族を失つて、弟が惨殺されるさまを見せ付けられて、少なくとも人の形をしたアイツらを獣と断じて殺して、私にはもう、生きる理由が見つからない。

「私はもう、生きていたくないんだ」

「………それも、事実なのでしよう。でもそれだけでは無い筈です。だって——」

——貴女の眼は、私ととても似ていますから。

「っー」

「生きたくない。だけど死にたくもない。どういうわけか貴女は、本来同時に存在し得ない願望を手にしてしまったのですね」

あまりにも、否定のしようがない指摘に言葉が出ない。そうだ。私は死ぬのが怖い。私は、死の記憶を知っている。あの深く深く、暗い水底に呑み込まれていくような恐怖を、識っている。あんなものを、二度も経験するのは耐えられないのだ。

それでも、できることなら私はこの生を諦めてしまいたい。でももう無理だ。少なく

とも自分自身の手で私を終わらせることはもう出来ない。消えてしまった殺意をもう一度灯しても、それを自分に向けられる程熱するのは、もう私には出来ない。

「きつと、会ったばかりの私が何を言つても貴女には響かないでしょう。ですが貴女に死なれるのは私も困つてしまいます。死ぬのは、嫌なので」

「マスターなら、別に私である必要は無いじゃん……」

「死にたくないと思う貴女だからこそ、分かってくれるものがあると思うのです」

そんなことを言いながら、まるでグズる子供を宥めるかのように、彼女は私の額に手を当てた。

「今宵はもうお休みください」

「無理だよ。あの光景が脳裏に刻みついている」

「では、子守唄代わりに物語らせて頂きましょう。貴女が眠れるまで、いくらでも。貴女が望む限り、いつまでも」

——それは、昔々のことでございます。

そんな語り口で、寝物語が始まる。当然、物語る彼女にも死の線はある。だけど、そんなグロテスクな線が全身にあつてなお、彼女はとても美しく見えた。

識姫が眠りに落ちた後、シエヘラザードはその身を震わせた。理由は様々、聖杯戦争に喚ばれてしまったこと、召喚直後に死を想起するようななおぞましい光景を目にしてしまったこと、己のマスターであろう少女が自決寸前だったこと。

だがそれ以上の恐怖があった。

(なんと、恐ろしい眼なのでしよう……)

死を恐れるが故に死に敏感であり、生き残る術として王の機微に聡い彼女は、本質は掴めぬど、少女の眼が持つ規格外の異能の力に勘づいていた。

それと同時に、己の膝の上で眠る少女を襲った悲劇を哀しんでいた。もはや普通であることを許されず、生きる事を苦しみ、死ぬ事に怯える少女。触媒も何も無いあの場を見て、多少なり魔術の知識を持つ彼女は、少女のその精神性こそが己を喚び寄せたのだと確信していた。

明確に違うのは、英霊シエヘラザードは死ぬ事に怯えていても生きる事に苦痛を覚えてはいないことだろう。彼女は物語を生きる術とした。狂君の暴虐の陰に怯えながら、物語ることによって生きながらえた。そこに楽しむという感情は無かったが、それでも

物語を、物語ることを選んだのは、ひとえに彼女がそれらを愛していたからだ。少なくとも、なんのしがらみもなく物語を読む時、彼女は楽しむことができていた。彼女は生きていたとは思えていたのだ。

(気休め、いえ、それにすらならないかもしれません)

眠る少女の事情を全て知ったとして、そも語り部でしかない彼女ができるのは、そこそ物語ることだけだ。だが彼女の言葉は、かつて不信に狂う王を鎮めた最上のもだ。彼女は、今はまだ生きたいと思えぬままの少女の頭を撫でる。

「どうか、私の物語が貴女が生きるための一助となりますように」

英霊シエヘラザードにとっての、新たなる長い長い夜の物語が始まった。

Prologue 3

「……………」

「おはようございます」

「……………心臓に悪い」

目が覚めた途端、目の前に広がる死の世界と、こちらを覗き込むやたら艶かしい美女。昨夜、私を見事眠りに誘ったその唇に視線がいく。肉感的なそれが微笑むのを見て、ふと頬が熱くなるのを感じた。

「だ、大丈夫ですか……………?」

「ただの比喩表現だよ」

オロオロとする彼女の膝から逃れる。その様子にサディスティックな欲求が湧き上がるのを感じた。おかしい、私はノーマルだった筈なのだが。

いけない。何か、寝起きなせいか思考が頭の悪い方向に突っ走っている。冷静にならなければ。

「……………とりあえず、色々整理しよう。巻き込まれた以上、聖杯戦争には参加せざるを得ないから」

「そう、ですわね」

憂鬱さを隠しもしない。まあ、それはお互い様だろう。私自身、聖杯戦争には、特にこの冬木の聖杯戦争には参加したくない。色々ある中でも屈指の厄ネタ塗れの聖杯戦争だ。fateという人気な作品だが、恐らくこの世界に転生したいと考える人間はいない。その原因の7／8割は聖杯戦争だろうというくらい、この儀式は死亡率が高い。

「とりあえず、私達の目的は生き残ることであつて、勝つ事では無い。そこは良い？」
「ええ………ですが生き残るためには、どの道勝つ必要があるのでは？」

「この街の聖杯じゃ勝つてもろくな事にならないよ」
「？」

首を傾げるシエヘラザードに、ああ、と気付いた。転生（恐らく）した私にとつては当たり前の認識だったが、まず根本的にこの聖杯戦争に参加するマスター、サーヴァントで聖杯が汚染されていることを知る者はいないのだ。

第三次聖杯戦争にて召喚されたサーヴァント、アヴェンジャーアンリマユ。それによつて汚染された聖杯は願いを曲解し、歪めた形で実現させる。もはやあれは聖杯という名すら相応しくない呪物に過ぎない。ということを彼女に伝えた。

「それ、は………」

「勝者が誰で、どんな願いだったとしても、その先にあるのは最良でこの街、最悪で世界

を呑み込む大災害だよ」

「逃げまじよう。今すぐ」

「判断が早い」

彼女のおでこを指先で弾く。逃げたところで、他の陣営から逃げ続ける羽目になる。それでは生きた心地がしない。ならば、私達が目指すべきは聖杯の顕現そのものを防ぐか、聖杯から溢れ出る泥をどうにかする、というものになる。

もちろん、両方とも簡単な話ではない。そも、この情報は真実だが、それは私の持つ前世の記憶を元としたものだ。他のマスターにとつては根拠の無い世迷言にすら劣る戯言だ。それどころか、この世界はF a t e / Z e r o に似ているだけの全く別の世界の可能性すらある。

「私としては、聖杯が汚染されていることの確たる証明がしたい」

「そう、ですね。聖杯の汚染が知れば、それは多くの魔術師にとつて望ましくないのでから。ですがどうやって証明を………?」

「当てはあるよ。でも戦力が心許ない」

私は、眼が特殊なだけの小娘だ。こうしてシエヘラザードが現界を保てていること、身体のうちから何かが持つていかれている感覚からして、私も一応魔力は持つているのだらうが、魔術は使えない。例え使えたとして、それがサーヴァントに通用するかと言

えば難しいだろう。攻撃力はともかく、他の要素が圧倒的に足りないのだ。

ではサーヴァントであるシエヘラザードは？これもダメだ。本人が戦いたがらないだろうし、戦ったとして、元が語り部である彼女は元より戦いに不向きだ。宝具があるため戦えはするだろうが、だとしても火力に欠ける。私自身無理強いもしたくない。

「何にしろ、今は待つしかないかな」

「……………マスター」

「何？」

「貴女は、何故そこまでこの聖杯戦争に関する知識を持つているのでしょうか……………」

息が詰まる。そう、私の知識は彼女にとつて不可解極まるものだろう。昨日までただの小娘だったというのに、何故か持ち得る魔術の知識。しかし使うことは出来ないというあまりにもチグハグな状況。

どうするべきなのだろう。この記憶を話すリスクは計り知れない。ここは彼女の工房の中で、自分と彼女以外の誰かがこの話を聞く可能性は皆無に等しいことは理解している。だが、万が一、億が一でも聞かれてしまえば？それは、もはや死と同義の末路を歩むこととなるだろう。

「申し訳ありません」

「え？」

「出過ぎた質問でした。撤回、いたします」

「なんで……………」

「その話をするのは、相応のリスクが伴うのでしょうか？ならば、無理をする必要はありません。貴女が望むタイミングで教えて頂ければ、それで充分です」

そう言つて、シエヘラザードは微笑む。ああダメだ。どうにも私は彼女に弱いらしい。紡がれる言葉全てに甘えたくなる。だが、それではダメだと理性が吼えた。

今後、この話をするリスクが現状より低くなる事は無い。これは確実と言つていい。誰にも居場所も素性も何もかも知れていない現状で話すのが、最もリスクが低いということ、私は理解している。話したくないと思うのは、単に私が怯えているからだ。己の異常を、明確に認識することを恐れているからだ。

口の中が乾く。怯えも恐れも未だ消えることは無い。だが、やはり今伝えるべきだ。

「話、すよ……………」

「マスター……………無理は……………」

「ううん、大丈夫。無理をしてでも、今話すべきだと思うから」

深呼吸。冷や汗が額から吹き出る。ふと、強ばった手を柔らかく包み込まれたことに気がついた。

「世迷言に、聞こえるかもしれない、けれど」

「焦らず、ゆつくり、無理のないよう」

見た目も、性格も、声色も、何もかもが違う。だというのに、そう言つて私の頬を撫でる彼女の姿に、亡き母の姿を幻視した。

自分に前世の記憶があること、この世界を物語の一つとして認識していたということ、死の記憶を持つていること。私はそれら全てを、それら以外も含めた私の持ちうる全ての秘密を、シエヘラザードにぶちまけた。

抱き寄せられ、頭を撫でられる。不思議だ。あんなにも不安定で、すぐにでも壊れてしまいそうな私の精神が、ただそれだけで鎮まっていくな。そうして与えられる、甘やかで穏やかな温もりに浸っていることが、今の私にとっては何となく、とても幸せだった。

「話していただきありがとうございます、マスター」

「お礼、言うような事じゃないでしょ……」

「いいえ、貴女がそれを話すということは、貴女にとって最大の信用と信頼の証でしょう

から」

そう言いながら微笑む気配を感じる。ダメだ。溺れる。この慈愛は、本質は薬だが今の私には毒になりかねない。

「ともかく、私はこの聖杯戦争の結末を知ってる。どうせなら、出来る限りその結末を良い方向へ行かせたい」

悲惨、凄惨という言葉の似合う冬木の聖杯戦争においても、第四次聖杯戦争は特に酷い。その大半が悲痛の下に潰えてしまった。わざわざ助けようとは、考えていない。でもいくつかの悲劇を変えることが、結果的により良い結末に繋がるだろうとは確信している。考えなければいけないのは、終わった後の話だ。生き残るのは確定にして必須事項。ならば、その後の安寧を手にする為に、私は運命の取捨選択をしなければならぬ。「動くべき時間はまだ先だから、一先ずは当面の食料とかをどうにかしよう」

そう言いつつ、どうにか彼女の胸から逃げ出した。

1. 初戦、その裏にて

「状況は？」

「セイバーとランサーと思わしき方々が戦い始めました。マスターの言っていた通りの展開です」

あの日から数日後。私はあの後シエヘラザードの宝具によって呼び出した存在を利用し、初戦が行われるコンテナ地帯を監視させた。つい数分前、ランサー陣營の存在が確認され、その後10分程でセイバー陣營が接敵、戦闘を開始した。ここまでは原作と何ら変わりはない。とりあえず、この夜に起こることが全て原作通りの展開であることを祈ろう。

「一先ずは予定通りか………何か伝えていた事とは違うことが起きたら伝えてね」
「ええ、分かりました」

私は今空を飛んでいる。乗っているのは豪華な柄の絨毯。そう、かのアラジンに登場する空飛ぶ絨毯そのものだ。速度は体感で時速40km程だろうか。ライダーの神威の車輪には比ぶべくもないが、空を飛べるというだけでかなりのメリツトだ。

アルフ・ライラ・ワ・ライラ
千夜一夜物語

それはシエヘラザードという英霊が持つ宝具であり固有結界。彼女はそこから物語上の物や登場人物を引き出すことができる。私は戦力が心許ないとは言ったが、こと汎用性、応用性という点ではこの第四次聖杯戦争においても2番目と言えるだろう。1番目は言わずもがな英雄王だ。

さて、何故私達はわざわざ空を飛んでまで移動しているのか。それは聖杯が汚染されていることを裏付ける為の資料、第三次聖杯戦争の情報を強奪する為だ。そんなものがあるか？可能性だけならば遠坂邸、アインツベルン城辺りで見つけることだろう。だがそれよりも確実に、明確に残っている場所がある。数百年の時を生き続ける、妄執に囚われた怪物の巢。

そう、間桐邸だ。

今日私達がやるべきことは、間桐臓硯の抹殺、間桐桜の救出、及び第三次聖杯戦争の記録の強奪だ。第四次の初戦は、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、アサシン、バーサーカーとキャスターを除く全てのサーヴァントが参戦する。アサシンに関しては諜報程度だが。

「くどいようだけど、バーサーカーが現れた時点で使い魔？は解除して大丈夫だから」「良いのですか？バーサーカーとそのマスターが直ぐに戻ってくる可能性もあると思うのですが……………」

「いや、マスターはしばらく動けないだろうから問題無いよ」

これは初めの選択だ。私は、間桐雁夜を助けない。多分手を尽くせば、この世界ならあの男の延命は容易い。がメリットが皆無なのだ。コネも何も無い以上助ける意味も理由も無い。本質を解さず、己の思い込みだけで突き進む愚者、それが間桐雁夜だ。哀れではあるが、まあ今のうちに死んでおく方が幸福だろう。

「大丈夫、ですか？」

これは、恐らく間桐臓硯と対峙するのが私であることを憂いているのだろう。彼女にはその他の事を頼んでおいた。蟲蔵を焼き尽くすことも、彼女なら容易い。

「大丈夫」

言葉を尽くす必要は無い。

「私は死なないよ」

少なくとも、この聖杯戦争が終わるまでは。

「はい、ですか……………」

「まさに魔窟つて感じだね」

暗く、おどろおどろしい雰囲気醸し出す間桐邸。その正門の目の前に立ち、眼をこらす。世界が線死に包まれていく。地面に、壁に、空間に、赤黒いグロテスクな線が現れる。そしてその中で、明らかに不自然な線の集まりがあった。

手にするのは30cm定規。本なら耐久面を考えてナイフが欲しいところだが、今はまだ懐が寂しい。耐久面は劣るが、死の線をなぞるなら一先ずはこれで十分だ。

「行くよ」

「はい」

定規を線へ振るう。瞬間、パキンツという音が響いた。間髪入れずに門を切り裂き、中へ侵入する。この時点で私とシエヘラザードは別行動だ。彼女には間桐桜の救出を最優先に動いてもらう。

「お気を付けて！」

「うん！」

適当な壁を切りつけて中へ侵入する。生憎間桐邸の構造は知らない。では風潰しに一部屋ずつ潰していく、なんてのはあまりにも非効率的だ。とはいえ間桐臓硯に聞いたところで目的の物がどこにあるかなど答える筈がない。ならば知っていそうで、かつ脅

せば話しそうな間桐鶴野に聞けば良い。

廊下に置いてある物を軒並み破壊し、適当に壁や窓、扉を解体しながら上層階に進む。ボスキャラは大概一番上か一番下にいるものだ。下にはシエヘラザードが向かっている。あの老害なら無用なリスクを背負うことは無いだろうから、私の方に現れる筈だが………

「……………噂をすれば」

不快な羽音が耳に響く。蟲は苦手だ。私にとって、命の重さは私にとって重要な存在であるかどうかで決まる。私からすれば、どうでもいい人間を殺すことは、今目の前で飛ぶ蟲を殺すのと何ら変わらないことだ。だけど、別に命を粗末にしていいと思つていい訳ではない。

だからこそ、蟲は嫌いだ。あまりにも簡単に殺せてしまうが故に、命の感覚が曖昧になる。

定規 刃を振るう。一撃、二撃でその命が10、20と散っていく。直進してきた蟲を真つ二つにする。背後から襲いかかる蟲の頭を切り飛ばす。素早く蛇行する蟲を4つに分ける。多分、本来ならばナイフなどでも傷付けられない程硬い蟲なのだろうが、ご生憎。私相手に、防御力や硬度という概念は意味が無い。

ジジジジジジジジジジジジジジジジ

「キツシヨ……………」

一頻り全滅させたところで、更に大量の蟲が現れた。そしてその先、普通の視界ならば見ることにすら叶わないだろうが、私の眼は明確に人を象った線の集合を捉えた。

「よもや魔術も碌に使えん小娘とはな。貴様何者だ？」

「ただの小娘」

答える義理も無いが、まあこれが最期の会話になるのだ。これくらいは答えてやつても良いだろう。

「ふん、まともに答える訳も無いか。まあ良い、適当に四肢を挽いで蟲の苗床にでもすればよからう」

ジジジジジジジジジジジジジジ

気色悪い羽音と共に蟲共が突っ込んでくる。この量の蟲を殺しきるのは流石に骨だ。だが、ここで扱を間違えればその瞬間私は死ぬ。今も生きたいとは思っていない。それでも死にたくないし、まだ死ねない。私が死ぬだけならともかく、私の死は即ちシエヘラザードの死だ。少なくともこの聖杯戦争が終わるまでは生き抜こうと思わせてくれた彼女をそんな結末に向かわせる訳には行かない。

一閃。目の前の蟲を切り捨て、極小の安全圏を突き進む。予感。刃を振り回しつつ身をかがめ、背後から迫ってきていた蟲の牙を避ける。走る。まだ遠い。避けきれず掠つ

た牙が皮膚を、肉を抉っていく。痛い。仮に命のかかっていない状況だったなら、その痛みに喘ぎ、悶えていただろう。だが――

「くだら、ない!!」

この程度の痛みも、迫る蟲共の牙も、視界の先で嗤う怪物も、何もかも。その全てが、本物の死に比べればあまりにもくだらない。

尚、私は進む。蟲を殺し、その牙を避ける。急速に迫る死の中、ただひたすら踊り狂う。血が滲む。額が切れたようだ、血が目に入り、視界が赤く染まる。間桐臓硯が何か言っている。聞こえない。音も、声も何もかもを捨て去り、命のやり取りのみが存在できる空間に身を落としていく。ああ、不愉快だ。

私はこんなにも生きて殺している。

己に迫る死を跳ね返し、受け流し、押し付ける。そうして作り上げた屍の道をただ進む。そして、辿りついた。

「終わりだな」

そんな言葉と共に、無数の蟲死が迫ってくる。だが足りない、あまりにも。

「オレブン起動」

己に定めた自己暗示の言葉。無数の蟲共を、間桐臓硯を視界に収める。濃密な死線に覆われたそれらに向けて、私だけに許された力を解き放った。名を――

「『絶死の偽眼』コードIIパロール」

蟲共が、その牙を私に突き立てる事無く地に墜ちる。刃を構える。未だ硬直する間桐臓硯、その身体に走る死の線に狙いを定める。そして、

「直死」

一閃。手に残る極僅かな感触が、間桐臓硯の確実な絶命を伝えてくる。

「疲、れた………」

壁に寄りかかる。飛びそうになる意識をどうにか保ち、私は間桐鶴野を探すため、再び歩を進めた。

2. 懊悩と計略と

「マスター!？」

「キャスター……………」

どうやら彼女は課せられた任務を完璧にこなしてくれたようだ。彼女の腕の中には間桐桜がいる。彼女は宝具によって再び空飛ぶ絨毯を取り出し、そこに桜を乗せてから私に駆け寄ってきた。

「大丈夫なのですか!？」

「血で汚れるよ……………」

血塗れではあるが、傷は全て浅い。おかげで、既に血はほとんど止まっている。正直泣きそうな程痛いが、今はまだ泣き喚いている暇は無い。

「早く休みたいし、さっさとやること済ませて帰ろう……………」

「ええ……………」

心配そうな彼女を引き剥がし、歩を進める。ふと、ズキリと眼が痛んだ。出力を上げすぎたのかもしれない。

「……………」

眠る桜の頭を撫でる。身体を丸めるその様に、弟の姿を見た。

「臓硯氏が死んだ……………?」

「ええ、息子の間桐鶴野からの通達です」

初戦を終え、その次の朝。遠坂時臣は己の徒弟たる言峰綺礼の言葉に耳を疑った。聞けば、昨晚コンテナ地区での戦闘と同時刻間桐邸に襲撃があり、下手人が間桐臓硯を殺害、その後間桐桜及び魔術に関連する資料や書物を強奪した後逃亡したという。

「……………あの御老公が簡単にやられるとは思えん」

「間桐鶴野によれば、襲撃はキャスター陣営によるものだ」と

「つゝなるほど、いくら彼とはいえサーヴァントには敵わないということか……………」

椅子に背を預け、天を仰ぐ。傍から見れば冷静に見える彼だが、その内心は酷く揺り動かされていた。既に親子の縁は切れているとはいえ、血の繋がった娘が得体の知れぬキャスターとそのマスターに連れさらされたのだ。その目的など、優秀な魔術師である彼

からすれば容易く想定できるものだった。

(いかなん……………)

意識を切り替えようと、遠坂時臣は言峰綺礼に問いを投げかけた。

「綺礼君、君はキャスター陣営が桜を連れ去った狙いをどう見る？」

「順当に行けば、サーヴァントの魔力供給の為かと」

「そうだ。非凡な才を持つ子だ。サーヴァントにとってみれば実に都合のいい魔力の供給源となるだろう。だが、重要なのはそこでは無い」

「何故魔力が必要なのか、ですか」

満足気に遠坂時臣は頷く。考えられる可能性は2つ。サーヴァントの宝具の発動の為か、そもそもマスターの魔力量が乏しく、魔力が足りないか。彼は現時点で分かっている情報から推測するならば前者であると判断した。

「とはいえ決め付けるには早い。だが現時点ではそちらの線で対策を練るのが得策だろう」

「引き続き、アサシンによる諜報を？」

「……………いや、現時点ではキャスターも、そのマスターの姿も分かっていない。今は他の陣営についての調査に集中した方が得策だろう」

「了解しました」

退室した言峰綺礼を見送り、人知れず、彼は頭を抱えた。

（昨晚の戦いを避け、その先を見据えての行動……キヤスターのマスターを間桐雁夜がどうにかすることは期待できない……）

覚悟を決める。遠坂時臣が懺悔することは無い。それは、桜の親でなくなつた時点で彼には許されぬ権利であるが故に。

「……………」

ただ静かに、彼は月明かりに照らされていた。

翌朝9時。間桐鶴野を脅して500万程強奪していた私は桜を連れて近場のファミレスに来ていた。昨日までは財布の中に残っていた金を切り詰めて使って食い繋いでいたので、数日ぶりのマトモな食事だ。

「何か食べたいものある?」

「なんでも、いいです」

流石に食事はちゃんとしたものを与えられていたのだろうが、彼女にしてみればそれもあのクソジジイの命令だったのだらう。だがそれではいけない。

「ダメだよ、ちゃんと選びな。なんでもいいよ」

この先、この子がどう生きていくにしろ、他人に判断を任せて生きていくのには限度がある。放っておいても、いつか正義の味方がこの子の笑顔を取り戻すだらう。でも、取り戻せるのなら早ければ早い方がよい。

「泣いて笑って恋をして、桜はそういう風に生きるべきだと思う」

この子と私は、多分似ている。でも決定的に違うのは、この子は生きることには希望を見い出せないだけで、生きることを諦めたいとは思っていないこと。

頭を撫でながら微笑みかける。

「どんなものが食べたい？」

「……………」

迷いつつも、おずおずと手を動かし桜はメニューを見ていく。

「あ……………」

「うん？」

そうして桜の手が止まったのはデザートのパージだった。彼女の瞳は写真のプリンに釘付けになっている。

「これ頼もうか」
「はい……………」

「美味しかった？」

「はい……………」

食事を終えた後、私達は茜色に染まる街を歩きながらある場所を目指していた。傍らには霊体化しているがシエヘラザードもいる。

（大丈夫なのでしょうか……………）

（大丈夫だよ、あの英霊ならいきなり殺されるなんてことはないはずだから）

桜と手を繋いでゆるりと歩く。

私達がこの聖杯戦争を生き残ったとして、その後の環境を求める時、必要になるのはなんだろうか。安定した収入源は当然として、何よりも必要なのは強力な後ろ盾だ。

（今はともかく、将来性で言えば彼はダントツだ）

だから、私は彼を選んだ。まあそれだけでは無いのだが。

ともかく、ここまで言えばもう分かるだろう。私達が向かうのは、ウェイバー・ベルベットの潜伏先、マッケンジー夫妻宅だ。

おそらくは第四次聖杯戦争において最もマトモな陣営だ。そしてマスターであるウェイバーはゆくゆくは時計塔のロードにまで上り詰める。

「着いた」

「ここ、ですか……?」

「そう、桜の先生になる人がいるところ」

この子の才能を持て余すのは宜しくない。魔術の才がある人間は、キチンと己を守るためにその才を磨く必要がある。でなければ、行く末に待っているのは体のいい実験材料か、間桐邸の地下で行われたものに勝るとも劣らない調教だ。

ピンポン

そんな無機質な電子音が鳴り響く。やがて扉を開いて現れたのは、年老いた女性だった。

「ええと、どなた?」

「初めまして蓮葉識姫と申します。ウェイバー君はいますか?」

かなり流暢な日本語で問われた問いに答えを返す。穏やかに笑みを浮かべる。相手の警戒心を殺し尽くす。きっと、かの征服王はキャスターの気配に気付いている。だが

逃げるという扱は、彼等には取れない、取らせない。

「あら！ウエイバーちゃんとお友達かしら！」

「ええ、以前妹と共にお世話になりました、近くに來たので挨拶に」

「そうなのお！上がってちようだい！直ぐにあの子を呼ぶわ！」

桜と共に中へ案内される。ふと、空気が軽くなるのを感じた。驚いた。彼の幸運は、

ここまで分かりやすく影響を及ぼすらしい。

バタバタという慌ただしい足音が上から聞こえてくる。そうして現れた青年に向

かって、笑みを向けた。

「久し^{初めまして}ぶり、ウエイバー。私が誰か、分かりますか？」

青い顔をするウエイバー。どうやらファーストコンタクトは私の勝ちと言えそうだ。

3. 交渉

(どうする、どうするどうするどうする!?)

どうにかマツケンジー夫妻を外出させた後、青年、ウエイバー・ベルベツトは目の前に座る少女から片時も意識を外さないよう心掛けながら、現状の打開策を考えていた。

正体不明の方法による、彼の潜伏地の特定。それを成したのが目の前の少女、あるいはその背後で霊体化しているキャスターだ。その警戒度は、既に師であるケイネス・エルメロイ・アーチボルトのそれを容易く超えている。

「落ち着け坊主」

「うわあ!」

スパーン、いや、ドゴオ!という音と共に後頭部をはたかれる。その額を盛大に机に叩き付けられた彼は跳ねるようにして己のサーヴァントを睨みつけた。

「何すんだよ!」

「殺気一つ向けてきておらん娘相手にそこまで怯えてどうする。むしろ坊主は有利な状

況であろうが」

言われて初めて、ウエイバーは気が付いた。相手側はサーヴァントの姿すら知れておらず、その手札は未知数、だが彼のサーヴァントであるライダーは実体化している状況だ。その上相手はキャスター。本来陣地を構え、待ちの戦いをするのがセオリー。それを破りここに来ているという事は、その優位性を捨てている。

その事実にくらか余裕を取り戻したウエイバーは、息を整え、聖杯戦争に参加したマスターとして目の前の少女に相對した。

「お前は、何者だ………？」

「蓮葉識姫。聖杯戦争に巻き込まれた元一般人」

「……………」

ウエイバーは耐えた。本来なら、というか日本に来る前の彼ならず様「そんな訳ないだろ!」と叫んでいたところだろう。それ位には、目の前の少女は落ち着き過ぎている。普通目の前にサーヴァントがいれば否応なく、少なからず意識が向くだろう。何せウエイバーでさえ少女の背後、霊体化したキャスターに眼が行きそうになるのをどうか避けているのだ。

しかし件の少女、識姫はウエイバーにもライダーにも注意を払うこと無く、隣に座る幼女に目を向けている。

「……………まあいい。それを信じるとして、お前はなんでここに来たんだ？」

「同盟を提案しに。ああ、かの征服王相手なら軍門に下りに来た、と言った方が良いでしょうか？」

「ほう？ 貴様、聖杯を余に譲ると言うのだな？」

「ええ、その通りです」

「待て待て待て待て!!」

あまりにも突拍子の無い話に割って入る。仮に元一般人というのが事実だとして、サーヴァントを召喚している以上最低限の知識はサーヴァントから伝えられるはずだ。要するに、聖杯が万能の願望器であることを知らないはずが無い。本当に一般人だったとしても、そう易々と諦めてしまえるとは、彼には思えなかった。

「それに、例えお前自身が聖杯を放棄したとして、お前のサーヴァントが納得しないだろう！」

「してなきやこんな話しないよ」

「なっ……………!」

「私達の目的は、初めから勝ち抜くことには向けられていない」

「なら何だって言うんだよ……………」

ウェイバーからすれば、適当に投げかけた問い。だが、その時はじめて、一度も合う

ことのなかつた視線が、真つ直ぐと彼の瞳に向けられた。

「生き残ること」

「っ！」

ただそれだけ、だと言うのに、そこに込められた思いの深さにウェイバーは言葉を失った。それどころか、彼の隣のライダーですらほう、とため息をもらしている。

「面白い。ただ生きるだけを目的とする、一見つまらん願いだが、そなたのそれは凡百のそれとは重みが違うな」

「まあ、そんな話は後でいくらでもできるから、さっさと本題入りますね」

言葉と共に、識姫は懐から古びた本を取り出しつつ口を開いた。

「とりあえず、私達が提案するメリットは3つ。キャスターの真名の開示、私自身が持ち合わせる能力の開示、そして間桐邸から強奪した魔術関連資料の譲渡」

「……………はあ!？」

またも、ウェイバーは驚愕の声を上げた。間桐、その名は冬木の聖杯戦争に参加する以上知っていた。今は没落したと言われているが、そこに眠る魔術関連資料の持つ価値は計り知れないだろう。

「さつきから騒がしいぞ坊主。そう騒ぐことでもなかるうて」

「お前なあ！魔術師一族のこれまでの研究が一部でも分かるんだぞ!？」

本来、魔術師は他の一族の研究を知る事は出来ない。それは魔術師にとつて人生の全てをさらけ出すのと同義だからだ。いくら既に没落した魔術師の家系とはいえ、その研究を知る事によつて得られるメリットは計り知れない。

「て、待て！間桐の当主はどうなつたんだ!？」

「殺した。次代はまともに魔術も修めてなかつたから見逃したよ。今頃どこぞの国にでも飛んでるんじゃない?」

一応は間桐鶴野は当主だったが、所詮は間桐臓硯の傀儡。説明も面倒だつた識姫はそこを端折つた。

「まあ、詳しくは同盟を受けてくれたら話すよ。じゃあ次。私達が貴方達に求めるもの」
「……………」

「その1、残り二騎になるまで私と桜、キャスターに危害を加えないこと。これはもちろん私達からも危害を加えないことを前提とする。その2、私と桜に魔術を教えること。そして最後に、状況判断に応じてそちらも聖杯を諦めること」

再三にわたる意図の分からない要求にウェイバーは大声を上げようとして、止まつた。彼の真隣、そこにいる征服王の圧が急激に高まつたからだ。

「すまんなあ、少し聞き違えたやもしれん。もう一度言つてくれるか?」

「場合によつては聖杯を諦めて下さい」

ブオンツ！と風が吹き荒れる。いつの間にかライダーは装備を身にまとい、大きな手に握られた分厚い刃を識姫の首筋に突きつけていた。

「余に、聖杯を諦めろと？」

「……………そう、です」

あまりの圧に、マスターであるウェイバーすら何も出来ない空間。しかし、識姫は顔を青ざめさせ、肩を震わせながらも、かの征服王から目を逸らすことなく答えた。答えきった。それどころか、彼女は言葉を続け始めた。

「詳、しくは、同盟を受けた場合の返礼としてだから言えません。でも、あの聖杯は貴方に相応しくない事だけは、明確だ」

「余に相応しくないだど？」

「はい。貴方が聖杯に、ではなく、聖杯が貴方に、です」

言い聞かせるように、万が一にも間違わない様にと識姫は言葉を紡いだ。

「どういうことだ」

「同盟を受けて下さるなら、仔細語らせて頂きます」

「……………」

しばらくの沈黙。その後、剣を収めた征服王は良からう、と言った。彼としては受けてもいい、ということだろう。となれば残るはウェイバーだけ。識姫はウェイバーに目

を向け、言葉無く問いかけた。

「……………わかった。でもこのままじゃただの口約束だ。何か裏切らないという証拠が欲しい」

「難しいこと言うね……………」

魔術的に強制力を持たせる、というならセオリーは自己強制証明セルフギアス・スクロールだろう。だが識姫は魔術が使えず、魔術刻印も無い。とはいえ書面に残したところでそんなものは聖杯戦争では意味を持たないだろう。

「……………とりあえず明日、私達が同盟をしようと思った理由を持つてくる。それを見てくれれば、信用してくれると思う」

「……………それは聖杯が余に相応しいものかどうかにも関わるのか？」

「ええ、まあ」

「そうか、ならば今すぐその理由とやらを取りに行くでしょう!!」

「はっ…」

突然のライダーの発言に、識姫とウェイバーの呆けたような声が重なった。

4. 慟哭

「うわあああああああ?!?!?」

「……………っ!……………っ!」

夜、話し合いを終えた私達キャスター陣営は、今何故かイスカンダルの戦車に乗せられ、私達の拠点へと向かっていた。あまりの速度に胃が持ち上がる気持ち悪さを感じながら、私は桜をシエヘラザードと共に抱き締めながら、二人して青い顔で手すりに掴まっていた。現状では基本無表情で感情を顕にしない桜ですら表情や身体が強ばっている。

「コチラで良いのだな?!」

征服王の問いにブンブンと頷く。生憎言葉にして返す余裕は無い。感覚としてはストッパー無しでジェットコースターに乗っているようなものだ。横のウェイバーが大層やかましいが、多分空中に振り落とされることは無いだろう。そんなミスをするようなら彼がライダーで召喚されるわけが無い。

とはいえ怖いものは怖い。一応シエヘラザードの絨毯で空を飛んだことはあるがあれとは速度が段違いなのだ。

(早く着いてくれ!)

内心叫びながら、私達は身の安全を祈るのだった。

「まず、私達の具体的な目的から話させてもらおうね」

拠点まで二人を案内し、どうにか調子が戻ってきたところで私はそう切り出した。生き残る、というのは言ってしまえば極論だ。その為の具体的な目的は、言うなればこの聖杯戦争を破綻させることだ。

「いや意味が分からない」

「まずさ、聖杯戦争ってなんのために行われると思う?」

「そりゃあ、聖杯を手に入れるためだろう?」

「半分正解」

首を傾げるライダー。しかし、ウェイバーは口元に手を当て思案顔だ。やがて何やら思い至ったのか、ボソリと呟いた。

「もしかして、何かの儀式なのか……………?」

「大正解」

「でもこんな大規模な儀式なんのために……………まさかつ!」

魔術に関することならば、やはり彼は今の時点で相当優秀らしい。こちらがまともに情報を与える前にこの答えにたどり着くのはそう簡単なことでは無いだろう。流石は未来のロードエルメロイ二世と言ったところか。

「この聖杯戦争は、七騎の英霊を利用して第三魔法に至るための儀式だ」

山積みの資料から三冊をウエイバーに投げ渡す。それぞれ第一次から第三次までの記録だ。私は既にこの資料の内容全てを覚えた。その為、これらは既に好きに持って行ってもらって構わないものだ。

「二冊目に書いてあることなだけどき、聖杯戦争って、そもそも反英霊は召喚されない筈なんだ。それを踏まえて、三冊目の9ページ、3行目を読んでみて」

「……………アヴェンジャ復讐者アンリマユ?」

「人類最古の善悪二元論、ゾロアスター教における悪神の名前だよ」

「なっ!?!」

仮にこれがただ悪属性なだけのサーヴァントだったなら問題無かっただろう。だがアンリマユは致命的なまでに聖杯との相性が良かったのだ。

「第三次のアインツベルンは神霊を喚んだつてのか!？」

「本当の意味の神つてわけではなかったんだと思う。一番初めに敗退してるし。でも、なんにせよアンリマユはこの世全ての悪という概念を孕んでる。そんなものが一番初めに聖杯の中に取り込まれた」

よりにもよつて、イレギュラー悪属性の中でも頂点の悪性が、まっさらな聖杯に強く癒合した。その結果生まれるのが冬木の大火災だ。

正直言つて、現状からあの地獄を防げとは思っていない。圧倒的に時間も準備も足りていない。精々が被害を原作よりも軽くする程度だろう。だからこそ、私が今見据えているのは第五次時点で聖杯の完全解体だ。原作では第五次で聖杯は機能不全に陥るが、完全な解体はその10年後になる。その際にも戦いが起きるらしいが、そもそもそれを防ぐという方針だ。

「とりあえず大聖杯の状態を調査して、それで本当におかしな事になってたなら、今回の聖杯戦争を破綻させて、次の聖杯戦争で決着をつけたい。貴方達が聖杯を諦めるのなら、それに協力して欲しい」

その言葉を最後に、場が沈黙に染まる。しばらくしてその沈黙を破つたのは、やはり彼だった。

「なあ娘。お前さん、生き残ることが目的と言つておつたよな?」

「うん」

「ならば、何故そうも聖杯をどうにかしようとするのだ？どこか別の街にでも逃げればそれで済む話ではないか」

「……………」

「そうだ、その通りだ。ただ生き残るだけなら、何もかも放り出して逃げるのが一番手取り早いし安全だ。そんなことは自分が一番分かっている。それに、私は転生者。前世の記憶は間違いなく存在する。前世で生きた時間は、今の私よりも長い。」

だが、それでも——

「私の家族はさ、ここ最近の連続儀式殺人の被害者なんだよ。その犯人が描いていた魔法陣から、キャスターが召喚されて、私はこの戦いに巻き込まれた。私にはもう家族がない」

「ここで生まれ育ってきた15年間、私は間違いなく蓮葉識姫だった。私の前世は本物だ。だがそれは蓮葉識姫を否定する材料にはならない。母に叱られた。父に甘えた。弟と喧嘩した。その思い出は、紛れもなく本物だ。本気で泣いて、本気で笑って、本気で愛していたからこそ、私は今こんなにも死にたい。」

「だから私にとっちゃ守りたい物なんてこの街には微塵も残ってない」

そんな風に思えるのならどれだけ楽だろう。

「んな訳ねえだろうが!!」

「お母さんが!お父さんが!勇樹が!!生きた痕跡がこの街にはある!!もう私には何も残ってないけどさあ!どれだけ思い出すのが辛くてもっ!!この街は私の家族が生きた場所だ!!それをそんな易々と捨てられる程私は大人じゃない!!そんな簡単に大人になんかなれない!!なれないんだよお……………!!」

ボロボロと涙が流れていく。今もまだ死にたくて、死にたくて。それでも生き残ると決めたのは、家族の痕跡が無くなってしまふのが耐えられないから。

私というイレギュラーがいる時点で、原作通りなんてものは既に存在しない。冬木の大火災が冬木だけで済む確証も無い。もう、どうするのが正解なのかなんて分からない。

「俯くでないわア!!」

突如放たれた大声に、思わず跳ねるように目を向けた。そこに居たのは、紛れもなく征服王イスカンドル。腕を組み、王威を纏った彼の姿に呆気に取られた。

「大望に臨む英雄が前を見ずしてどうする!!」

「……………私は英雄なんかじゃない、ただの小娘だ」

「何を言う。娘、そなたは数日前まで間違いないただの小娘だったのだろうか？そんな小娘が家族の為、街を守らんとする。それを英雄と呼ばずして何と呼ぶと言うのだ」

イスカンドルがニカリと笑い、続ける。

「そも初めから英雄などという者はそうはいない。このイスカンドルたる余とてそうだ。よいか娘、英雄とは！何かを成そうと歩み始めた者!!逆境に立ち！それでも尚、歩みを止めぬ者のことだ!!」

ビリビリと空気が揺れる。圧倒的なカリスマ故か、その言葉はすんなりと私の中へ入ってきた。

「故にこそ、前を向け蓮葉識姫。でなければ歩むべき道が見えなくなるぞ?」

「……………ありがとう、道を見失うところだった」

「ぬははは!!なあに、礼には及ばん!!」

その大きな手でワシヤワシヤと頭を撫でられる。その力強さに、私はお父さんのことを思い出したのだった。

5. 激戦

「あ、が……」

蟲が身体を蝕んで行く。全身に走る痛みに耐えながら、男は必死の思いで蟲を操り、一人の少女を探していた。

「が、あ、あ、あ、あ、あ、あ!!」

蹲り、血反吐を吐き、血涙を流しながら男はそれでも魔術を行使する。冬木の街を、無数の蟲が闊歩する。大通りだけでなく路地裏、はては郊外の居住地に至るまで。そうして己の身を削りに削り、ついに彼は少女を見つけた。

「待っててね桜ちゃん、直ぐに、助けに……」

朦朧としたまま呟く男の瞳は、妄執に囚われていた。

「直死の魔眼ンンンン!!?!」

「やかましい、桜が起きるだろ」

シエヘラザードの真名とできることを伝え、一頻り立ち回り方を決めた私達は早速柳洞寺へと向かっていった。地下の大空洞に入るのは無理だろうが、調査だけなら可能だろう。直接調べられる訳では無いいため時間はかかるだろうが、まあそこも考えてある。

と、そんなおり、ついでだからと私のもつ能力やら何やらについて説明を始めたところ、これである。まあ驚くのは分かるがそう大声上げるのやめろ。

「じ、実在したのか……!!?それ都市伝説みたいなものだろ……!!?」
「知らんがな」

まあ言っても、多分日本中探せばあと二人位は頑張れば見つかるだろう。

「命を脅かさない限りは研究とかも手伝うよ」

「い、良いのか……?」

「私にとつちや、こんなもん思い出さたくない記録を思い出させる起点でしかないから」
つくづく私の起源は私と相性が悪い。

と、そこでウェイバーは私が記憶ではなく記録と言ったことが気になったようだった。丁度いいと私は説明することにした。

「これはね、私の起源なんだ」

起源『記録』

前世を思い出すと同時に覚醒した私の起源。私という受動器が観測したありとあらゆる情報を、私は肉体と魂に記録する。今こうして適当に話している内容すら、私は何百年後になっても完璧に再現できるのだ。

「完全記憶能力みたいなものか……？」

「いや、少し違う」

完全記憶能力はあらゆる情報を忘れないものであるのに対し、私のこれは記録を忘れることはある。だが忘れたものでも即座に思い出せるのが私の起源。必要と感じたり、その情報と強く関連性を感じる情報を得ると勝手に思い出したりもする。

この起源のせいで、私は直死の魔眼を使う度に家族の最期と前世の最期の両方を問答無用で思い出してしまふのだ。

「本当、忌々しい起源だよ」

「……………」

例えば昔から私はものを覚えるということが得意だった。いわゆる暗記科目とか言われるもののテストでは点を落としたことも無い。ただ、起源を明確に自覚した結果その性質は強くなっている。以前まではあくまで覚えるのが得意程度だったが、今では間桐邸から奪った資料を軽く見通しただけでその内容を完全に網羅出来る程だ。

「だから資料を貸出じゃなくて譲渡なのか」

「そういうこと……………止まって」

周囲を見回す。見る限りでは異変は無いが、微かに聞こえるこの羽音。なるほど、存外早く見つかったらしい。ライダーが霊体化を解く。緊急時は一先ず彼のみが霊体化を解き、ライダーのみでは対処が難しいと判断した場合キヤスターも、といった流れを取ることにしたが……………

（キヤスター）

（よろしいのですか……………？）

（相手はバーサーカー、流石にライダーが一人で対処するには状況が宜しくない）

そう伝えるやいなや、私達の進行方向に黒いモヤが集まり、黒甲冑の狂戦士が現れた。仮に私もウエイバーも戦車に乗っていたならともかく、この状況では戦いに巻き込まれて死にかねない。

「ライダーが全力出せる距離まで離れるから時間稼いで！場合によっては令呪で呼ぶ！」

「了解しました。しばしお願い致します、征服王」

「よかろう」

ライダーが戦車に乗り、シエヘラザードが杖を構える。戦いが始まったのを見てか

ら、私達は真逆の方向へ走り出した。

「な、なあ!?!こんなに逃げる必要あるのか!?!」

「バーサーカーだけならね!」

柳洞寺という、冬木でも特級の霊地。そこへ向かう怪しい存在。そんなものを見逃してくれる程、この第四次聖杯戦争のマスター達は甘くない。そもそも、私はすんなりと柳洞寺に行けるとは思っていなかったし、ライダーやシエヘラザードもそうだろう。

「っ!前方に魔力!」

「桜を抱えといて……」

やかましい羽音が響く。まあ来るなら一番だろうとは思っていた。懐から取り出すのはホームセンターで購入しておいたナイフだ。

「これに強化魔術かけられる?」

「それ意味あるのか……?」

「耐久性という意味では」

仮にナイフを蟲に壊されれば、後に控えているであろう相手に詰みかねない。

ウェイバーがナイフに強化魔術をかけ終える。それとほぼ同時に、薄暗闇の中から今にも死にそうな男が現れた。彼は間桐雁夜。目の前以外何も見えていない患者だ。

「桜ちゃんを……返せ………!!」

「断ると言ったら?」

「殺すツ!!」

蟲共が襲いかかってくる。そのキレも、数も、間桐臓硯に比べれば酷くお粗末なものだった。

ただ、間桐雁夜はまだ遠く、夜闇故に暗く、蟲共によつて視界が遮られている。あの男にぶち当てるのはまだ無理だろうが………

(蟲を一掃するには十分か)

—— 『絶死の偽眼』
コトミバロール

蟲共が次々と事切れ、ボトボトと地に伏していく。残ったのは間桐雁夜とその近くにいた極僅かな蟲だけだ。

つう、と目端を血涙が流れていく。

「お前、一体何をしたんだ………?」

「簡単に言えば、死の光景を頭に叩き付けた」

『絶死の偽眼』

それは私が持つ、サーヴァントで言えば宝具に値する切り札だ。対象を睨み付け、それによつて脳に極僅かな時間だが「己は死んだ」と錯覚させる魔眼。出力によっては、これだけで人間は廃人になるだろうし、下手をすればサーヴァント相手でも数秒動きを止め、その後のキレを鈍らせることができるだろう。

そんなものを、魔術とはいえただの蟲が喰らえばどうなるか。簡単だ。その矮小な頭では「死の錯覚」という莫大な情報量を処理し切れず息絶える。

「間桐臓硯を殺したのは私だぞ？その完全劣化でどうにかできると思つたか？」

苦々しい顔をしているようだが関係ない。どう足掻いても、間桐雁夜がこの聖杯戦争で勝つことは無い。あとは精々が言峰綺礼を目覚めさせるだけ。それ以上の役割はもう無い。ならば、せめて今後苦しまないように――

「――殺してあげる」

駆け出す。それに呼応するように無数の蟲が襲いかかってきた。とはいえその総数はかなり少ない。すれ違いざまに、その胴体に走る死の線をナイフで撫でていく。切断され、汚らしい液体を撒き散らしながら墜落する蟲に目もくれず、私は前へ前へと間桐雁夜のもとへ突き進む。

そうして、あと数メートルというところで、私はその場を飛び退いた。
パン!!

数瞬遅れでその場に響いた乾いた音。砕けるアスファルトがその威力を如実に伝えてくる。

パン!!

「ぐ、あ、あああ、ああああ?!?!」

二度目の銃声、そしてその後の叫び声。今度は私ではなく間桐雁夜を狙ったものだった。どうやら空中にいた蟲によって弾道がズレたらしく、本来ならば脳天をぶち抜いていたであろう弾丸は片耳を吹っ飛ばすだけにとどまっていた。

ほぼ間違いなく、衛宮切嗣。あるいは久宇舞弥か。

(恐らく、あと少しすればセイバーとアイリスフィールも来る……………)

極論そこでアイリスフィールを殺せば私の目的は達成できる。そこに戸惑いは無いが、実際それが可能かと言われればそうでは無い。その上、下手をすればライダー陣営を除く他全ての陣営から恨みを買いかねない。衛宮切嗣の所在は知れず、次の狙撃が誰に向けられるかも分からない。後からセイバーが来てしまう可能性からこの場を離れるのもリスクが高い。

ならば

「令呪を以つて命ずる!!」

命令を口にする。一画目の消費。問題ない。最悪使い切つても、目的さえ達成出来れば私達にとっては勝ちだからだ。

背後に現れる気配。令呪は問題なく作用したらしい。目を向けることなく、ナイフを持たない手でウェイバーと桜を指差す。

「その二人守つて!! 場合によっては宝具も可!!」

返事を待たず、私は前方で悶える間桐雁夜の股間に向けて蹴りを入れた。泡を吹き倒れようとする間桐雁夜の懐に入り込み、その体を肩で担ぐ。刻印虫にやられた身体は思つていたよりも軽い。そのまま間桐雁夜の身体を盾代わりにし、銃弾の飛来した方向へ駆け出した。

恐らく、衛宮切嗣は雑木林の中にいる。夜で視界はまともに機能しないが、私には死の予感がある。銃口が向けられた瞬間その大まかな位置は把握できる。

パン!!

銃声。おおよそ11時の方向、距離は恐らく80m程。軽く進路を変え、なお止まることなく突き進む。

パン!!

二発目。再び11時の方向、距離60m程、恐らく移動しているのだろう。間桐雁夜

の左腕にヒット。辛うじて繋がってはいるがその内ちぎれるだろう。身体にかかる血液の感触に表情が歪む。

パン!!

三発目。12時の方向、距離40m程。間桐雁夜の右足の膝から下が無くなった。ここまで近付けばもう要らない。乱雑に間桐雁夜を捨て、銃声の方へ走る。今日は月が綺麗だ。おかげでこの暗闇に目が慣れた。

次の瞬間、私の体に突き刺さる無数の死の予感。その順番を記録し、一つ一つを確実に回避する為のルートを探索する。

ダダダダダダダ!!!

先程とは違い連続する銃声。木々を盾にし、転げ回り、身を振って回避する。いくつかの弾丸が掠め、私の身体に傷を作っていく。木片が砕け散り、土が舞うのを間近に感じながら、数秒。

「見つけた」

距離、5m程。私は衛宮切嗣の姿を捕捉した。

6. 死線をくぐり抜け、その先へ

(驚いたな……………)

衛宮切嗣は、銃弾の雨を避け、身体に多少の傷を作りながらも、動きに支障のあるような傷は一切受けることなく己の目の前まで到達した少女を前に思案する。右手にナイフを握り、緩りとした体勢でコチラを睨み付ける彼女の姿には、しかし熟達した技能のようなものは感じなかった。

(並外れたセンス、と言ったところか……………)

約1時間前、舞弥の使い魔が発見したライダーのマスターと正体不明の二人の少女。向かう先が柳洞寺と知り、彼はその少女のどちらかが間違いなくキャスターのマスターだと確信した。準備を整え、アイリスフィールを通じてセイバーにも柳洞寺に向かうよう伝えたあと、現場で見つけた少女は既にバーサーカーのマスターと思わしき男と交戦状態にあつた。

(警戒すべきは蟲を一掃した魔眼と思わしき攻撃と、蟲を一撃で殺す謎の手腕)

好機と放った弾丸は、しかして回避された。即座にバーサーカーのマスターへ弾丸を放ち、その耳を吹き飛ばした瞬間、少女は迷わず令呪でキャスターを呼び出し、バーサー

カーのマスターを盾にコチラへ突貫。銃声を頼りに近付かれ、果てはキャリコによる掃射すら避けきった。その手にはナイフ一本だけ。魔術を使用した形跡も無かった。

(状況を判断する能力も高い。あの場で即座に令呪を切られたせいで舞弥が狙撃することも出来なくなった。その上、僕の方へ突貫してくるものだから僕自身コイツに集中せざるを得なかった)

運に助けられた部分はあるだろうが、切嗣はこうして目の前にいるのは間違いない。少女の實力によるものだと分析する。

(魔術を使っていない以上、起源弾との相性も悪い。初撃を避けられたことからして……………)

彼と久宇舞弥以外分からない合図を送る。それに合わせて、舞弥は少女、識姫に銃口を向けるが、途端に彼女は瞳を舞弥のいる方向へ滑らせた。

(不意打ちは不可能と見ていいか……………)

厄介だ、と舌打ちするのを堪える。距離や状況、各々の装備を鑑みれば圧倒的に切嗣が有利。だがそれを覆しうる未知を無数に持ち合わせているのが識姫だった。

識姫が身を低く構える。それに呼応して切嗣はキャリコを構えた。弾かれるように駆け出した識姫に向けて弾丸の雨が迫る。だが身を大きく動かし、木々を盾代わりに進む彼女には一発たりとも当たることは無かった。

距離にして2 m。

もはや距離とも言えぬ位置まで辿り着いた識姫はナイフを振りかぶった。しかし切嗣はそれをバックステップで回避。続く二撃目。逆袈裟に放たれたナイフは、その軌道からして明確に切嗣の肉体を捉えた。

しかし

Time alter
 (固有時制御) ———— double accer
 二倍速)

衛宮切嗣の魔術が真価を發揮する。二倍速になったことによりナイフを回避した切嗣は即座に手榴弾を投擲した。そしてその速度でもつて爆破の範囲外に退避する。

爆破まで残り数秒。良くて致命傷、悪くて即死の一手。内心、切嗣は勝ちを確信する。仮に、相手が普通の少女だったのならば、これで終わっていただろう。

蓮葉識姫は普通じゃない。

死が迫る刹那、彼女の脳裏を無数の情報が駆け巡る。それは俗に走馬燈と呼ばれるもの。だが識姫の場合、そこに生まれる意味は絶大となる。それは、今までの記録全てを一瞬のうちに網羅するということ。走馬燈を見るのは、打開策を探すためだという説がある。識姫の場合、説でもなんでもなく今までの記録から打開策を編み出すのだ。

一つの図書館にも勝る莫大な記録から選ばれたのは、今世の記録から問桐の魔術書、ウェイバーの施した強化魔術、前世の記録から、英霊エミヤ衛宮士郎。そしてその他無数の補填情

報。それ等が束ねられ、練り上げられ、ある一つの魔術を蓮葉識姫の身体へ刻み付けた。
Record stop
「記録終了」

左手に現れたサバイバルナイフが手榴弾を切り裂く。不発弾と成り果てたそれに一瞥をくれることもなく、識姫は両手のナイフを切嗣に向けて投擲した。切嗣は固有時制御の反動で軋む身体に鞭を打ちそれらを回避した。

投影魔術。10の魔力で3や4の性能の物品を作り出すという魔術だ。その性質上、まともに利用されることの無い魔術だが、記録という起源を持つ識姫にそれは当てはまらない。

投影魔術は己の中のイメージを利用する。普通であれば穴だらけのイメージ故にまともな物は作れない。だが、彼女のイメージ記録に綻びは存在しない。完璧なイメージから形成された投影は識姫の起源によって世界に記録される。故に、識姫の投影は破壊されてなお消えることは無い。

(無闇に投げると拾われて利用されかねないな……)

識姫は再び記録を辿る。そうして、右手に真っ黒なマチエツトが握られるやいなや駆け出した。放たれる斬舞。横薙ぎ、袈裟、逆袈裟、突き。無数に組み合わさった刃の連なりが、切嗣の命を殺さんと迫る。

辛うじて、ギリギリのところまで回避を続ける切嗣。しかしそんなものはそう長く続か

ない。遂に避け切れず刃が切嗣の首を捉えんとした時。

Bannon!!

銃声と共にマチェットの刀身が砕け宙を舞う。識姫が距離を取り、今度はククリナイフを投影したのを確認しつつ、切嗣の思考は急速に回転していた。

(なるほど、コイツ自身を狙わなければ察知はされないのか)

消えない投影、不発弾と化した手榴弾など疑問は尽きない。だがそんなことは今考えた所で意味は無い。混乱しかけていた頭を今一度冷静な状態に保ち、切嗣は思考を続ける。

識姫の投影、そこに使われる魔力は少ない。魔力切れは期待するだけ無駄だろう。そして、魔術をあまり使わない以上起源弾も効果は見込めない。狙撃は避けられ、爆発物は無力化され、切り札すら有効打とは言えない。切嗣にとつての相性は最悪と言って良かった。現状が続けば負けるのは切嗣だろう。

だが、時の運は切嗣に味方をした。

突如発生した莫大な魔力の反応。それが意味するのは――

(宝具か……!)

セイバーが聖剣の真名を解放する場面ではない。それ故、必然的に宝具の発動主はキャスターになる。そしてそのキャスターのマスターはその事を理解した瞬間、切嗣に

目もくれずにキャスター達のいる方向へ弾かれるように走り出した。

『撃ちますか?』

「……………いや、弾薬が無駄になるだけだろう」

近くの木に寄りかかり、タバコに火を付ける。煙を肺に取り込み、吐き出す。立ち上る煙を見上げながら、切嗣はボソリと呟いた。

「厄介なことになったな……………」

その数十秒後、切嗣は行動を再開した。

(ふう……………どう、致しましょうか……………)

眼前にいるのは、二人の女。一人はひたすらに白という印象を受ける美女、もう一人は甲冑に身を包んだ美少女。その手には不可視の聖剣。その二人を前に、キャスターは思考する。

(対話は……………難しそうですね……………)

ふう、と再びため息をつく。どうにもキャスタターというクラスが信用ならならしい。かの騎士王の周りにいた魔術師が、人でなし 国家転覆を狙う姉 妖魔と魔女と総じて碌でもない者ばかりだったのもあるだろうが。

しかし、シエヘラザードはただの語り部。魔術の知識は生前の書物からあれど使う事は出来ず、とても魔術師と言えたものではない。

「杖を構えるがいい」

「……………見逃して頂くことはできませんか?」

「戯言を」

そう言い剣を構えるセイバー。こうなればもはやどうしようも無い。シエヘラザードは杖でコンコンと地面を叩く。瞬間、周囲に無数の光の玉が現れた。淡く光るそれらは軽快な音と共に弾け、様々な形へと変化する。ターバンアを巻いた盗賊バ、巨大で青い肌を持つ魔神、空を舞う様々な魚類、二足で立つ狼三匹の子豚、鎚一を携寸えた小人法師、ユラユラと揺れる亡霊桃太郎、三体の獣白、リングを持った魔女姫。そのほとんどが彼女が語ったものではない。

「それではしばし、御付き合ひ頂きましょう……………」

千と一の夜に語られた物語達を操る彼女だが、しかし物語に含まれるというアラジンの物語は後付けだ。その一要素が、彼女の宝具の拡張性を跳ね上げた。重要なのは、あ

くまでその物語が他者^トを楽しませるものであるかどうか。彼女の口に語られるべきかどうかの決定権は彼女にある。

物語がセイバーに襲いかかる。古今東西、過去、未来、現在、その全てにおいて物語は全て彼女のもの。差し詰め王^{ゲート・オブ・パピロン}の財宝の物語版と言ったところだ。

「これは……!?」

盗賊が刃を振るう。魔神が火を吹く。ただ舞うだけで時間感覚を狂わせる魚類が空を踊る。規格外の肺活量をもつ狼が咆哮する。小人が盗賊の刃を巨大させる。亡霊が夢と現の感覚を曖昧にする。獣達が鬼をも殺す一撃を放つ。魔女が永遠の眠りへ誘う。

「くっ、小癩な!!」

堪らず聖剣を解放したセイバー。いくつかの物語達が切り捨てられ、溶けるように消える。だが足りない。それだけで蹴散らせる程、彼女の物語は弱^{つまらなくない}くない。再び現れた物語達。そうして物語が戦う合間、シエヘラザードが杖を振るう。

「騎士王様へ語るのであれば、やはり馴染み深いものの方が良いでしょう」

そうして現^{語られる}れるのは多種多様な魑魅魍魎^{ワイルド}の群れ。ブラックドッグ、デュラハーン、パンシー et c. そう言った様々な伝承上の怪物達がセイバーを、アイリスフィールを軍団に加えんと行進を始める。

「なっ!!」

「ご存知の筈……………」

東洋、西洋、中東。あまりにも一致しない物語の並びにセイバー達は困惑していた。そして何よりセイバー自身が感じる奇妙な戦い辛さ。

程なくして、遂にセイバーの肌に傷が付けられた。即座に治療魔術を使うアイリス
 フィールだが、そこに違和感を覚える。

(治りが遅い……………!?)

初戦にてランサーに付けられた傷の様に治らない訳ではない。だが明らかに遅い。魔力が滞っている訳ではなく、毒や呪いがある訳でもない。そうして理由に行き着いた
 アイリスフィールは焦ったようにセイバーに向けて叫んだ。

「気を付けてセイバー! そのキヤスター、貴女に対して何かしらの特攻を持っているわ
 !!」

「っ!なるほど……………」

王特攻。シエヘラザードの持つそれは、王が相手である限りあらゆる面で有利にことを運ぶことが可能となるものだ。そしてそれは彼女自身の気質と組み合わせさせた結果、
 防衛、足止めの際には類稀なる効果を発揮する。

「だが大半の攻撃は魔術的なものです。私には効かない」

「ええ、貴女には効かない」

いつの間にか居なくなつた盗賊。そしてその言葉の意味を、セイバーは迅速に理解した。

「アイリスフィール!!」

「え?」

アイリスフィールの背後、そこに出現した盗賊が刃を振るう。それに駆けつけようとセイバーは踵を返そうとするが、無数の物語が邪魔をする。間に合わない。そのあまりにも無慈悲な直感。アイリスフィールの首が飛ぶ光景を幻視する。

しかし

ギィィィィィン!!!

凶刃は、二本の槍に防がれた。

「ランサー!?!」

「勘違いするなよセイバー。マスターを殺されて敗退などされては俺の気が済まん」

そんなやり取りをする二人を他所に、シエヘラザードは深く、深くため息をついた。それと同時に、物語を消していく。その様子に、改めて警戒するセイバーとランサー。

「なんのつもりだ……………?」

「この状況では勝ち目がありませんので……………」

そう告げた後、彼女は杖を消し、代わりにその手に一つの巻き物を取り出した。それを開いた瞬間、そこに込められた莫大な魔力。それが意味するのは――

「――宝具」

それは、彼女が語った物語。千と一の夜、その始まりの物語が記された書物。

「これは私の言の葉が紡いだ、終わりになき願いの物語」

世界すらも信じさせる規格外の現実感でもって、世界を物語に置き換える宝具。

『アルフ・ライラ・ワ・ライラ千夜一夜物語』……………」

大怪鳥の頭上にて、彼女は物語る。

「もうしばらく、御付き合ひ頂きましょう……………」

物語は、まだ始まったばかりだ。

7. 決着、あるいは幕間

キャストアの宝具解放。それを察知した私は急いで彼女達が居た場所に向かった。

(キャストア！状況は!?)

(ランサーが現れたので宝具を使用しました。現状は結界内で足止め中といったところです)

(……………倒せそう?)

(……………難しい、ですね……………)

予想通りの返答。これで私が才能溢れる魔術師ならばこの返答は違ったものになっていただろう。投影魔術が使えたり、こうして彼女との契約が切れていない以上私にも魔術回路はあるのだろう。だが如何せん数が少ない。潤沢に供給出来るほどの魔力は持ち合わせていないのだ。

(……………ウェイバーにライダーを呼ぶように伝えて)

(了解しました)

セイバーとランサーを仕留めるのは無理だろう。だが無傷で済むとも思えない。そ

の隙を突く。必要なことを考える。私がやるべきなのはセイバーやランサーを殺すことでは無い。というか無理だ。だから必要なのはあくまで隙をより大きなものにする
こと。

魔術回路に魔力を通す。発動するのは当然投影魔術。創り出すのは先程見たばかりの物品だ。

「記録終了」
Record stop

左手に現れたのはキャリコ。先程衛宮切嗣との戦いで記録した物だ。弾丸も全弾装填されている。右手には手榴弾。こちらも同様だ。サーヴァント相手にこんなものは効かない。だが人間相手ならば致命的な一撃となる。

（私の言ったタイミングで宝具を解除して！アイリスフィールを狙って隙を作るから、その後ライダーの戦車で柳洞寺までぶつちぎる!!）

こうなるなら初めからライダーの戦車で柳洞寺に向かうべきだった。あくまで調査が目的。それ故私は柳洞寺を工房にするつもりはなかった。戦術的、魔術的に最高の立地と言える柳洞寺はそれ故に警戒される。生き残ることを目的にする以上目立つのは好ましい展開ではない。

（昼間に行つてたら……いやそれも無理か……）

柳洞寺に続く道は昼間でも人通りは皆無に等しい。夜と同じようには言わないが、

サーヴァント同士の戦いが成立し得る場所ではある。

しばらくして、血痕の残った道路が目に入った。柳洞寺の方からはライダーの戦車が駆ける音が響いている。

(キャストー!!)

念話の直後、目の前にキャストー達が現れた。即座にアイリスファイルに向けて手榴弾を数個投擲。空になった右手にもう一丁キャリコを投影し、魔術で腕力を強化しつつ乱射する。

「ライダー!!」

「まったく人使いの荒い娘よな!!」

ライダーが桜とウェイバーを片手で抱え、私を走りざまに回収する。キャストーは霊体化させた。目的地が柳洞寺である事を伝えると同時に戦車が加速した。

「逃がすかア!!」

聖剣を構えたセイバー。魔力放出による狙撃を狙っているのだろう。聖剣の輝きが増す。そして——

「Arrrrrrrthurrrrrrrrrrrrrrr」

その一撃は狂戦士によって阻まれた。!!!!!!

「は?」

高速で駆けるライダーの戦車の上で、私の視線はバーサーカーに釘付けになった。おかしい。おかしいのだ。間桐雁夜は死にかけていた。あの状況でライダーと戦うバーサーカーに魔力を持って行かれれば即死してもおかしくない。そうなれば魔力消費の激しいバーサーカーはとつくに消滅しているはず。

(……………まさか)

視線を巡らせる。だがただの人間の目では、森の暗闇を見通せるわけが無い。それでも、私には半ば確信じみた予想があった。

(言峰綺礼……………)

恐らくこの聖杯戦争で最も厄介な人物の名を思い浮かべながら、私は戦略を練り直すのだった。

深い森の奥。アインツベルンの城。その一室にて、戦いを終えた切嗣とアイリス
ファイルは会していた。

「評価規格外の宝具に、セイバーに対する正体不明の特攻……か」
「とんでもない難敵が現れたわね……」

話の内容は、言わずもがなキャスター陣營の話。今はアイリスフィールが見たキャスターの能力についての情報共有をしていた。

「真名は分かっただのかい？」

「ええ、宝具の名は千夜一夜物語だった。それが宝具になると言うのなら……」

「その語り手、シエヘラザードが真名というわけか……」

その真名に、彼はどこか納得したような素振りを見せる。

「シエヘラザードはただの語り部だ。何か明確な弱点の逸話がある英霊じゃない。加えて戦闘の方法は無数の物語を操るというもの。真名が晒されるリスクは無いに等しい」
「そうね……秀でた物は無いにしろその対応能力は凄まじいの一言だったわ」

「厄介極まりないな……」
「……………」

天井を仰ぎ見る切嗣。昨夜セイバーが生き残ったのは、マスターのもつ魔力量が少ないのが原因だろうと、彼は考えていた。改めて、相対した少女の姿を思い浮かべる。あらゆる面が素人と言っただけだと言うのに、その身から発せられる鋭過ぎると言っただけではない殺気。

「ねえ切嗣。あのマスターって何者なの？」

「一応、名前や素性は簡単に調べがついた。だからこそ、その正体がより分からなくなっ
てしまったけどね……………」

アイリスファイルの問いに答えるように彼は机の上の資料に目を向ける。そこにあ
るのはある学校の生徒の個人情報と、ある事件の記録だった。

「名前は蓮葉識姫。穂群原学園中等部3年生。経歴にも偽装は無い。成績は優秀で生活
態度も模範的。武術の経験は無し。当然、殺人等の犯罪歴も無い。典型的な優等生とい
うやつだ」

「とても昨夜会った子と同一人物とは思えないわ……………」

銃器に手榴弾。それらを駆使し、明確に命を刈り取ろうとしてきた少女の姿を思い浮
かべる。だがその姿は切嗣から聞かされたものとは微塵も合致しない。

「何かあったとするなら、これが原因だろう……………」

「これは……………」

「この街では、数日前まで連続儀式殺人事件が起きていた。彼女の家族はその事件の最
後の犠牲者だ」

「それは……………」

痛ましい事件。それに目を伏せたアイリスファイルは合点がいった。家族の惨殺、そ

んなものを経験すれば、人が変わってしまいうのも当然だろう。

「でも待つて切嗣。それならどうして彼女は生きているというの？」

「言っただろう？最後の犠牲者ってね」

「どういうこと……………」

「現場には、彼女の家族の死体とは別に、もう一つ死体があった」

「まさか……………」

「一応、警察は返り討ちにされた犯人と見ている」

アイリスファイルはその死因について記述された部分を視線でなぞる。それと同時に彼女は眉を顰めた。

「頭を上下に切断……………」

「左の頬骨あたりから、右眼を通してこめかみのあたりに向けてキレイに切断されていたらしい。しかし凶器と思われる物はその場になく、あったのは15cm定規のみ。凶器があったとして、包丁やノコギリなどでは到底再現不可能な程鮮やかな切り口。そこそ達人が日本刀を使って斬ったとしか言えないレベルのね」

「あのキャスターによるものかしら……………」

「いや、恐らくあの少女自身によるものだ。その方法はまだ分からないけどね」

昨夜見せた、不可解な切断能力。彼はそれであれば可能だと結論付ける。

「……………」

「ねえ切嗣、少し休みましょう？あなた、ここ数日まともに眠れていないわ」

「そういう訳には行かないさ。柳洞寺に陣取られた以上手をこまねいてれば加速度的にキヤスターを仕留めるのが難しくなっていく。アイリ、君は休んでおいてくれ。君に倒れるのが一番困るからね」

「……………ええ、わかったわ」

その言葉を最後に、二人は会話を終えた。

「貴様は一体何を考えているのだ!!？」

「……………」

怒りの声を上げるのは、高貴な雰囲気醸し出す金髪の男だ。名を、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。時計塔にて君主ロードの名を戴く者だ。

彼の怒りの矛先、それはフィオナ騎士団が一番槍。名を、デイルムツド・オディナ。此

度の聖杯戦争にてランサーとして召喚されたサーヴァントだ。

「何故セイバーのマスターを助けた!? あのまま放っておけばセイバーは脱落していたのだぞ!」

「……………どうかお聞き下さい我が主、私は」

「戯言はもう良い!!」

最早聞く価値も無いと断じて、ケイネスはランサーの言葉を遮る。こめかみに青筋を立てた彼は更なる叱責を飛ばそうとしたところで、背後からの声にそれを遮られた。

「ケイネス! 彼を責めるのは筋違いよ!」

「ソラウ! 何を言う!?!」

己の婚約者、ソラウの言葉にケイネスは強く動揺した。再びのソラウからの提言。内の動揺を隠す間もなくソラウは続ける。

「以前も言ったでしょう? セイバーは既に手傷を負っている。何れは討ち取れる敵よ!」

「だがあそこで助ける理由にはならないだろう!?!」

「アーチャーに、マスターを考慮しなければライダーという脅威があるわ。ランサーは短期的に効果の見込めるサーヴァントじゃない。だからこそ、瞬間火力に秀でているセイバーをそれらの脅威に対してぶつけるのが得策でしょう?」

尚も続くケイネスへの叱責。それに対して彼が表すのは困惑、そして怒りだ。実際問題、ソラウの言い分にも理解出来る点は存在する。だがそれはランサーへの擁護、彼に気に入られたいという願望から捻じ曲げられた穴だらけのものだ。現状、冷静さに事欠くケイネスはその穴に気付いてはいないがソラウの内の願望には薄々勘づいている。結果、その怒りはランサーへ向けられた。

「明日だ。明日の夜、アインツベルンへ襲撃をかける。そこで必ずセイバーを討ち倒せ！」

「御意」

綻びは、少しずつ大きくなっていった。

「……………」

「帰ったか、綺礼」

険しい表情のまま、言峰綺礼はアーチャーの目の前に立つ。目的は問い。アーチャー

が彼に命じた間桐雁夜を延命しろという指示の意図を問うため、彼は問い掛けた。

「何故、間桐雁夜を助けると言った？」

「何、言わば教材と言ったところだ。愉悦の何たるか、それを識るのにあれ程都合のいい人間はそうはおるまい」

眉を顰める綺礼。彼は愉悦というものを良く思っていない。それは彼が持つ、彼自身も未だ気付いていない歪んだ感性によるが故に。後、一つの世界線にて幸福を苦しみと、絶望こそを喜びだと断じるのが彼だ。未だ咲かぬ悪逆の蕾。それが彼だ。

「そんなものの為に己のマスターを裏切るとはな」

「戯け。そもそも前提が狂っておるわ」

自身こそが王であり、マスターたる遠坂時臣は臣下に過ぎないと言い切るアーチャー。傲慢の極み、慢心すら王たる者の特権。事実、それでも尚今回の聖杯戦争にて最強と言つて差し支えないアーチャー、ギルガメッシュにとつてみれば、マスターなどただ現世に身を置くための楔でしかないのだろう。

「ところで綺礼。我^{オレ}からも一つ聞きたいことがある」

「何だ？」

「何故、あの雁夜とかいうのを助けた？」

「……………お前が助けると言ったのだろう」

「フハハハハ!! 惚けるでないわ! 我の質問の意図は分かつておるだろう?」

ニヤニヤと表情を歪める彼に、綺礼は沈黙を貫いた。そんな彼にギルガメツシュは言葉が続ける。

「そも、我とお前の関係は同盟相手以上でも以下でも無い。我の指示を聞く必要など無い筈だ。だが綺礼、お前は従つた。それは何故だ? 師^{時臣}を思うのなら無視するのが道理であろう?」

「それ、は……………」

「……………まあ良い。この地には急いで事は仕損じるといふ諺もある。そうも早くお前の懊悩が片付いては我も詰まらない」

言い終わるや否や酒を呷るギルガメツシュ。

「だが忘れるなよ綺礼。今日、お前がアレを助けたのはお前自身^{自身}の意思によるものだといふことをな」

その言葉を最後にその場を去るギルガメツシュ。酒の匂いが漂う部屋の中、綺礼はやはり、沈黙していた。

8. 交渉（脅迫）

「お前、魔術使えたのか」

「火事場の馬鹿力みたいな感じ」

「そんなんで魔術が使えてたまるか!」

翌日、私達はフアミレスで食事を取っていた。あの後初めて魔術を使ったのもあつてか疲れて気絶するように眠ってしまった。その間に柳洞寺はキャスターが工房化。昨日はそのまま柳洞寺で休んだ。

「あんたの使った魔術を参考に使った」

「一回見ただけで再現したって言うのかよ……」

「私の起源忘れた?」

記録の起源は、既知の技術を模倣するという点においては凄まじい性能を発揮する。魔術だろうが体術だろうが、一度でも記録したならそれはもう私の物と言える。

「ただ投影魔術に関してはまだまだだからちゃんと言って欲しい。元の記録で使い方が荒いせいで魔力消費が馬鹿にならない」

「そうだ、それもおかしいんだよ。何でただの投影なのにあんなに性能が高いんだよ!」

「だから私の起源……」

「はあ、とため息をつくウエイバー。仕方ないだろ、起源なんだから。」

「まあいい……で、柳洞寺を放棄するってのはどういふことなんだ？」

「あー、放棄つて言い方は少し違つた。ごめん」

「食事をしているのが桜だけとなつたところでウエイバーが話を切り出した。今ここに居るのは腹ごしらえと、今後の作戦会議が目的だ。無いとは思うが、一応周囲に気を配りながら話を切り出した。」

「今、私達が確保してゐる拠点は3つ。これは良いよね？」

「ああ」

「マッケンジー夫妻宅、下水道、柳洞寺。これらはそれぞれが別のデメリットとメリットを持つてゐる。」

「まず、マッケンジー夫妻宅。ここは他二つとは比べ物にならない隠匿性がメリット」

「魔術師にしろ魔術師殺しにしろ、私はともかくウエイバーが魔術師であると考えて行動するだろう。ならばしっかりと工房を作り出すと考える筈だ。そういった思考の虚をつけるのがここだ。」

「ただいざバレた時の防衛能力が極端に低い」

「ならキャスターに工房作らせればいいんじゃないか？」

「いや、変にバレるリスクを抱えるのは得策じゃないと思う」

一切魔術的な痕跡を残さないからこそ、アサシン以外ならバレようの無い拠点足りえるのがこの拠点だ。わざわざリスクを増やす必要は無い。

「次に下水道。ここは他に比べてかなり立ち回り易いと思う」

「立ち回り易い？」

「防衛能力は柳洞寺には劣るけど充分に高いし、現状はバレてもいない。バレても立地的に逃げ道が多い。柳洞寺はさ、防衛能力つて点ではブツチギリだけど結界の影響でサーヴァントの逃げ道がほぼ無いに等しいでしょ？その上既に死ぬほど目立ってるし」

「なるほど……………」

「だから、基本的にマッケンジー夫妻宅と下水道を拠点に、大聖杯の調査が終わり次第柳洞寺は形だけの拠点扱いで囿にする。そうすれば他の陣営は私達がそこにいると思つて勝手に警戒して、他二つの拠点がより見つけにくくなる」

納得した様子の子のウェイバーと、食べ終わった桜を見て立ち上がる。

「とりあえず、ライダーと合流しよう。見つけときたいものもあるし」

「見つけときたいもの？」

街に出たのはある事の確認も兼ねていた。

街の人々の噂やら諸々から知ったことだが、一昨日冬木ハイアットホテルが爆破され

たらしい。昨日の晩、私達の所にランサーが現れたのを鑑みると恐らく今晚、ケイネスがアインツベルン城を襲撃する。

まあ、要するに私の探したいものというのは、

「ケイネスの新しい拠点」

「……………」

最高に嫌そうなウェイバーの顔はとても印象的だった。

夜。ウェイバーの使い魔がケイネスとランサー達がアインツベルンの森に入っているのを確認した私達は、昼間の間に見つけておいたケイネス達の新たな拠点の目の前に来ていた。現在、ここにいるのはケイネスの婚約者であるソラウ・ヌアザレ・ソフィアだけだろう。

「ほ、本当に行くのか？」

「今更日和るなって」

「坊主、お前さんなあ、年下の娘よりも怯えてどうする」

「うるさいなあ！コイツはちよつと違うだろ!」

「あの、あまりお騒ぎになると……………」

横で漫才を繰り広げる二人とそれを諫めるキャスターを他所に、予め投影しておいたサバイバルナイフで目の前の結界を破壊する。瞬間、今までモヤがかかったような認識がクリアなものになった。

「走ろう。逃げられたら面倒だ」

因みに左手には昨晚投影したキャリコがある。弾薬だけ投影すれば良いので魔力消費を抑えられて都合が良いのだ。

ウエイバー曰く、私の魔術回路は質に関しては一代目としては悪くないらしいが、かわりに数に関してははしつかり一代目相応の本数らしい。それ故、ナイフやら銃器やら魔術に関係ない代物でも衛宮士郎の様に作っては捨て作っては捨てみたいなことは出来ない。

閑話休題。

所々に存在するおかしな死の線の集合を避けつつ駆ける。幾つかの罨を殺しつつ数十秒程走ったところで、恐らくは魔術的な仕掛けの施された扉が目に入った。

「直死」

線をなぞる。ただそれだけであらゆる物が無意味な、終殺されたわつた後の残骸と成り果てる。特筆するべきこともなく崩れた扉を無視してその先にいた女に目を向けた。驚いたような顔をしつつこちらに掌を向け何かしら魔術を使おうとした瞬間、私はキャリコの引き金を引いた。連続する銃声。いくつかの弾丸が女、ソラウの足を貫いた。

「あ、ぐう!?!」

痛みに怯んだのを見計らって肉薄。下げられた頭に回し蹴りを叩き込む。吹き飛び、倒れ込んだ彼女は尚こちらに抵抗の意思を見せた。が、何かする前に傷口を踏み付け無力化する。

「い、がああ、あああ、あ!?!」

痛みにのたうつ間に両腕を拘束する。後頭部に銃口を突き付けた所で、痛みに耐え切れなかったのか彼女は気絶した。

「お前、躊躇とか無いのかよ……………」

「そんなことしてる余裕が無い」

引き気味のウエイバーに雑な答えを返しつつ、私は止血に取り掛かった。

処置を終え、後はケイネスとランサーが戻るのを待つのみとなった私達は思い思いに休みを取っていた。ライダーがイーリアスを読み、キャスターが桜を寝かし付ける。そんな折、ケイネスに渡す自己強制証明セルフキヤーススコントロールが完成した。そこで私を手伝っていたウェイバーが声を上げた。

「お前馬鹿なのか!？」

「いきなり失礼だなオイ」

「全ての令呪の譲渡なんて条件呑む訳ないだろ!!？」

騒ぐ彼にうんざりする。私の立ち回りは原作という規格外の記録を持っているが故のものだ。それ故私の行動に納得が行かない部分があるのはわかる。だがそれにしても一々騒ぎ過ぎだ。ああもう桜が目を覚ましただろ。

「大体！ケイネスがこの条件呑んだとして誰が令呪を受け取るんだ！僕もお前も既にサーヴァントがいるんだぞ!？」

「いるじゃん、契約してるサーヴァントがない子が」

「なっ!？」

驚きの表情と共に桜に目を向けるウェイバー。そう、私は桜をランサーのマスターに

するつもりなのだ。この後、想定通りならケイネスは起源弾を叩き込まれ、魔術師としては死ぬ。原作ではその後半は無理矢理ソラウが契約を引き継いでいたが、そのソラウは私達が確保した。この女が死ねば、ケイネスにランサーの現界を維持する能力は無くなる。そうなれば碌に動く事すら出来ないケイネスは何処ぞで野垂れ死にする羽目になる。そこに付け入るのが狙いだ。

桜は、曲がりなりにも遠坂の血を引いている。環境が悪かっただけで、魔術的な素養は遠坂凜のそれに勝るとも劣らない。まあ万全の状態のケイネスには劣るだろうが、ランサーが全力を出すのに支障は無いだろう。

「お前、それでいいのか……？」

「……………まあ、心情的に言えばめっちゃくちゃ嫌だよ」

まだ数日しか付き合いの無いウェイバーにこうして聞かれる程度に、私は桜へ情が移っている。だが私の心情がどうかそう言うのを考慮する暇は無いです。

「心配する暇があるなら、ライダーと一緒に柳洞寺に行つて調査を進めてよ。それが私達が生き残る為の最善だ」

「流石にリスクが高いだろ。白兵戦に秀でるランサーに対してお前のサーヴァントはキャスターなんだぞ？」

「その為のこの女だ。大丈夫、死ぬ事だけは無いよ」

その言葉に渋々納得したウェイバーがライダーと共に去って行ったのを見届けてから、私は再びウトウトとし始めた桜を抱き寄せた。

「ごめんね」

情が移っている、その言葉はきつと適切じゃない。これは多分依存とか、執着とか、もつと醜い感情だ。

「マスター……………」

「おやすみ桜。もうしばらくは、何も知らないままで」

私はいずれ桜を第五次聖杯戦争に参加させるつもりだ。だからこれは早いか遅いかの違いしかない。そう、私はこの子をこの戦いに巻き込む事を確定事項としている。そもそも情が移っているのなら、戦いに巻き込まないよう策を考える筈だ。

「そう、悲観的になるべきでは無いかと」

「いいや、単に事実を並べてるだけだよ。だって、今こうして生きているのだから私には精一杯なんだから」

死にたくて死にたくて死にたくて、でも死にたくなくて仕方が無い。生きている事が辛くて仕方が無い。だから私は今この瞬間だけでも生きる理由を探し続けている。この子は、それに都合がいいというだけなのだ。

「……………いいえ、マスター。貴女は——」

「来た」

シエヘラザードの言葉を遮る。視界の先、現れたのはケイネスを担いだランサーだ。「ソラウ殿!？」

桜を預け、改めてキャリコの銃口をソラウの脳天へ押し付ける。苦虫を噛み潰したような顔になるランサーを無視して指示を飛ばす。

「とりあえず、そいつの治療から始めようか」

あまりにも一方的な交渉脅迫を始めるとしよう。

9. 成立

「おお！名案が浮かんだぞ！」

「余計な事はするなよお前……………」

龍脈の流れからどうにか大聖杯の場所を逆算しようとしていたウエイバーは、突如声を上げたライダーに嫌な予感を感じた。そしてその予感は的中した。

「うわあ!!」

ライダーがウエイバーの首根っこを掴んで戦車へ乗せた。いきなりのことに声を上げたウエイバーはすぐにライダーに向けて抗議の目線を向けた。

「何処に行くつもりなんだよ！調査終わってないんだぞ!!」

「だからこそだ、坊主」

「はあ？」

まだ数日の付き合いでありながら戦車に乗せられる。何処かへ連れて行かれるという図式が頭の中で出来上がっているウエイバーは何をする、という抗議をすつ飛ばしてライダーの行動を咎めた。そうして返ってきた返答に首を傾げるウエイバーにライダーは続ける。

「聖杯が使い物にならんと知れてしまえば余の考えは意味を成さん」

「一体何を考えてるんだ……………」

「此度の戦いには余を含めて己こそが王であると語る者が三人もおるのだぞ？で、あれ
ばだ。誰が真に聖杯に相応しい」王「たる者か、語らぬ訳にはいくまいて！」

その言葉にウェイバーは彼を止めることを諦めた。

「まずは酒の調達だ。あの娘も連れてこねばならん」

「なんでだ？キャスターは王じゃないだろ？」

「目的はキャスターでは無いわ。お前さんでも気付いておるだろう。あの娘、やたらと
生きる気力に乏しい」

「……………」

口を嚙むウェイバー。ライダーの言葉に納得する部分があったからだ。

例えばケイネスの拠点に突撃する時。あの時も別に識姫が先行する必要は無かった。
結界を殺した後でライダーが突っ込む方が良かった筈だ。

「家族を喪ったからだろうな。あれは今惰性で生きておるつもりなのだろう」

「つもり？」

「そうだ。実際は全く違う。あれが生きておるのは、生きようとしておるのはその内に
ある絶望に身を焦がされてなお叶えたい願いがあるからだ」

「願い？なんだそれ……………」

「たわけ」

「あがあ!？」

額を弾かれたウェイバーが恨みがましくライダーを睨む。対してライダーは呆れ顔だ。何を当たり前のことを聞いているのかと言わんばかりに。

「坊主も聞いたとつただろうが、あの娘自身が己の願いを謳つたのを」

「……………あ」

そこで、思い出した。涙を流し、喚きながら。唯一年相応の姿を見せた、小さな小さな少女の姿を。

「だと言うのにあの娘は己の願いに気づいておらん。ならば王ではなく英雄たる者の先達として、英雄足らんとする者に示してやらねばならん。願いの何たるかをな」

言うやいなや、彼は手綱を握り、雷鳴を轟かせる。数瞬のうちに、彼等はその場から消えた。

「……………は、は……………」

「おはよう、ロード・エルメロイ」

目覚めた時、ケイネスに声をかけたのはランサーでもソラウでも無かった。動かない身体の違和感を押さえ込みつつ、彼は視線のみで声のした方を見た。

「あ、ああ……………」

絞り出すような声と共に、彼の頭は絶望に支配された。視界の先、そこにいるのは幼子を抱えたキャスターと銃器を持ったそのマスター、そして銃口を向けられ拘束された己の婚約者だった。

「な、ぜだ!? 何故貴様が……………!?!」

「それ、今重要?」

言葉と同時に、識姫はソラウの頭へ銃口を押し付けた。その様に表情が強ばるケイネス。そんな彼に識姫は交渉を始めた。

「まずお前の状況から説明しようか」

識姫は淡々とケイネスの身体の状況を述べていく。それは魔術師としても、人としてもマトモに生きていくことが難しい程の深刻な負傷。あまりの状況にケイネスは更に絶望に打ちひしがれた。

「では何故、お前はランサーの現界を保っているのか」

「それ、は……………」

「理由は単純。手段は知らないけど、この女が魔力供給を肩代わりしているからだ」

実際、ケイネスは魔術による治療無しには意識を目覚めさせることすら無く死んでいた。なまじ生き長らえたとして、魔術回路は完全に使いものにならなかつただろう。そしてそれは現状でもそう変わらない。

「要するに、この女を殺した時点でお前は遠からず終わる」

「……………要求はなんだ」

「話が早くて助かる」

銃口はソラウへ向けたまま、識姫はケイネスの下へ移動し、一枚の紙、セルフギアス・スクロール自己強制証明を見せた。その文面へ、ケイネスは目を滑らせていく。

束縛術式：対象 蓮葉識姫

蓮葉の刻印が命ず

下記条件の成就を前提とし、誓約は戒律となりて例外なく対象を縛るもの也

：誓約：

蓮葉家一代目当主蓮葉識姫に対し、第四次聖杯戦争終結に至るまでのケイネス・エルメロイ・アーチボルト並びにソラウ・ヌアザレ・ソフィアリの両人の生命の安全を義務

付ける。

：条件：

第四次聖杯戦争終結に至るまでの蓮葉識姫への完全服従

並びに、現時点でケイネス・エルメロイ・アーチボルトの所持する全令呪を間桐桜へ譲渡すること。

(これ、は……………！)

それは、言ってしまうとケイネスへ向けられた命を除いた全てを捨てろという通告そのものだった。そして従わなければ、唯一許されたその命すら失うこととなる。

「あぁっ……………ソラウ……………！」

選択肢など、無いようなものだった。

「これで、お前には強制ギアスが……………？」
「そうだ」

ケイネスの手の甲からは令呪が消失していた。対して、桜の手の甲には一枚の花弁が欠けた花の文様が刻まれている。彼女がランサーのマスターとなったことの証明だった。項垂れ、眠るソラウの姿に安堵するケイネス。現時点で彼は抜け殻とでも言うべき状況だった。

「桜、ランサーを呼んでくれる？」

「は………」

桜の返事に間髪入れず、ランサーがその場に現れる。その視線は険しく、識姫のことを強く睨み付けていた。その視線に不快感を覚えつつも、識姫はそれを無視する。そんな彼女にランサーは抗議の意味合いを込めた言葉を放った。

「俺は認めんぞ」

「お前の意思は関係無い。騎士ごっこを続けたいなら好きにすればいい」

「貴様ツ！我が騎士道を愚弄するか!!」

その言葉に反応して、槍の鋒が識姫へ向けられる。だが彼女はそれを気にした様子も無く冷たい視線をランサーへ送った。そこに光る不気味な虹彩に、ランサーは悪寒^死を感じとった。

「何も成果を上げず、馬鹿みたいな理由で敵対サーヴァントに塩を送って、結果主が再起不能になってんのにまだ騎士道かよ」

強い侮蔑を含んだ言葉。嫌悪に殺意を滲ませたその視線に、ランサーは言葉を紡ぐ余裕すらなくたじろいだ。

そこでふと、識姫の目端から血が流れ落ちる。すなわち『絶死の偽眼』、その発動を意味していた。しかしその血涙に識姫すらも驚いたような反応を示した。

「マスター、大丈夫ですか……?」

「……うん。無意識に発動したみたい」

制服で雑にそれを拭う識姫。彼女はそこからランサーに一瞥をくれることすらなくケイネス達へ指示を飛ばしていく。

そうして指示を終えた彼女の耳に雷鳴が響いた。その雷鳴の主が誰かは最早問うまでも無い。何事かと廃工場から外へ出れば、そこにはアドミラブル大戦略のTシャツに身を包み、酒樽を肩に担いだライダーと、既にうんざりとした表情のウェイバーがいた。「おう娘、ちよいと出掛けるぞ」

「は？」

何処に、と問う間もなくライダーは識姫と桜を戦車に乗せる。そして一瞬の内に彼等は夜空へと消えていった。

10. 聖杯問答

「おおいい!!騎士王!!わざわざ出向いてやったぞお!!」

突如ライダーに拉致られ、何事かと思えば彼は私達をアインツベルン城まで連行した。酒樽の時点で聖杯問答だろうとは思っていたが説明無しにいきなりはやめて欲しい。

「桜、これ付けておいて」

投影した手袋を桜に渡す。まだ令呪を見られる訳にはいかない。

「ありがとう、ございます……………」

「!」

そう言う桜に、思わずキャスターと目を見合わせた。相変わらずその瞳に光は無く、表情にもほとんど変わりはない。だが僅かに柔らかな雰囲気を感じていた。少しでも良い影響を与えられている、と考えていいのだろうか。

「ライダー、貴様何をしに来た?」

と、そんな間にセイバーとアリスフィールが現れた。見た所流れにそう違いは無い。しかしライダーとの会話の終わり際にセイバーが私とキャスターに目を向けた。

「彼女達は……………」

「余の連れだ。安心せい、ここで手出しするような無粋な輩ではない」
「どうやら参加は強制らしい。」

「いささか珍妙な形だが、これがこの国の由緒正しき酒器だそうだ」
「違くない……………」

柄杓の中のワインをセイバーへ手渡しながらそう言うライダーに思わずそう呟く。そして、同時に二人の英雄の視線がこちらに向けられたのを見て失敗を悟った。

「違うんか？」

「……………それそもそもワインだからこの国でも普通にグラスに注ぐと思う」

「この国でも、てえことはもしやこれはこの国縁の酒という訳では無いのか!？」

「かあー!しまったア!と額に手を当てるライダー。聖杯から現代の知識を与えられているとはいえ、やはり酒の知識までは与えられていないのだろう。ワインは確か16世紀とかそこらで生まれた品だ。対してイスカンドルが生きた時代は紀元前300年。まあ知らなくて当然だろう。」

「ぬう、仕方あるまい。娘、この酒を飲むに相応しい酒器を作れるか?3つ程頼む!」
「3つ……………?どういうことだライダー」

「戯れはそこまですておけ、雑種」

適当にワイングラスを3つ投影する。それに疑問を顕にしたセイバーの言葉の直後、金色の粒子と共にアーチャー、ギルガメッシュが現れた。背後のキャスターが身体を強ばらせるのを感じる。とっさにグラスを捨てて身構えた。流石にこの場で暴れ出すことはないと思いたいが、私という不確定要素がある以上、それは確約出来ない。

「我オレにわざわざ足を運ばせた非礼、どう……………」

「あん？どうしたアーチャー？」

言葉の途中で、アーチャーの目が私へ向けられた。ほぼ無意識に警戒する。王特攻のあるシエヘラザードでも、あの英雄王に勝ち目があるとは思えない。神経を張り巡らせ、その動向を伺う。しかし、攻撃が飛んでくることは無かった。

「ククク、フハハハハハハハハハハ!! ライダー貴様！征服王を名乗り聖杯宝物を手にとせんとしながらこれを見逃しておったのか!!？」

アーチャーの嘲りの混じった、心底可笑しいといった笑い声に呆気にとられる。何事かと困惑する私達を他所に、アーチャーは相当上機嫌なのか自ら私の方へ歩み寄ってきた。顎に手を添えられ、顔を持ち上げられる。

「まあ是非もあるまいか。持ち主すら本質に気付いておらぬ始末だ」

「何、を……………」

「その眼だ」

ニタニタと笑みを浮かべながらそう言う英雄王。直死の魔眼は、確かに虹の階級足り得る魔眼だろう。だがそんなもの、かの英雄王からすればさほど価値のあるものとは思えない。

「この眼は、有り得るものだ。有り得ないものじゃない……………貴方が価値を見出すよう

なものだとは思えない」

直死の魔眼は現代ですら存在し得るものの範疇に収まっている。確かに稀少なものだが、こんなもの、英霊の持つ宝具、特に神代の英霊が持つ宝具という、現代ではどう足掻いても存在し得ないものに比べれば無価値と言つて相違ない。

「戯け、その程度の代物では無いわ。まあいい。ところで……貴様、^{オレ}私の真名に察しがついているな？」

「っ！」

「フハハ！ 雑種の割には弁えているではないか。良い、興が乗った」

空中から現れる黄金の波紋。そこから現れたのは一つの小さな瓶だった。

「これは……」

「ただの治療薬だ。知らぬままに潰されてはつまらぬ」

「？」

「いずれその眼を^{オレ}我に献上しに来るがいい。代わりに我が宝物の中から、貴様が望む物の一つや二つはくれてやる」

「おいおいなんだアーチャー！ 随分とその娘に甘いではないか！ なんだ、もしや惚れたか！？」

「ハッ！ ^{オレ}我が雑種に惚れるだ?! この程度では足元にも及びつかぬ程の美女を抱いた^{オレ}我

が？有り得ぬわ！」

状況を理解出来ないままに英雄王はライダー達の下へ戻っていく。そうして私の知る通りの流れの後に、聖杯問答が始まった。

「よりもよって酒盛りとはな……」

丁度三人の王による聖杯問答が開始された刻、遠坂時臣は自室で己のサーヴァントの動向に頭を抱えていた。だがそれは想定していた事でもあった。諦めに近いため息をこぼす時臣。そんな彼に、言峰綺礼が通信用の魔道具越しに問いを投げた。

『キャスターのマスターは如何致しましょうか？』

「……………」

現在、その酒盛りの場にはキャスターとそのマスター、そして桜がいる。綺礼の報告からして桜が暗示にかけられている状態と判断した彼は、初めは彼女のことを捨て置いた。だがその直後彼のサーヴァントが言い放った真名を看破されているという言葉に

よって、彼は否応なしに彼女へ思考の矛先を向けざるを得なくなつた。

「……………綺礼、アサシンにキャスターのマスターの殺害を命じるのはどうだろうか」

「……………考えを詳しくお聞きしても？」

「もちろん」

彼曰く、キャスターのマスターがアーチャーの真名を本当に知っているにしろ知らないにしろ、生かしておくメリットはキャスターの脅威を鑑みても皆無。ならばキャスターが傍におらず、隙を晒している今のうちに殺すべきではないか、ということだ。

「万が一暗殺に失敗したのなら、そのままライダーのマスターを狙ってライダーにゴルディアス・ホイール神威の車輪を超える切り札があるかどうかを探らせれば良い」

「なるほど、異存ありません。全てのアサシンを現地に集結させるのにおそらく10分ばかりかかると思われますが……………」

「よし、号令を発したまえ」

頬杖をつき、彼は行く末を見届ける準備に入った。

基本的には、やはり私の知る流れと変わらなかつた。違つた点は途中から英雄王直々にキャスターに酒を注ぐよう命令が下つたこと。内心めつちや嫌がつていたが逆らえば殺されかねないし嫌そうな態度を見せても殺されかねないので、見た目上は快諾したような素振りを見せていた。未だに若干震えているが。

「のうキャスター、そなたの意見も聞こうではないか」

「私ですか……………」

「そなたは王ではないが王に仕えた英霊。そうさな…………そなたから見て、余達の中で理想の王に近いのは誰だ？」

その会話に、それまでガン無視して桜に構つていた手を止めた。唐突に話を振られて困惑気味のキャスターだったが、三人から向けられる視線に逃れられないことを悟つたのか、一つため息をこぼしてから口を開いた。

「私が選ぶのなら……………」

その言葉を区切り、彼女は視線をアーチャーに向けた。その様子にアーチャーは当然といった様子を見せ、ライダーは驚いたような、セイバーは納得のいかないような様子を見せた。私自身意外だったのだが、彼女の様子を見るに嘘というわけでは無いらしい。

「キャスター、貴様暴君の治世が理想などと言うつもりか？」

「私にとつて理想の治世とはその国、時代に相応しい治世かどうかなのです」

そう言い、キャスターはセイバーへ真つ直ぐに視線を向ける。

「実際に見たわけでもなく語るのは無礼な事は承知ですが、私が知る限り彼の王の国は豊かな国。民は強く、理外の脅威を除けば己の足で立ち上がり進むことができる者の集まり。故に暴君であることが許され、望まれすらした」

「馬鹿な!? 暴君を望む民などいるわけがない!!」

「王よ、貴女は『暴君』の意味を履き違えています」

「なんだと!？」

凄まじい剣幕のセイバーを前にして、しかしキャスターは怯まない。先程まで震えていたのが嘘のように堂々としている。

「強き民は、その強さが故に、己の導べ足り得る強き王を、その身を捧げるに足る強き暴君を求めるのです」

「……っ！だがッ！我がブリテンにそのような強さは無かった!! 土地は痩せ、民は困窮し、敵は多かった! それでも尚我が治世は間違っていたと言うのか」

「はい」

「ッ!!」

私はキャスターの姿に魅入っていた。死にたくない、そんなどこか俗物な願いを抱える彼女を、私は正直英霊らしくないと思っていた。だが今のその姿に、彼女も英霊足り得る存在なのだと理解した。

「王よ、貴女は希望を示し続けるべきだったのです。弱くとも、苦しくとも、危機に瀕していようと、この王に付いて行けば間違いない。皆がそう思えるような強さを示し続けるべきだった」

「そうでなければ、その正しさは毒にしかかなり得ない」

絶句し項垂れるセイバー。過ぎた言葉をお許しください、そう一言告げてから、キャスターはその場から一步、身を引いた。

11. 軍勢

キャスターが下がったところで、私は違和感を覚えた。原作なら、そろそろアサシンが乱入する頃合だ。しかし、実際には重い沈黙が場を支配するのみで状況に変化が無い。

(間違いなく私が影響しているのだろうか……)

言峰綺礼と遠坂時臣の暗躍がどんな形になっているのか、そこに「私」というイレギュラーが与える影響がどんなものかを知る術は無い。そうだ、今はまだ良い方だ。この聖杯問答が終われば、そこから先、この聖杯戦争の流れは私の知らない、全くの未知の領域に突入する。本来とはキャスター陣営が異なる現状、ランサーは槍を折ることは無く、遠坂時臣と間桐雁夜は対峙する可能性も低い。セイバーの宝具は知られず、ライダーの消耗も少なくなる。

(既に……)から大きく異なっているもおかしきはな……っ!?)

そこまで考えた時点で、私の全身に襲い来る死の予感。咄嗟に背後に向けて投影したサバイバルナイフを振り抜いた。おそらくは気配遮断のスキルによって隠密していたのであろうアサシンの身体に走る線をなぞれば、大量の血を吹き出しながら真つ二つに

なった浅黒い肌と髑髏の仮面を身につけた暗殺者が現れた。

「マスター!?!」

キャスターの声が響く。死の予感はまだ消えていない。桜を抱え上げつつ、足に強化の魔術を使ってその場から全力で飛び退いた。直後、私がい場所を通り過ぎる黒いナイフ。髪が何房が切断された。

そうして飛び退いた先、キャスター達のいた場所に退避した私に向けてアサシンはそのままナイフを投擲した。しかしそれはライダーによって阻まれ、彼は空を舞ったナイフを掴み、それをアサシンの脳天に向けて投げた。絶命し、黒い粒子となって消えゆくアサシン。

それに呼応するかのように、私達の周囲に無数のアサシンが現れた。

「これは貴様の計らいか?金ピカ」

「戯^{オレ}け。我がこのような下らぬことをするものか」

「まあ……そうさなあ………」

頭をガシガシとかきながら、ライダーは立ち上がり、その身に征服王としての装束を纏う。そんな落ち着き払った様子のライダーとは対称的に、ウェイバーやアイリスフィールは酷く動揺している。

「マスター!?!」無事ですか!?!」

「大丈夫、傷は負つてないから毒とかも問題ないと思う。桜、怪我は無い？」
「はい、大丈夫です……」

青い顔をしたキヤスターを宥めつつ桜の様子を見る。口では大丈夫だと言っているが、顔は青く、私を掴む手は震えている。アサシンの狙いが私だけだったことが不幸中の幸いだ。

「是非もあるまい。最後の問答としようではないか」

ライダーは腕を組み、魔力を滾らせていく。彼の足下から砂が舞う。彼が持ち得るものの中で最強の宝具。王と臣下の絆でもって生み出される最強の領域。

「———そも、王とは孤高なるや否や？」

嘲笑を返すアーチャー、孤高であるしかないと返すセイバー。そんな二人の答えを、征服王は豪笑をもつて否定する。

「全くもつて解つておらん！そんな貴様らにはやはり余が！今ここで！王たる者の姿を見せつけてやらねばなるまいて！！」

ズアと、砂が広がっていく。空が塗り潰されていく。莫大な魔力をもつて空間が塗り替えられる。固有結界。魔術の秘奥。征服王の究極。彼が王たる所以。

目の前に広がるのは無限の荒野。そこに投げ出された私の心臓は、ドクドクと早鐘を打っていた。

「これはかつて我が軍勢が駆け抜けた大地。余と苦楽を共にした勇者達が等しく心に焼き付けた景色だ」

ザツと、足音が鳴る。無数の軍勢、数千、数万にも及ぶ者共によつて形作られる心象風景。

「見よ！我が無双の軍勢をオ!!」

死してなお彼をこそ王であるとし、未来永劫、いつ如何なる時も王の号令に応える英霊達。彼はそこにある絆こそを何よりの至宝であると、それこそが我が王道であると断言する。

「イスカンダルたる余が誇る最強宝具！」

『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』なり!!!」

固有結界が閉じられ、元のアインツベルン城に戻った後、その場は特筆変わったことも無くお開きとなった。

そうした、帰り。彼の戦車の上にて。

「なあ娘、お前さんに余の軍勢はどう見えた？」

唐突なそんな問い。私は即答しなかった。

正直に言えば、圧倒された。この聖杯戦争のサーヴァントについて、私はほとんど知っていると知っていた。その全てを知っている訳では無いし、それで全てだと自惚れるつもりも無かった。だがあの光景を見て、私は知ったつもりでいただけだと気付かさ

れた。

「……………凄かった」

「ぬははははは!!そうかそうか!!」

満足そうに笑い、彼は真つ直ぐに前を見たまま語り出した。

「よいか娘。そなたが何故、我が軍勢に惹かれるのかを考えろ。そこにそなたが気付くべきものがある」

「……………」

「そう不安そうな顔をするでないわ。気付いておらんだけで、そなたも既に持っている。心配するな、そう時間はかからんだろうよ」

そう言つて私の頭をガシガシと撫でる。その晩、それ以上ライダーが何かを語ることは無かった。

12. 師と弟子

翌朝、私はケイネス達を連れて柳洞寺まで来ていた。ここでは既にウェイバーが調査を行つて、というより地下の大空洞へ行くのを阻むプロテクトを破ろうと奮闘している。ケイネスを連れて来たのは、単純に彼に調査を協力させる為だ。

「……………何だね？その顔は」

「……………」

どうやら昨夜のうちに聖堂教会伝で某人形師に義手を作らせていたらしいケイネスは、動くようになった手で頬杖をつきながら、自虐的な雰囲気を漂わせていた。そんな彼に、ウェイバーは複雑そうな表情を浮かべる。

「大方、清々したとでも思っているのだろうか？」

「違つ！僕は！」

「隠す必要は無い。事実、私は無様に敗退した」

その言葉にウェイバーはしばし呆然とし、直ぐにその表情を引き締めた。

「……………確かに、そういう考えが一切ないと言えば嘘になります」

そう始まった言葉に、これは私が聞いていいものでは無いと悟る。桜の手を取り、

キャスターに念話を飛ばし、私達は山門まで戻った。

「……………何か食べるものを買に行こうか」

短く告げてから、私達は柳洞寺を後にした。

そうだ。僕は未だに、この状況にあつてなおも「いい気味だ」と思う部分がある。それは否定のしようがない事実だ。だがそれ以上に、僕はケイネス先生の惨状にショックを受けていた。何よりも、「清々したか？」と聞かれて僕はそれを咄嗟に否定した。それはつまり、僕が曲がりなりにも彼を尊敬しているということ。

「今この時も、僕はまだ何も出ていないんです。これまでの行動の殆どは蓮葉か、ライダーが主体のものです。息巻いてここまで来た割に、僕自身が自ら成したことも、成そうとしたこともまだ何も無い……………」

ここに居るのも、元を辿れば蓮葉からの指揮によるものだ。アイツはつい数日前まで魔術のことを何も知らなかったのに、僕よりも遥かに上手く立ち回って、僕の思惑が霞

んで見えるような願いを、自らの力で叶えようとしている。

「でも先生は、何も出来ない、何も出来ない僕とは違って、自分自身の手で何かを成そうとした!!」

「だが、失敗し「たかが一回の失敗が何なんだよ!!」っ!」

「アンタは!僕が及びもつかない様な天才なんだろう!アンタの功績はそのぶっ壊れた魔術回路だけで成り立つもんじゃやない!!アンタしか思い付かなかった!アンタだけの発想があつたからこそ積み上げられたもんだろうが!!」

叫ぶ。きつと、今ここで言いたいこと全て言い切らなきや、僕はこの先ずっと後悔することになる。

「僕はアンタがどれだけ凄いかを知ってる!!大っ嫌いだけど!!それでも認めざるを得ないほどアンタは凄いなんだよ!!だから……!だからたった一回の失敗で諦めてんじやねえよ!!」

ゼエゼエと息をする。目じりに浮かぼうとした涙を拭い、一刻も早く息を整えようと深く息を吸った。だけどそんな僕の意志に反して、心臓の動きは恐ろしく速い。ガシガシと僕の頭を撫でるライダーの手を振り払う余裕も無い。全くもって情けない限りだ。「……………私の魔術回路はほぼ全損だ……………君どころか、多少魔術を齧った程度の一般人にも劣るような有様だ。それでも君は、私が再起できると言うのか……………?」

真つ直ぐと、決して視線を逸らさないように頷く。数秒、呆然としてから、先生は天を仰ぎみた。

「……………やはり、私は愚かだな」

先程までとは雰囲気の違う自嘲。次の瞬間、あろうことか彼は僕に向かって頭を下げた。あのケイネス・エルメロイ・アーチボルトが、たった三世代の歴史しか無いウエイバー・ベルベツトに。

「ウエイバー・ベルベツト君。君に、私が持ちうる限り最大の謝意を述べたい」

「い、いや僕はそんな……………！」

「たわけ」

「げぼっ!」

ライダーのデコピンが額に直撃し、軽く吹き飛ばされる。相変わらず威力おかしいだろ!!

「何すんだよ!」

「その魔術師はお前さんを見下しておったのだろう? そんな男が、プライドを捨て、考えを改め貴様に感謝しておるのだ。狼狽えておらんでドツシリと受け止めんでどうする」

「……………」

反論できないまま、痛む額を押さえつつ僕はケイネス先生へ向き直った。数日前まで

の僕なら、有頂天になって調子付いていたであろう状況。でも、今の僕はそんな気は少しも起こらなかった。

「感謝したいというなら、貴方の知識を貸してほしい。僕はキャスターのマスター、識姫の言っていることを証明しないといけない」

「勿論だ。私の知識などいくらでも使いたまえ」

この時から、僕と先生の関係性は大きく変化していく。それは、またいずれ話すことになるだろう。

柳洞寺を後にし、私と桜は新都のショッピングモールに来ていた。色々と食べたり、服を買ったりとしていたのだが、あるハプニングの為に私はショッピングモールを全力で脱出、その後桜をおんぶしながら雑踏を掻き分けつつ全速力でとある人物から逃走していた。

「クソッ！調子に乗って服買いすぎた……………!!」

尚、捨てるという選択肢は無い。今日買ったものは全て桜のもので、初めて桜が自分の意思で「欲しい」と言ったものだからだ。

(とはいえあの人相手にこの状況で逃げ切るのはほぼ無理……！)

ショッピングモールでの買い物途中、普通から見放される前の世界にいた私の知り合いと鉢合させた。別にそれは問題無い、大半の知り合いからは逃げ切れる。それをするだけの身体能力がこの身体には備わっているし、魔力消費が痛くはあるが場所によっては強化魔術を使えばいい。

だが、何事にも例外は存在する。前世の魂を身に納めるといふ、時代が時代なら歴史に名を残す英雄になることも出来たであろう規格外運業の肉識体姫。それに身体的には容易バランスブレイカーく追いつき、こと運命的な点では容易に抜き去ってくる幸運：EX。

「待っちなさーい!!!」

冬木の虎、藤村大河。見放され、見放した筈の日常が、急加速して私の方へ迫っていた。

13. 日常と異常

その姿を捉えた瞬間、藤村大河は走り出していった。それは、つい数日前に行方を眩ませた彼女の後輩。家族を皆殺しにされるといふあまりにも惨い悲劇に直面した少女だ。

(くっ！流石は識姫ちゃん！足が速い!!)

その少女は彼女の知らない幼げな女の子と共にいた。その視線は優しげで、藤村は弟のいる彼女らしいと思いつつも強烈な違和感に襲われた。

(とりあえず話は捕まえてから！全くどれだけ心配したと……!!)

あくる日穂群原学園に広がった「ある生徒の家族が、巷を騒がせる連続猟奇殺人鬼に皆殺しにされた」という惨すぎる噂。その数日後に判明したのは、その「ある生徒」というのが蓮葉 識姫であるというもの。整った顔立ちに明晰な頭脳、高い運動神経と良くも悪くも注目を集める彼女の話はすぐに高等部にまで届いていた。

そしてその噂が広まり始めたのとほぼ同時に行方不明となつたのが彼女だ。そこそこ人望のあつた為に、大小はあれどその安否を案じる声は上がっていた。その中でも特に声が大きかったのが藤村大河だ。そもそも面倒見の良い彼女だが、まだ中等部にいた時分、特に識姫のことを可愛がっていた。放課後の自己パトロール、その末、識姫の

逃走能力、そして藤村と同じく幸運EXに加え、“危機”というものに敏感なシエヘラザードの索敵によって、彼女は警察でも届かなかつた識姫の行方を手に入れようとしていた。

「逃がつきーん!!」

逃げる理由は知らず、様子を見るに見掛けに反してかなり憔悴している上、相当にややこしい状況に巻き込まれているのであろう識姫を見た時点で、藤村大河という生命体からそれまでにあつたありとあらゆる考えは吹き飛んでいた。今彼女の頭の中にあるのは、多方面に心配を掛けたことを叱り、一刻も早く傷付いた後輩を抱きしめ、頭を撫でつつ慰めるということだけだった。

(っひいっひい!!)

見つかつてから、もうかれこれ十数分逃げている。こちらは既に息も絶え絶え、横つ腹が痛くて仕方がないが、あちらは見る限り微塵も疲れを感じさせない。根本的に身体

能力、というよりその素養は私と彼女、藤村先輩とでそう違いはない。だが私は最近こそ多少の筋トレなどをしているとはいえ元々持っているものを利用していただけなのに対して、先輩はその素養を剣道その他諸々で磨き上げている。言うなればただの原石と加工済のダイヤモンド。その差は如実だ。

(若干桜が楽しげなのは重畳だけど……!!)

桜の様子に今度遊園地にでも連れて行こう等と現実逃避しつつなお走る。ようやくと新都を抜け、私達は住宅街にまで来た。ここならばこの時間帯に人通りは皆無に等しい。タイミングを考えれば強化魔術で一気に距離を稼げるだろう。

現在の私と先輩の間の距離は30m程。全力疾走では無いことを考えれば角を曲がってからの猶予はおおよそ5秒程度といったところか。

(次の角を曲がってそこで逃げ切る……!)

曲がり角が見えた。20m、10mと近付き、急カーブ。先輩からの視線が切れた瞬間、私は全身に強化魔術を行使した。瞬間、軽くなる肉体。万が一に備えて発動する時間は3秒。全力で踏み込み、劣化したアスファルトに若干のヒビが入るのを感じつつ加速する。

ゴッ!と生み出された風圧が鼓膜を叩いた。そこに煩わしきを感じながら前方を見

据え

「はあ!？」

——そこでようやく、私の目の前に川があることに気が付いた。そこにあるのは私の腰程までの高さの柵のみ。このままでは間違いなく私達は頭から川に突っ込むだろう。

「やっつっぱいっつ!!」

全力で逆方向に力を入れる。が、強化魔術で生み出された速力はそう容易く相殺できるものではない。徐々に減速こそすれどそれはとても間に合わず、勢いを殺し切れぬままに柵の目の前まで辿り着いてしまった。何とか柵に激突する事は避けた。だが慣性の法則が急停止した私の身体を水面へ投げ出そうと働く。

「まずっ、落ちっ……!」

「確保おお!!」

斯くして、川に墜落する寸前の私を助けるという形で、私は先輩に捕まってしまおうのだった。

「全く！どれだけ！！心配したと！！思ってた！！」

「……………すいません」

あの後、私達は先輩の実家、要するに藤村組に連行された。桜は女性の組員の方に預けて別の部屋にいる。対して私は先輩の自室にまで連れていかれ、絶賛説教の最中だった。現状、その内容は行方を眩ましたことがメインだ。

正直、気が気でない。いつ突つ込んだ内容を聞かれるか、桜のことを聞かれるか。答えたくないことばかりだし、答えられないことばかり。どうするべきかと頭を捻る。

「ようやく見つけたと思ったら逃げるし！知らない女の子といえるし！」

「……………」

「笑顔が消えてるし！今も辛そうだし！」

「……………」

「正直言えば聞きたいことも知りたいこともしこたまありますけどともかく！！」

「うえ!!」

そんなお叱りの言葉の後、先輩はガシツと私を抱き締めた。

「無事で良かった」

それだけ言って、それ以上追求することも無く、ただ優しく抱き締めてきた。困惑す

る。よく分からない安心感。緩やかに私の頭を撫でるその手に、何も言わないことへの罪悪感が募っていく。だがそれすらも――

「言いたくないんでしょ？なら無理には聞かないから安心して」

まるで、全て分かっているかの如く、欲しい言葉を欲しいタイミングで言っただけで慰めてくれた。身体のコわばりが消えていく。無意識に逃げ出そうとして入っていた力が抜けていく。張り詰めていた何かが、ゆっくりと解かれていく。

「わたしは……」

こちらのことなど知るかと言わんばかりに叩き付けられた日常。呑まれてはいけなさと分かっているながら、その心地良さに身を委ねてしまう。そうして先輩は問答無用に、私を日常というありふれていた幸せに引き戻してくれた。

「わ、だじ、は……」

忘れていた筈の暖かさに、私はただ涙を流すことしか出来なかった。

ひとしきり泣いた後のこと。神速で飛来した羞恥心に精神崩壊しながら、私は出来る限りの話を先輩にした。とはいえその内容にも無数のフェイクを入れているし、何なら話せた内容は全容の内の1割にも満たないだろう。だと言うのに

「まあとりあえず事情は聞きません！代わりに全部終わったら真つ先に私の所に来ると!!」

「え……」

「返事！」

「あ、はい……」

それだけで、話は終わった。あまりにも簡単に終わってしまったが故に困惑する。本当に良いのか、という考えが顔に出ていたのか、先輩は視線を私に向けながら再び口を開いた。

「私が介入しようのない問題なんですよ？」

「ええ、まあ……」

「なら、全部終わるまで待つしかないじゃない」

それから、先輩はさも当然とでも言うかのように話を続ける。

「そして戻ってきたら心配かけた関係各所皆様方に謝罪行脚に行くこと！よろしい!」

「……………」

それは、許されぬことだ。先輩は普通の中にいて、それに何より、私はすでにそこ人殺から逸脱しした。だが、それ故に

「わかりました。その時は、手伝ってください」

「もちろん！」

普通にいる人々が異常こちらに来る事は、防がなければならぬ。ならばせめて、彼女達の前では、普通にいる人の前では、私自身も普通を装おう。彼女達が、この街がありふれた日常に過ぎないと思えるように、私は――

（――ああ、そういうことか）

少しだけ、ほんの少しだけ、私は征服王の言わんとしていたことを理解した。

藤村組からの帰路。私は大量の服を持ちつつ、眠ってしまった桜を背に帰路に着いていた。その傍らには霊体化を解いたキャスターがいる。

最後まで泊まれと言っていた先輩だったが、私達は未だ聖杯戦争の参加者。万が一、

億が一にでも巻き込む可能性を残す訳にはいかない。結局逃げるように別れてしまったが、私の顔がマシになっていたのか今度は見逃してくれた。

「ねえ、キャスター」

「はい、なんででしょうか……?」

そうして拠点へ行く道の途中。私はふとした疑問から沈黙を破った。

「なんで、死にたくないの?」

思えば、彼女が死にたくないと思っっていることは知っっているけど、死ぬことを恐れているのは知っっているけど、何故死にたくないのか、死を恐れているのかを、私は知らない。もちろん、死を恐れるのは生物としての本能だ。だが彼女の死への恐れは、どこかそれだけではないように感じた。

「……………」

閑散とした街の中、黙したまま目を伏せた彼女の言葉を待つ。新都から遠く、更には夜遅い時間帯。季節柄虫も存在しない、ただただ静かな空間。しばらくして、ぼつりぼつりと零すように彼女は言葉を紡ぎ始めた。

「私の人生は、何も死に怯え続けるだけのものではありませんでした。大切なもの、尊いと思えるものも、当然ありました」

そこに居たのは、英雄ではなく、人としてのシエヘラザードだった。彼女は千と一に

及ぶ夜を物語った人類最高の語り部だ。だが、そうである以前に彼女はとうしようもなく人だった。

「そっか、だから貴女は……………」

「ええ、だからこゝs」ゴツ!!

「……………は？」

言葉の途中、彼女が視界から、凄まじい速度で消え失せた。消えた方向に視線を向ければ、そこには、ガードレールに叩きつけられ、血を吐き気絶したキャスターがいた。

視線を、元の場所に戻す。

——そこには、漆黒の騎士がいた。

「っ!？」

咄嗟だった。持っていた服を全て投げ捨て、その上に桜を投げた。下手をすれば頭を打って大怪我をするかもしれないような行動。だがそれでもそうしなければならぬ程に、私の身体を死の予感が喰い破ろうとしていた。

「ぐ、うう……………!!」

ギリギリのところで背後に飛び退く。そうして私が元いた場所を一撃必死の規格外の暴威が襲う。着地と同時に右手にサバイバルナイフを投影、全身に強化の魔術を施した。

「桜ちゃんを、返せッ……………」

「クソッ……………!!」

不快な羽音と共に現れた男に罵倒を飛ばす間もなくバーサーカーが襲いかかってくる。絶死の偽眼を使っても、避けられるのはおそらくこれが最後。となれば次に仕掛けられれば私の命は無い。視界の端で目覚めた桜の姿を確認し、ランサーを呼ぶよう指示を出す準備を整え――

「あ、え……………」

繰り出された一撃、その初動すら見切れぬままに、私は地面をゴロゴロと転がっていた。腹部に走る激痛。口の中に溢れる鉄の味。その感覚に、私はバーサーカーが何をしたのかを理解した。

（私、が……………死なない、一撃……………!）

死の予感。故にそれは致命ならざる一撃には働かない。バーサーカーはその積み上げられた武錬によって、初撃でそれを見極め、確実に私を死に至らしめるため、私を動けなくするためだけの攻撃を放った。

（ま……………ず……………）

意識が薄れゆく。そんな私が最後に見たのは、止まれの標識を掲げたバーサーカーの姿だった。

14. 執念

(え……………?)

ドスンツという衝撃と、頭に走る痛みと共に桜は意識を覚醒させた。そんな彼女が目覚めて一番初めに目にしたのは、物語シエを読み聞かせてくれる女ザイの人が血塗れで気絶している姿だった。

少しづつ、しかし着実に普通の少女としての心を取り戻しつつあった桜にとって、未だ数少ない好意的な、信頼できる存在であるシエヘラザードのその姿は、まだ絶望から立ち直り切れていない桜をパニックに陥らせるには十分過ぎた。

「は、あ……………」

息がつまり、恐怖が幼い少女の身体を支配する。そんな彼女が咄嗟に取った行動は最も信頼している識姫の姿を探すというものだった。家族の如く、姉の如く彼女に接する識姫。その存在は、幼い彼女にとって、非常に大きな拠り所だった。

たった数秒、それだけで彼女は見つかった。その事に安堵した桜だったが、しかしその安堵は即座に打ち破られることとなる。血に塗れ、地に伏す識姫と、彼女に向けて標識を振り上げる黒いナニカ。それが何をしようとしているかなど、幼い桜でも容易に分

かった。

「だ、め……!!」

少女は再び迫り来る絶望を前に手を伸ばす。愛していた家族の元から引き離され、待ち受けていたのは地獄の日々。そこから救い上げられ、彼女は希望を知ってしまった。許容など、できるわけも無い。奪われるという絶望を前に、一度目、少女は心を殺すこととで対処した。だが最早それは不可能だ。

「だれ、か……誰か……!!」

頭を撫でてくれた手の優しさを、強ばる身体を抱き締めてくれた温もりを、柔らかな微笑みを向けられる安心感を、彼女は知ってしまった。もう二度と、普通の幸福を手に入れることはできないと諦めた彼女に、代替品であったとしても、ありふれた愛を与えてくれた。

奪われてなるものかと、彼女は手を伸ばす。その手の甲には、令呪が刻まれていた。

「誰かお姉ちゃんを助けてえええええ!!」

それは、無意識下での令呪の行使。

「識姫を助ける」という曖昧さの残る内容の令呪。だが桜の内に眠る魔術師としての

資質が、その令呪を十全に働かせた。瞬時に、令呪に込められた膨大な魔力がランサーをその場に転移させ、その上でランサーに識姫を助けるように強制力が働く。

ギイイン!!

標識と黄槍の柄が衝突し、やかましい金属音が鳴り響く。ランサーはすぐさま標識に向けて紅槍を放った。魔術的效果を打ち消す宝具がバーサーカーの宝具を無効化し、標識が切り裂かれる。だが、狂気に身を犯されていようと、バーサーカー、ランスロットは円卓最強の騎士。僅かに短くなった鉄柱を手に、彼は丁寧な紅槍の刃を避け、嵐の如き連撃を繰り返していた。

一先ずは識姫の命が助かったことに桜は安堵した。それと同時に、張り詰めていた精神が限界を迎えたのか、頭を打っていた事もあつてか彼女は再び意識を失った。

そんな桜の容態に関係なく、戦いは続く。

数度の打ち合いの合間に、バーサーカーは切り離された方の標識も拾い上げ、二刀によつて更にその攻めの激しさを増していた。そんなバーサーカー相手にランサーは紅槍はその手の鉄柱を、黄槍はバーサーカー自体を狙って鋭い一撃をはなち続ける。だがそれらは避けられるか、きれいに刃を避けて弾かれ、未だ決定打に欠けていた。

武器の間合いに、性能、相性、その全てにおいて圧倒的にランサーが勝っている。だが、それでもなおその実力は互角。バーサーカーはそれ程までに卓越した技量をその身

に備えていた。

「くっ……………」

堪らずランサーは後退する。対してバーサーカーは引かない。槍兵相手に間合いを開けるなどという愚は犯さない。右の手の鉄柱での、上段からの一撃目。ランサーはそれを黄槍にて防ぐ。左の鉄柱による、横薙ぎの二撃目。ランサーはそれを紅槍によつて迎え撃つ。三撃、四撃と放たれるその全てが、凄まじい速度と重さを内包する。先程までは曲がりなりに反撃を放っていたランサーだったが、今はもう完全に防戦一方の状況に追い込まれていた。一度の後退が、取り返しよしの無い不利を生み出していた。

その傍ら、激しさを増し続ける金属音に、キャスターは激痛に苛まれながらも目を覚ましていた。震える身体に鞭を打ち、彼女は宝具によつて空飛ぶ絨毯を喚び出し、それを駆使して気絶したままの識姫を包み、自身の側まで呼び寄せる。彼女は自身の持ちうる最低限の医療の知識と照らし合わせて識姫の容態を確認すると、安堵の息をこぼした。

（あと、は……………桜、さんを……………）

最早ランサーを囿に逃げることしか手はないと判断したキャスターは周囲を見回し、桜の姿を探す。だが、

（い、ない……………?）

そこに残されていたのは、踏まれてぐちゃぐちゃになった服だけだった。数秒の逡巡の後、彼女はその場を去ることを決意した。

時は、数刻遡る。

「はあ……………はあ……………」

全身を蟲に喰い破られながら、間桐雁夜は教会を訪れていた。身体を引き摺るその様は正に死に体。生きている事が不思議になるほどの状態だった。

「ぐ、うう……………」

本来ならば彼の身体は、現時点でももう少しマシな状態にあった。だが間桐臓硯の死によつて彼の肉体を調整する者がいなくなったこと、先刻、識姫に盾として扱われ瀕死の重体にまで追いつまされたことが、彼の命の灯火を今すぐにも吹き消そうとしていた。

だが彼は止まらない。己の内にある欲望に、願ひと思ひ込んだその歪みに気付かぬま

ま、その致命的な破綻に目を背けたまま、彼は尚も止まらない。否、止まらない。

扉を開く。元来神聖な筈のその空間は、暗く、淀み、まるで間桐雁夜の行く末を暗示するかのようだった。

「唐突ですな、間桐雁夜殿」

教会の、その中心。そこに居たのは、今宵の聖杯戦争の監督役、言峰璃正。老齡ながらその立ち姿は老いを感じさせない。彼は連絡無しにこの場に現れた雁夜に対しても礼節を欠くことは無かった。

「ぐ、はあ……遠坂、時臣と、話がしたい……火急の、案件だ……」

激痛に耐えながら、そう告げる。彼が身を削つてまでここに来たのは、桜が正体不明の魔術師に連れ去られたことを伝えるためだった。

「どのような案件がお聞きしても？」

「お前には、関係、ないだろ……!」

「そうは行きません。教会を利用した罫である可能性は否定しきれない」

毅然とした璃正の態度に、雁夜は苛立つ。だが自体は一刻を争う（と思いついでいる）雁夜は、できる限り言葉を削り、桜が危機に陥っているということを伝えるためだと言いつつ、だが、

「であれば、火急、とは言えませんか」

「は？」

呆けた声を上げた雁夜に、璃正は淡々と言葉を紡いでいく。

「彼は優秀な魔術師だ。その程度の事はとうに把握しているでしょう。それで今放置しているということは、急いで対処すべきことではないと判断を下したということ。根本的に貴方とは考えが異なっている以上、対談を呼びかけたところで彼が応じることはないでしょうな」

「ふ、ざけるな!!自分の……!娘のことが心配じゃないのか……!?!」

「そもそも彼女は間桐に養子に出されたのでは?ならばその監督責任を彼に求めるのはお門違いなのでは?」

その言葉を最後に、話しは終わりだと言わんばかりに言峰璃正は踵を返した。その様に、間桐雁夜もまた諦めた様に出口へ向かう。ここで喚いても無意味だと気付いたからだ。だが、この男は、何もせず引き下がるような人間ではない。

「やれ」

教会の扉を開き、外へ出る直前の言葉。その言葉の意味を理解する前に、言峰璃正は背中からドスン、という衝撃が与えられた事に気が付いた。

「あ、が……………」

胸から生えた鉄柱。ゴボリと血を吐きながら、言峰璃正は倒れゆく。

「お、れが……俺が……助けなくちゃ……!」
彼が最期に聞いたのは、そんなうわ言のような言葉だった。

そうして、現在。間桐雁夜は桜を抱え、鈍い足取りで間桐邸へと向かっていた。

「大、丈夫……俺が、必ず……君を助ける、から……」

男は進む。その願いは最早意味を成さず、己を突き動かしているのは幼い少女を救う為などという綺麗な願望などではなく、遠坂美への想い醜い執着心と、遠坂時臣への劣等感歪みに歪んだ復讐心であるということに気付かぬまま。

15. 二騎目

「おい!?大丈夫か!？」

動揺を隠しもしないウェイバーの言葉。だがこの時ばかりは彼を責めることはできない。何せ今まで敗北という言葉から縁遠い存在であった識姫が重傷を負って戻ってきたからだ。

「後は、お願い、します……………」

絨毯を地に下ろし、駆け寄ってきたウェイバーの姿を見てキャスターは自身の肉体を霊体化させた。

慌てて識姫の容態を確認したウェイバーは一先ず命に関わるものでは無いことを確認してからできる限りの治療を施していく。

「娘の様子はどうか坊主？」

「死ぬことは無い、けど……………」

怪我の度合いとしてはかなり酷いものだった。治療してすぐ目覚めるということは無いだろうということとは容易に分かる程度には重傷の識姫を見て、ウェイバーは不安と自己嫌悪に苛まれる。ケイネスの協力もあって、もうすぐ大聖杯の隠し場所が分かると

いうところでの、司令塔たる識姫の負傷。この後はどうするべきかという不安と、今の今まで、数日前まで一般人だった少女へ頼り切っていたという事実への嫌悪。ギリと歯を食いしばる。

そんな彼の額が、征服王によって弾かれた。

「なっ、にすんだいきなりイ!!」

仰け反り、どうにか地面に頭を打ち付けるのを回避したウェイバーは起き上がると同時に怒気を表した。そんな彼に向けて、ライダーは戯け、と言葉を飛ばした。

「迷っておる場合か」

「それはっ!!そう、だけど……………!」

「坊主、お前さんの役目は何だ?」

その問いに、ウェイバーは数瞬黙し、大聖杯の汚染を証明することだとこぼす。その言葉に満足したのかライダーは大きく頷いた。

「ならば、迷っておる暇はなからう。娘が目を覚ますまでに大聖杯の所在を確かめ、その汚染を確たるものとするところこそ坊主の役目!嫌悪に陥る暇なぞ一時もありはせんぞお?」

「ああもう分かっているよ!!」

「こうなればヤケクソだ、とウェイバーは識姫への治療を急ぐ。そして少しでも早く大

聖杯を見つけ出してやると息巻くのだった

「ハアッ!!」

ギイイイイイン!!

金属音が響く。それはあくまでも武器と武器とがぶつかり合った音で、未だランサーの紅槍の鋒はバーサーカーの手にある鉄柱を破壊するに至っていないかった。

(これ程の武錬とは……!)

生前はさぞ名の売れた武人だったのだろうと、初戦時からの評価を改めつつランサーは現状の打開策を探る。

彼が攻めきれずにいる理由は、何よりもバーサーカーのその宝具だ。騎士は徒手にて死せず。それは、手にした武器を全て己のものとする宝具。バーサーカーが手にした時点で、ありとあらゆるものがDランク相当の宝具となるというもの。その宝具の存在が、ランサーに思い切った攻勢に出ることを躊躇わせていた。

「くっ……!!」

苦虫を噛み潰したかのような表情でバーサーカーの猛攻に対処する。そう、対処だ。その武器の応酬は既に”攻防”の域を退いていた。放たれる一撃、その重さと速さ、そして宝具の存在に、ランサーは最早負傷覚悟の特攻以外に攻め入る手を失っていた。

「ぐ、おおおおおおお!!」

一撃、その脇腹に鉄柱が直撃する。だがその一撃が、ランサーの内にあつた迷いを消失させた。両の手それぞれに握られる紅と黄の槍による連撃を繰り出した。そこにあるのは武器を破壊するなどという小賢しい考えでは無く、ただバーサーカーの命を刈り取らんとする鋭利な殺意のみだった。雨の如き隙間ない槍舞。一撃ごとにを防ぎ、受け流すその過程で、バーサーカーの手にある鉄柱は少しずつ機能不全に陥つていく。少しずつ、少しずつ削られ、削がれ、やがて武器とするには余りにも短くなった折、遂にバーサーカーが隙を晒した。

「うおおおおおあああああああ!!!」

必滅^ゲの黄薔薇^{イ、ホ}を超速で突き出す。その鋒がバーサーカーの喉元に迫り——

——しかしその刃は、その鎧に多少の傷痕を残すのみだった。
「あ、がつ?!」

後の先。黄槍を突き出したその意識の隙。バーサーカーの狙いは、ランサーのその紅き槍。その右手に握られていたはずの槍は既にランサーの手に無く、黒い葉脈の如き魔力に蝕まれ紅く黒い禍々しい様相を取り、ランサーの胸部、即ちその心臓を貫くに至っていた。

バーサーカーはランサーから槍を引き抜き血を払い、踵を返すと共に霊体化した。ランサーは膝を付き、倒れ、アスファルトの上に血溜まりを作っていく。

(ああ、おれ……は……)

その表情に無念を滲ませ、ランサーは消滅した。

「ふう………」

拠点を移し終え、ある程度の整備を終えた衛宮切嗣は深くため息をついた。

「お疲れですね」

「まさか、この程度で疲れていたら世話がない」

一時の休息に煙草の煙を燻らせていた切嗣は、舞弥の言葉に火を消し、舞弥が持つてきた資料に目を通し始めた。そのメインテーマは、蓮葉識姫と行動を共にしていた幼い少女だった。

「名前は間桐桜。魔術属性は虚数。記録を調べる限り持ち合わせる魔術回路は質も量も相当に上質なものを持つています。蓮葉識姫が間桐臓硯を殺害した後から行動を共にし、タイミングは不明ですが……………」

「ランサーのマスターとなった、か……………」

昨夜の間桐雁夜による蓮葉識姫への奇襲。その際に判明した、間桐桜という新たなマスターの存在。幸いな事にランサーは昨夜バーサーカーによって消滅したが、それは蓮葉識姫への警戒を緩める理由にはなり得なかった。

「蓮葉識姫の所在は？」

「柳洞寺に向かったようです。今朝使い魔を使って上空から見たところ、ケイネスとソラウもそこに」

「ケイネス達の様子は？」

「総合的に見て、かなり協力的な態度です」

「総合的に?」

「ソラウに関しては、自ら積極的に協力することはほぼありませんでしたので」

舞弥の言葉に切嗣は思考を回す。それは要するに、ケイネスに関して言えば自主的に蓮葉識姫、ないしはウエイバー・ベルベットに協力しているという意味だ。あのプライドの高い時計塔の君主が、魔術を知って数日の小娘に、だ。初戦の様子を鑑みれば、ウエイバーとの関係もそうよろしいものでは無い。何かしら弱味を握られ、消極的な態度での協力ならば納得もいったが、今の状態は切嗣にとって見れば不可解極まりないものだった。

(見誤っていた、と言わざるを得ないな……………)

煙を吐き出し、空を見上げる。既に彼の中での識姫への警戒度は、言峰綺礼に勝るとも劣らないものとなっていた。

(蓮葉識姫が負傷して眠っている内に柳洞寺を攻めるか……………?)

しかし切嗣はその考えを即座に否定する。仮に蓮葉識姫が眠っていても、柳洞寺にキャスターとライダーの二騎のサーヴァントがいる事実は変わらない。攻め入った所で振り返りに合うか、逃げられるだけだろうと結論を出した。

「……………僕はライダー陣営のもう一つの拠点の調査をしつつ、柳洞寺の監視を続ける。舞弥、一先ず君はこの家でアイリの護衛と備品の整理を進めてくれ」

「了解しました」

切嗣の指示に従い備品の整理を終わらせ舞弥がアイリの様子を見に蔵へ赴いた時と、遠坂からの密使が来たのはほぼ同じだった。

16. いつかの夢（記憶）

「な……ぜ………」

女は視界の先、自身の心臓を貫いた男の背中を見ながら、届くことの無い問いを繰り返していた。

「どう……して………」

男は、狂気に蝕まれていた。毎夜毎夜、己の伴侶となった者達を尽く殺し、幾人もの娘の命を奪っていた。そんな狂君の不信を鎮めようと立ち上がったのが、とある姉妹だった。

妹は夜になると姉である女に寝物語を求めた。古今東西、あらゆる国、あらゆる時代の物語を、女は妹へ語り、そして王へ語り聞かせた。一つの物語に、数度の晩を費やし、数十、数百の物語を、女はその口から紡いだ。

一の夜を越え、女は生きていた。

それは、一つの気まぐれだ。物語の続きを次の夜に語ると告げた彼女を、王は気まぐれに殺さずに済ました。だがそれでも、王は物語を聞き終えれば女を殺そうと考えていた。そうして、また次の夜、また次の夜と日々を重ねた。

十の夜を越え、女は夜を恐れ始めた。

未だ、王の内から殺意は消えること無く、物語ることが出来なくなればすぐさま己の命が失われるであろう事を、女は察していた。

百の夜を越え、妹が殺された。

物語を乞うだけだった彼女を、王は”不要”と定め、殺した。最愛の家族を失った悲しみに囚われ、そして何より命を奪われるその様に恐怖した。それでも尚、女は物語を語り聞かせた。

千の夜を越え、女は生きていた。

その夜、物語を語り終えた後、女は王と己との間に生まれた子を王へ見せた。何とか隠し通し、どうにか産み、育てた我が子。その姿に、王は喜びを顕にした。そして女を正室に定めると約束した。そして――

——千と一の夜を越え、女は殺された。

結局、女は王の狂気を取り除く事など出来ていなかった。王の後継たる子を産み、物語を語り終えた彼女は、最早王にとって“不要”な存在と成り果ててしまった。

（ああ……結局、全て……無駄、だっ……た……）

女は、王を愛していた。最早呪いと化したその不信から、解き放つてあげたいと、怯えながらもその心の内で、想っていた。その呪いが解けたなら、その罪に気付いたのなら、共に背負い、歩んで行きたいと思っていた。だがその願いはもう、叶わない。

（ああ、そうか……）

緩い微睡みに包まれながら、その記憶記録を見て理解した。眠りに墮ちる前、彼女が言うようにしていたことを。

彼女は、きつと——

「……………ん」

僅かな光を感じて、私は目を覚ました。ぼんやりと天井を眺めていると、視界に誰かが入ってきた。

「おはようございませす、マスター」

「キャスター……………」

安堵の様子を見せる彼女に、私は「良かった」と言葉を零した。果たしてそれは私が生き残っていることに対してか、彼女が生き残っていることに対してか、それとも、彼女が安堵を顔に出せている現状にか。

「桜は……………？」

「……………行方不明です」

「そっか」

何となし予想出来たことだ。むしろあの状況で桜が消えなかつたらあの野郎問の行動雁夜は意味不明極まりない。今、かなり高い確率で、桜は間桐邸にいるだろう。蟲蔵はキャスターに頼んで全壊させておいたが、あの家自体桜にとってみればトラウマそのもの、できるだけ早く助け出さなければならぬ。

閑話休題
それはともかくとして

現状、何よりの謎は何故私が生き残っているのかということだ。あの状況から一体全体どうやって生き長らえたというのか。そんな疑問が顔に出ていたのか、キャスターが答えを与えてくれた。どうやら桜が令呪を使ってランサーを呼び、私を守らせたらしい。

「ランサーは……………」

その問いに、キャスターは無言で首を横に振る。バーサーカーに殺されたのだろう。なまじ生き残るよりかマシンな結末ではある。仮に生き残っていたら、桜までもが衛宮切嗣の殺害対象にカウントされた筈だ。だがバーサーカーと戦ってまで桜を殺すのはリスクに対してリターンが余りにも少ない。そんな選択をする程衛宮切嗣は愚かでは無いはずだ。

「私、どれくらい寝てた？」

「大体丸一日程です」

「……………状況は？」

「それは僕が説明する。報告したいこともあるしな」

キャスターが口を開こうとした時、それを遮るように一つの声がかげられた。そちらに目を向ければ、そこには不機嫌そうなウェイバーと、相変わらず快活な笑みを浮かべ

るライダーがいた。

「状況が状況だ。お前の復調は待つてられないからな」

「わかった」

一際真面目な表情で、ウェイバーは私が眠っている間に起こったことを語り始めた。

「そう、か……………」

話を聞き終えた私は、ウェイバーとライダーが退室したのを見届けてから布団へ倒れ込んだ。

私が昏睡状態にいる間、ウェイバーが使い魔やキャスターの宝具を利用して集めた情報、

・ 聖杯の汚染の確認が完了したこと。

・ 概要不明だがセイバー、アーチャー両陣営が教会に集まったこと。

・ どういう理由かは不明だが間桐雁夜が言峰綺礼と行動を共にしていること。

の三つ。

一つ目に関して言えば、私自身としては一応の確認以上の意味は持たないのでそれは良い。まあ、これでウェイバー達との協力関係が解消されることが無くなったのは僥倖と言えれば僥倖だ。二つ目も、内容は大方原作通りであると考えていいだろう。恐らくだが、既に遠坂時臣は殺されているはずだ。

重要なのは、三つ目。早い話、どういう訳かこの世界線でも言峰璃正は殺され、言峰綺礼は間桐雁夜を己の愉悅の糧にするつもりということだ。

「……………」

沈黙の保たれた室内で瞳を閉じ、やるべき事を頭の中で整理する。現状、最優先すべきことは桜の救出だ。戦力的に、バーサーカーと戦うことは不可能では無い。ライダーアイオニオンヘタイロイが王の軍勢を使えば正面突破すら可能だろう。だが、その後の事を考えればそれは愚策も愚策だ。

(どうする……………)

ウェイバーの話を書く限り、事態はこれからの数日で急激に終息していくだろう。だからこそ、求める結末によって私の取るべき行動は大きく変化する。そしてただ一つを除いた全ての選択肢で、桜を見捨てなければならぬ。

「……………ねえ、キヤスター」

「はい、マスター」

唯一部屋に残っている彼女に、問い掛ける。この選択肢は、私の《願い》からは最も遠いもので、私の想いに最も近いものだ。この選択肢でなければ、私の根底が崩れてしまう。私にとっては最善で、この街にとっては最悪で、そして最も危険な選択肢。言葉に詰まる。私が提案しようとしているのは、彼女が最も忌避しているものだ。

そんな私の葛藤を見透かしたように、

「ただ、命じてください。貴女は、私の王なのですから」

私が最も欲しい言葉を、完璧なタイミングで告げてきた。

ああ、これはもう迷っている暇は無い。

「桜の救出を最優先にする」

例えその他の誰かに、どれだけの悲劇が降りかかろうと、私はあの子を、代替品などではなく私の家族として救ける。

「もう、二度と、例え、誰であろうと——」

——私の家族を、奪わせてなるものか。

17. 最後へ

目を覚まして、その部屋がどこかを理解した瞬間、幼い少女は短く悲鳴を零した。一年という期間、自身の尊厳の全てを粉々に破壊された悪夢の巣窟。そこに連れ戻されたという事実は、未だ立ち直り切れている訳では無い少女の精神を追い詰めるには十分過ぎるものだった。

だが、以前と大きく違うのは、少女の心が折れなかったということ。たった数日、たったそれだけの時間であれど、偽りと本心が入り交じった複雑なものであったとしても、蓮葉識姫という少女が桜へ与えた愛情という名の希望は、彼女に「諦めない」という選択肢を取らせた。

そんな折、その部屋の扉がガチャリと開かれた。

「ひっ……」

「ああ………起きてたんだね………」

そこから現れた、顔半分が引き攣った様に歪んだ男。その男が身に纏う空気から、少女は瞬間的にキヤスターが、識姫が傷だらけで血に伏せていた光景を思い出した。そして、姿こそ見えないが、それを引き起こした黒い何かが男の背後にいることを彼女は察

知っていた。

桜は最早悲鳴を出す余裕すら失い身体を強ばらせる。そんな彼女に何を思ったのか、間桐雁夜は醜く歪んだ己の顔をフードで隠しつつ、彼女に向けて手を差し伸べた。

「怖がらせてごめんね。少し、俺と一緒に来てくれるかな……………？」

彼にとつてみれば、それは救いの手だとも思っているのだろうが、少女にとつてそれは破滅に導く悪魔の手に他ならなかった。だがそれを拒む事が現状得策では無いと理解し、桜は自身が寝かせられていたベッドから降りて男の方へ近づいた。その表情に宿る怯えが、男には見えない。その態度に表出する警戒が、男には察せない。ズタボロの彼には、最早その程度のことすら分からなかった。

「離れない、ようにね……………」

間桐、いや、蓮葉桜は諦めない。己を愛し、慈しみ、抱きしめてくれた識姫の元へ帰るため、幼い少女は静かな戦いへと向かうのだった。

「……………」

「何か、文句でも、あるのか……………？」

「……………いや、何も問題などないとも」

間桐雁夜の言葉に、言峰綺礼はニツコリと笑みを浮かべてその言葉を返した。そしてその内心で、湧き上がる愉悅の濁流を押し留めるのに必死だった。間桐雁夜の傍ら、そこにいる、明らかな警戒を示す幼子の姿に彼は気が付いていない。これまでの負傷、そして戦いの末、蟲に蝕まれた肉体では、その程度のことすら分からないのだ。

その事實は、言峰綺礼が更なる愉悅に至るための道標となっていた。

「……………」

「そう睨むな。信頼しろとは言わない、せめて遠坂時臣を屠るまで、その一時の間の信用があればそれで充分だ」

「……………俺が、お前の父親を殺した張本人でもか」

「そも、この禍根も遠坂時臣がいなければ生まれなかつたものだ。何も無いと言えば嘘になるが、我が憎悪は全て奴へ向けられている」

いけしやあしやあと、心にも無い大嘘を吐き出す。この男には実の父親を殺されたことなど何でも無く、遠坂時臣への憎悪など微塵も存在しない。その内に存在するのは愉悅への好奇心と渴望。

(そういうえば、この少女も遠坂時臣の娘だったな)

桜という、新たなスパイスを手に入れた言峰綺礼は間桐雁夜メインディッシュの調理工程に如何にして手を加えるかを思案する。雑な調理でも、このスパイスは極上に近い味わいを生み出すだろう。だが、少しの、ほんの少しの工夫一つで、その味わいは何倍にも何十倍にも膨れ上がるだろう。

「それ、で、何の用なんだ……………」

「深山町に、セイバー陣営の新たな拠点がある。そこにいる、この女を連れ去ってほしい」

「これは…………セイバーのマスターか……………」

「いいや、聖杯の器。真なる願望機、大聖杯を顕現させるための装置だ」

その行く末を想起しながら、言峰綺礼は次の手を打った。

「ふう……………」

ため息を一つ零し、その場に座り込む。心配そうな表情を向けてくるキャスターに視線だけで大丈夫だと伝えながら、私は迫り来る罪悪感を無視した。

既に原作から大きく乖離した現状、桜を取り戻す為には出来る限り私が把握し得ない展開は望ましくない。早い話、これから先の展開を出来る限り原作通りのものになるよう操作する必要がある。そしてその一手目として、私はライダーにアインツベルン城に向かうよう頼んだ。名目上は同盟の提案のため。答えが否だった場合は即座に全力での討伐をお願いした。だが、転生者である私がセイバー陣営の現在地を把握していない訳が無い。

そして昨日のうちに、私はキャスターの宝具によって、言峰綺礼による遠坂時臣の殺害、そして言峰綺礼が間桐雁夜へ名ばかりの同盟を持ちかけたことを確認した。となれば今晚にでもアイリスフィールが誘拐される可能性が高い。

つまりこの指示はセイバー対ライダーの戦いを引き起こすためのものだ。

「これで、後戻りは出来ない……………」

仮に想定通りに事が進めば、明日、言峰綺礼は市民会館で大聖杯を顕現させるだろう。そしてそこには間桐雁夜も現れる。間桐邸に桜を置いて来るならそれでよし、もし連れて来たのなら、その場で殺して桜を救い出す。

「……………ライダーとセイバーが接敵しました」

「それじゃあ、行くかうか」

立ち上がり、歩みを進める。最後の戦い、その前に――

「私の家に」

――決別を。

18. 決戦へ

冬木教会。

夜の帳が落ちた刻。男が一人、そこを訪れていた。

「が、はあ……………あ……………」

その身を引き摺り、それでも尚彼は歩みを止めない。片耳が失われ、左腕は最早反応を示さず、右足は義足となり幻肢痛が絶え間無く襲いかかっている。だがその前進は続く。見当違いの復讐心を薪に焚べ、憎悪の業火を燃え上がらせ、間桐雁夜は教会の扉を押し開けた。

そこに鎮座する人影に、彼は暗い歓喜を滾らせた。

「遠坂……………時臣イ……………!!」

蟲に蝕まれたその顔を歪め、間桐雁夜は遠坂時臣へ詰め寄っていく。一步近付く毎に語気を荒げ、身勝手な思い込みを更に強くしていく。そしてそのすぐ側にまでたどり着き、ようやく彼は異変に気がついた。

「時臣……………?」

その肩に手を置いた瞬間、遠坂時臣だったものが彼の方へ向けて倒れ込んだ。想定外

の事態に間桐雁夜は思考が凍り付き、困惑し取り乱す。しかしそんな彼を嫌でも冷静にさせる来訪者がその場に現れた。

「雁夜くん……………」

その声に、彼は驚愕と共に振り返った。そしてその拍子に、辛うじて彼の身体に支えられていた遠坂時臣の遺体が床に転がった。瞬間来訪者の、遠坂葵の顔から表情が消え失せた。

「あ……………あ……………」

言葉を紡げず、ただ呻く彼を無視して、遠坂葵は時臣の身体を抱き寄せた。涙を流し、そこに、目の前の男へ憎悪と憤りを灯した瞳を向ける。

「これで、聖杯は間桐に渡ったも同然ね……………」

「え……………」

涙を流し、女は男へ問い掛ける。

「これで満足？」

「私から桜を奪って」

「時臣さんを殺して」

「遠坂への復讐は済んだ？」

その問いに、間桐雁夜は謔言のように違う、違うと繰り返す。

「その男が、悪いんだ。そいつがいなけ「ふざけないでよ!!」っ!」

「あんたなんか誰かを好きになつたことさえなくせに!!!」

翌日早朝、柳洞寺を放棄し、ケイネスとソラウを地下水道の拠点に置いてから、私達はまだまだ暗い空の下、かつての私が住んでいた場所へ向かっていた。

「なんて言うか、普通だったんだよ」

ゆるりと歩みを進めながら、私は何かを刻むように話を始めた。

「お母さんは優しく、よく笑う人だった。お父さんは厳しいけど、誰よりも私達のことを大切にしてくれた。勇樹は、私に甘えるのが恥ずかしい年頃だったのちよつと距離があつたな」

「普通に仲が良くて、でも喧嘩もして、そんな何処にでもいる、ありふれた家族だったんだ」

たどり着いた、蓮葉の表札の家の目の前で、そうしめくくる。かつての蓮葉家の姿は見る影もなく、そこにあるのはただ殺人事件が起こってしまった事故物件だ。玄関には立ち入り禁止のテープが貼られている。

テープを剥がし、中へ入る。血痕は残っているし、血の匂いが鼻につく。その光景が、私に弟の死を思い出させた。靴を脱ぎ、リビングに向かう。死体は無いが、やはり血痕

は残っていて、召喚陣もそのままだった。

(マスター)

「……………大丈夫」

何故こんなことになってしまったのだろう、という思いがふつつと湧き上がってくるが、不思議と涙は流れてこない。悲しみも苦しみもある筈だが、私は現状を受け入れられていた。

二階へ上がり、私達姉弟の部屋へ入る。入口から見るその光景は、今までの私が知っているものと何も変わらなかった。

(そういうえば勇樹は部屋を分けたがってたっけ)

自分の勉強机に座り、置いてある教科書や小説をパラパラとめくる。そうして本棚にあるものを見ていくうちに、一冊のアルバムに行きついた。

それは、私の記録。

思えば、この趣味もこの起原由来のものなのだろう。私は写真が好きだった。家族のアルバムとは別に、私の嗜好で彩られた写真の数々。ふとした一瞬や、何でもない光景の数々。そこに登場する人々も様々で、誰もいない風景の写真もある。

先程の何でもない教科書や小説などとは違い、1ページごとに、一枚ごとにじっくりと眺めていく。そうして、最後のページ。

私が初めに撮った写真。今よりも幼い私と勇樹、お母さんとお父さんが揃った家族四人の写真。その写真を見たと同時に、この写真のような日常はもう二度と戻ってこないということを理解した。写真に、雫がおちていく。堰を切ったように、涙が流れ落ちていく。

「……………」
声を上げることすらなく、私は泣き続けた。

「……………ごめん、時間をかけすぎた」

(いえ、お気になさらず)

たつぷり時間をかけて泣いて、そうしてから、玄関へ向かった。靴を履いて、爪先でトントンと床を叩く。ここに来て、かつての私の家族はもうこの世にいないのだとまぎまぎと見せつけられた。その辛さは消えず、その悲しみは未だに私の心を蝕んでいる。だけど、進もうと思えた。決別はしない。全部背負って、その上で私はあの娘を家族としてめいいっぱい抱き締めるのだ。

ドアノブに手をかけ、扉を開こうと力を込める。その瞬間——
「行つてらっしゃい」

——誰かの声が聞こえた気がした。

その声に、私は振り返らない。ただ一言、言葉を返した。

「行ってきます」

19. 幸福の所在

冬木市民会館。そこでつい数分前に打ち上げられた「達成」と「勝利」を意味する信号。それはまるで誘蛾灯の如く、この聖杯戦争に参戦するマスターと英霊を呼び寄せていた。

ある者は「救済」を

ある者は「独善」を

ある者は「愉悦」を

ある者は「憧憬」を

ある者は「家族」を

各々が各々の内に願いを秘め、最後の戦いへと赴く。

そこに現れんとするのは大聖杯。その内の、今は未だ眠る悪の極致は餌を待つ小鳥の如く口を開き、ただ生まれいずる為、糧を待ち続ける。

(キャスター、状況は?)

(今から搜索を開始します)

(わかった。そつちはお願ひ)

あの後、私はキャスターと別れて行動することとした。キャスターには万が一の場合に備えて間桐邸に、私は本命、冬木市民会館に。あちらに桜がいるならそれでよし、いないならば予定通りにことを進めるだけだ。

「ごめん、待たせた」

「もう良いのか?」

「全部終わったらいくらでも話せるから」

「ぬははは!! 違うない!!」

途中で合流したライダー達と共に、前方、会館へと続く鉄橋の中心に佇む王へと目を向ける。英雄王ギルガメッシュ。人類最古の英雄にして、ライダーの最後の敵と言える相手だ。

正直、勝ちの目は薄い。だがゼロでは無い。原作においては残り一度が限界だった^{切り札}王の軍勢は、大海魔の召喚が成されなかつた事で数度の猶予を残している。それに加え

て、ウェイバーによる三画の令呪によるブースト。英雄王のその慢心による隙を突くだけの手札は十二分に揃っている。

「ライダー、自慢の戦車はどうした？」

「ちいとばかりしくじってな、だが侮るなよ英雄王。今宵の余はこれまでに比べてもひと味違うぞで？」

「……………なるほど、どうやら何の勝算なく我の前オレに立ったわけではない」

馬から降り、英雄王と言葉を交わす征服王。正しく最期の会話だ。この後の戦いで、確実にどちらかが命を落とすこととなるのだから。

「アイツら、本当は仲がいいのか……………？」

「気が合うんでしょ」

馬上からそう問いかけてくるウェイバーに雑な返しの言葉を投げつつ、眼前の王達の問答を見守る。しかしどういふ訳かそれは一度中断され、ライダーがこちらに声をかけてきた。

「娘！お前さんは先に行っておけ!!」

「え？」

思わず良いのか？という疑問を込めて英雄王の方へ視線を向ける。しかし彼は沈黙を貫いていた。沈黙は肯定、とするならば許されたのだろう。

「じゃあ、私は先に行く。私達の回収よろしくね」

「そこは自力でどうにかするって言おうところだろ……」

「移動速度が速い方に頼むのは当然でしょ」

「一つ深呼吸。」

「また後で」

「死ぬなよ」

「そっちこそ」

決戦の地へ向け、私は駆け出した。

会館に辿り着き、私は迷う事無く地下駐車場へ向かった。現時点で原作通りの展開ならば、バーサーカーとセイバーはここで最後の戦いを始める筈だ。そしてバーサーカーがそこにいるのなら、間桐雁夜も間違いなくそこにいるだろう。

「つーピンゴ……」

地下へ降りきつたと同時に襲い来る熱波。どうやら戦いは既に始まっていたらしい。煌々と燃え盛る炎と砕け散ったコンクリートの破片が、その激戦の様相をありありと伝えてくる。それだけに飽き足らず、奥の方からは破碎音が鳴り響いていた。

(マスター、こちらに桜さんは居ませんでした)

(了解、折を見て令呪で呼ぶからその時はお願い)

(かしこまりました)

タイミング良くキヤスターから来た間桐邸に桜はいないという情報。なら、桜が間桐雁夜と共にいるのは最早確定と言つていいだろう。

音の発生源に向かって走る。根源的な恐怖を誘う音の連続に身体が竦みそうになるのを必死に堪えながら、それでもと足を止めることなく進む。しばらくして、走り続けていた私の目の前を二つの人影が凄まじい勢いで横切った。

「っ!?!」

衝突により生み出された砂塵と轟音に一瞬足を止める。どうやらセイバー達は私に気が付いていないらしい。ならば気が付かれない内に桜を見つけ出そうと周囲に目を走らせた時だった。

「お姉ちゃん!!」

「桜っ!!」

助けを求める桜の声に、私は再び駆け出した。

地下駐車場、そこに間桐雁夜はいた。その傍らには桜もいるが、彼は最早彼女の様子を伺う余裕すら失おうとしていた。

対して、桜は目の前の男の動向を見逃さないよう警戒しながらも、己の周囲に気を配っていた。彼女が、必ず助けに来てくれると信じて疑っていなかった。耳に劈く金属音と破砕音の並に怯え、目の前の蟲に侵された男の姿に恐怖し、誰一人寄る辺のない孤独感に苛まれ、それでも少女は戦っていた。

その瞳には涙がある。だがそれはつい数日前まで彼女が失っていたもの。辛い時は泣くということすら満足に行えていなかった少女は、涙を流し、助かろうと、助かりたいと願い、そしてその為Fateに己の道を自ら見つけ出そうとしていた。

———そうして悲劇は、遂に瓦解する。

「お姉ちゃん!!」

「桜っ!」

見つけ出した識姫の姿。声を張り上げ、助けを求め。その声を彼女は聞き逃すことなく桜の元へと駆け出した。しかし、桜の声に反応を示したのは識姫だけでは無かつ

た。

「……………」

「っ！」

桜と識姫、その間に立ち塞がるようにして、間桐雁夜は識姫と向き合った。無数の蟲が空を飛び、地を這い、識姫に向けて牙を、爪を向ける。

「桜ちゃ……は……………渡……ない……………」

「……………それは、お前が決めることじゃない」

彼は、その言葉に疑問を抱いた。間桐雁夜はここに来てその意味すら理解できず、そしてその意味を問うまでもなく、事実として叩き付けられた。

幼い子供が走る音が、彼の背後から連続する。その音の正体を確かめるために彼が振り返るよりも速く、彼の視界に桜が映る。桜は識姫に走りより、飛び付くように識姫に抱き着いた。そして識姫もまた桜を抱き留め、守るように抱え上げた。

「お姉ちゃん！」

「ごめんね、遅くなった」

その光景を理解する事を、間桐雁夜は拒んでいた。有り得ない、許されないと、思考するだけで痛みが走る肉体で、彼は目の前の光景が引き起こされた理由を探す。そうして辿り着いたのは目の前に飛び回っている蟲魔精だった。

「お、前………桜ちゃ……に何「もうやめてっ!!」っー!」

悲痛な叫び。洗脳、催眠、暗示、どれか分からないが桜に掛けられていたそれが解けたのだと、そう解釈した間桐雁夜は弾かれるように桜を見た。

しかし、その視線は男に向けられ、冷たく深い拒絶が宿っていた。

「もうお姉ちゃんのこといじめないで!」

「はっ。」

それは拒絶であり、嫌悪であり、そして否定だった。間桐雁夜のこれまでは全て無意味だった、いや、むしろ桜に害を成すものだったと、逃れようの無い決定を叩き付ける言葉。

彼の内に、理解が降りた。

「巫山、戯るなアああア!!!」
「おれ、がア!どれだけお前のために頑張っだと思っでる!?お前を助ける、為に
ごまでボロボロになっだん、だぞ!!?なの、にッ!!それ、なの、にイ、イイ!!お前

ばあアアああア!!!」

頭を掻きむしり、喚き、叫び散らす男の姿に識姫は即座に桜の目を覆う。そしてそのまま暗示を掛け、彼女を眠らせた。

「キャスター、来て」

令呪が光り、収まると同時に彼女の横にキャスターが現れた。二画目の令呪行使。彼女は現れたキャスターに桜を預け、この場から即座に逃げるようにと指示を飛ばした。

「マスターは？」

「全部、片付けてから行くよ」

その右手に握られたのは、何の変哲もないコンバットナイフだ。目の前で無数の蟲を使役する魔術師を相手取るにはあまりにも心もとない装備。だが、彼女にはそれで十分だった。

「……………どうか、ご無事で」

「うん」

走り去ったキャスターを確認してから、識姫は改めて間桐雁夜に目を向けた。この地下駐車場を埋め尽くさんばかりの蟲の大軍。その様に彼女は間桐臓硯との戦いを思い出していた。

明らかかな、間桐雁夜の限界を越えた魔術行使。憤怒に任せた、自身の生命すらを犠牲

にした殺意の濁流。それに鋒を向け、臉を下ろし、そして開いた。

その虹彩は変化する。

そこに悪意は無く、敵意は無く、そして殺意すら無い。ただ、只管に純粹な、生きるという思いだけが、そこにあった。

「死ねッ！死ね。死ね死。ね死ね死。ねええええええ!!」

蟲の群れが少女に襲いかかる。ギチギチと不快な音を掻き鳴らし、その命を喰らい尽くさんと迫り来る。

——しかし、それは決して少女には届かない。

「絶死」

蟲共に叩き付けられる「死」という極大の情報、その脳の回路を焼き尽くしていく。地を這うもの、空を飛ぶもの、如何なるものでも関係なく、蟲はその命を終わらせていく。それを待つことも無く、少女は走り出した。

「悪いけど、死ぬ訳には行かない」

蟲を避け、殺し、彼女は前へ前へと進んで行く。奇しくも間桐臓硯との戦いに似通った状況で、しかしたった一つ、決定的な違いがあった。

「桜のために、私は生きないといけない。だから——」

前後左右上下、その全てから襲い来る蟲を意に介すことなく、その意識の全てを目の

前の男に向ける。そして彼女は刃を構えた。

「……………殺すよ」

直死の魔眼

不可逆の死が、刃という形でもって叩き付けられた。

「……………」

頭と首が分かれたれた死体を前に、私はほんの一瞬の祈りを捧げた。感謝など無く、最後の最期に見せたあの身勝手な言葉には憤りを覚える。だがそれでも、その真偽は知れずとも、一番初めに桜を助けようとした人間だ。次の命の平穏をほんの少し祈るくらいは許される筈だ。

「……………急がないと」

踵を返し、出口へ向かおうと足を上げた瞬間だった。規則性を持った手を打つ音が背後から響いた。空虚な地下駐車場の音を反響するその不気味な音に私は足を止め、振り

返った。そこにいたのは、

「お前……………」

「素晴らしいものを見せてもらった。私が持ちうる最大限の感謝を送ろう」

言峰綺礼、この聖杯戦争最大の障害となるだろう男だった。奴は口に歪んだ笑みを浮かべている。つまりはそういうことなのだろう。ここで私が桜を奪い返すのも、間桐雁夜の全てが崩れ落ちるのも、全てこの男の台本通りだったということだ。

「何故ここにいる」

「丁度、この極上間桐雁夜の品に相応しいデザート間桐桜を見つけたのでな、今から頂こうという訳だ」

「……………あつそう、なら——」

「——ぶち殺す」

奴が拳を構えるのと、私が刃を構えたのは、ほぼ同時だった。

20. 死

初撃は、言峰綺礼が先だった。

「疾ッ!!」

「っ!」

視認すら不可能な踏み込みによる急接近からの、人体を容易に砕くであろう拳撃。余波によって生まれた風が識姫の髪を靡かせる。死の予感、それによって、彼女はサーヴァントの攻撃ですら初撃なら避けることができる。ならば、いくら威力、速度が優れていても人間の拳を避けられない道理は無い。

識姫が避けたことが想定内だったのか、言峰は特に気にする様子もなく次撃を放つ。再び、死の予感。再びその拳を避けたところで、彼女は反撃の刃を向けた。初め、その一撃を言峰は防御によって凌ごうとした。しかし直死の魔眼の前に防御の概念は存在しない。魔術的な要素さえ組み込まれた防弾防刃加工の施されたカソックを、何の変哲もないナイフは容易に貫いた。だが、

「っ!?!」

「ちっ!」

一瞬の驚愕のみを挟んで、言峰は背後に跳び退った。結果、ナイフは言峰の腕に僅かな切り傷を刻むに留まった。

（確か、聴勁とかいう技術だったっけ……銃でどうこうできる相手でも無い。至近距離からショットガンでもパなさなきやあのカソックをぶち抜くのも無理だ。有効打はナイフだけになるのに直撃させるのが不可能に等しい……どうする……）

（不可解な回避。明らかに私の動きには反応出来ていなかった。おそらくは未来視かそれに準ずる能力を持っていると見ていい。加えて、防刃加工のこのカソックを容易に切り裂く正体不明の手段……さて……）

一瞬の膠着を挟み、二人は再び弾かれるように動き出した。

次の激突、初撃を放ったのは識姫だった。放たれた突きは言峰の心臓を正確に狙っている。言峰は身を僅かに逸らし回避、直後拳を放つため右腕に力を込めた。しかしそれよりも速く、何も握られていなかったはずの識姫の左手から刃が閃いた。それは記録によつて生み出されたもう一振りのナイフだ。想定外の一撃。しかし武芸者として識姫の数段上に行く言峰は危なげなくそれを回避した。再び、言峰は拳を放とうと構える。今度は妨げられることなく放たれたその拳は、識姫の顔面を狙つて突き進んで行く。対して識姫は首を軽く傾げるだけでそれを避け、後方へ飛び退いた。

「お前、私を殺していいのか？」

「どういふことだ?」

「英雄王は私の眼をご所望だぞ」

「安心しろ、その問題は既に解決している」

言い終わると同時に、言峰は強靱な踏み込みによって識姫に肉迫する。しかしそれを見越していた識姫は左手のナイフを投げ捨て、代わりに左手に現れた二つの手榴弾を言峰に向けて投擲した。即座に反応した言峰は一つを素手で打ち返し、もう一つを蹴りで吹き飛ばした。

識姫は打ち返された手榴弾を殺しつつ、その隙に創り出したキャリコの銃口を言峰へ向けた。空中を突き進む弾丸。それを、言峰は咄嗟に取り出した黒鍵で弾丸を撃ち落とす。弾丸を撃ち落とすほどに削れ、欠け、折れていく刀身。それが限界にまで至った所で、言峰は違和感に気が付いた。

(銃撃が止まない……!?)

完全に黒鍵が使い物にならなくなり、それを捨て両手での防御へ切り替えた言峰はその隙間から識姫を覗き見た。そこには両手にキャリコを持つ識姫と、地面に打ち捨てられた無数のキャリコがあった。やっっていることは単純だ。片側のキャリコを撃ち終えたと同時にもう片方のキャリコでの掃射を開始し、その間に空になったキャリコを捨て再度投影するというのを繰り返しているだけ。だがそれは魔力消費を度外視し、短期決

戦を狙うものだった。

(仕方あるまい……………)

言峰の狙いは、識姫を殺し、その首を桜の前に持つていくこと。元来の歴史では現時点でキャスターは脱落し、聖杯に召し上げられる魂は一つ多い。だが識姫の存在がそれを狂わせ、その聖杯の顕現を遅らせている。それゆえ言峰は識姫を殺し、その後衛宮切嗣との決着を付ける事を考えていた。しかしここに来ての想定外の苦戦。彼は自身が識姫を見誤っていた事を認め、己に課した縛りを解くこととした。

結果、識姫は己の心臓に向けて真っ直ぐに伸びる死の予感を感じた。

「!?!」

咄嗟に真横に飛び退いた識姫が見たのは、自分が数瞬前までいた位置に向けて拳を突き出した言峰だった。そしてその右手の甲、そこにあつた令呪が一画消費されている事に気がついた。そしてその右手から令呪を消費した時の微光が洩れ出る。

(まずいつ!!)

咄嗟の投影によつて、識姫はコンテナーを創り出し、両手でその銃口を言峰へ向ける。そして、「死」という果てしない情報を男の脳へ叩き付けるべくその眼に力を込めた。

だがそれは、灼熱と共に現れた銀閃によつて阻まれた。

「あ、がアあああ、アア、あああア?!?!?
 「なるほど、致命傷に拘り過ぎていたか!?!?」

失われた左側の視界。激痛のあまり左眼を覆つて蹲つた識姫に、言峰はゆるりと歩み寄つていく。コツコツという足音が近付くにつれ、どうにかしなければという考えが頭の中を過ぎるが、それを容易に塗り潰す激痛の波が識姫の行動を阻害していた。

「時間があればその苦悶をもう少し味わいたいところだが、急がねばな」

「あ、がつー!」

識姫の首を掴み、言峰は力を込めていく。襲い来る死の予感を感じながら、識姫は何とかその手から逃れようと藻掻く。だが臂力の差は歴然で、力を込めようにも地に落ち着けられた体勢では満足な結果は得られない。時が、遅くなる。無数の記録記が浮かんでは消えていく。

(死、ぬ……)

打開策を探し、しかしその全てが棄却されていく。

(死……た……く……な……)

意識が薄れ、消えていく。そして――

ゴギンツ

蓮葉識姫は死んだ。

征服王の勇姿を見届け、「生きろ」というその王命に従ったウェイバーはしばらくその場で立ち尽くしていた。数分して、頭を振り、涙を拭ってからウェイバーは行動を再開する。まだ戦いは終わっていない。呪われた聖杯が引き起こす災害がどんなものかも知れない現状で呆けている暇は無い。

と走り出そうとした時だった。

「ウェイバーさん」

「っ！キヤスターか」

上空から掛けられた声に視線を向ければ、そこには眠った桜を抱え空飛ぶ絨毯に乗ったキヤスターがいた。しかしそこに識姫の姿は無い。その事について問おうとしたウェイバーだったが、それよりも先にキヤスターから桜を手渡される。

「先に、桜さんを連れて退避なさって下さい」

「お前はどうするんだ？それにアイツは？」

「私はマスターを迎えに……………」

「おい、どうした？」

言葉の途中、弾かれたように会館の方へ目を向けるキャスター。その額を流れ落ちていく冷や汗からして宜しくないものだと思察したウェイバー。しかし返ってきたのは煮え切らない答えだった。

「分かり、ません……………」

「どういう……………っておい！」

問い返すよりも先に、キャスターは絨毯を浮上させ、会館の方へ向けて急発進した。不安気な様子を隠すこともなく、彼女は戦地へ引き返していく。

(マスター……………！)

数瞬の間だけ途切れたパス。その数瞬の後、念話での呼び掛けへの返答が消えた。何かが起こったことは間違いない。嫌な予感をヒシヒシと感じながら、彼女は全速力で識姫の元へと向かった。

それは、生きる意味を探す物語

真つ白だった。

誰かがいる。何かを言っている。

誰だろう。いや、私は彼女を知っている。

彼女が私に触れた。聞き慣れたはずの、全く知らない声が、私へ問い掛ける。

「貴女は、どちらを選ぶ？」

愚問だった。答えるまでもない。思考する必要すらない。遙か前から、答えは決まっている。

「私は、貴女にはならないよ」

分かりきっていたその返答に、「私」が微笑んだ。

「なら、死んでる暇は無いよ」

トンツ、と身体が押された。

「
———
Open
起動
」

「っ!？」

驚愕に染まっているのであろう言峰へ手を伸ばす。そうして私の手が何処かに触れた所で、言峰が跳び退いた。どうやら試みは成功したらしい。

今度は、その手をそのまま己に向ける。完全に未調整の上に初めての使用。当然制御は容易では無く、全身を掘削機ですり潰されるような激痛が襲った。

「……………」

まだまだ痛みは残っている。だが折れた首は元に戻り、失われた左眼は再び光を手に

入れた。対照的に、右眼の瞼は異様な重さが与えられた。こればかりはどうしようもない。むしろ、今の私の右眼の正体を考えれば死んでいないのが不思議なくらいだ。

ゆつくりと、左眼を開く。視界の先、言峰の胸部。カソックが、その皮膚が溶け落ちたかの如く消えていた。そして地面には滴り落ちた血とは別に、不自然に濡れた部分がある。私の右手もまた、濡れていた。

「…………自分でやつといて言うのもなんだけど、グロいな」

私は今、この手で触れた奴のカソックと皮膚を水に変えた。そして私に、数分前の私を記録した。

それは、言うなれば衛宮士郎にとっての無限の剣製で、衛宮切嗣にとっての起源弾。私が私であるが故の切り札。

Ars Magna 記録錬金

「記録」という起源の本質は上書きだ。私が触れたものに、それとは全く別の情報を「上書き」することで、その性質を変化させる。普段の投影も、投影した物品に、より確度の高い記録を上書きすることで本物へ昇華させているのだ。とはいえ今の魔術^{水へ}行使は本来ならば不可能だ。同じ物を上書きすると、全く別の物を上書きするのでは必要な魔力は段違いに跳ね上がる。今の私は、「私」のバックアップによる数分限りの反則の上に成り立っているに過ぎない。

「時間が無い、さっさと片付けないと」

ただ、生きるため。今ひと時の間、私は限界を超える。

そうだ、さっきは言葉を間違えた。私が言うべき言葉は殺すじやない。だってそれは、いつだって、私が成し遂げようとするための手段なのだから。

「是が、非でも」

その死を阻止し、拒否し、否定する。ああ、こんなにも——

「生き残る」

——私は生きている。

放たれた拳を掌で迎え撃つ。先程の光景を思い出したのか寸前で止まった拳に向けて、私は変わらさず手を伸ばした。その手は空を切る。だがすぐさま掌を地に向けて振り下ろした。

「っ!？」

私の手が触れた位置から言峰の周辺に至るまでの地面を水へ変質させる。水深は5m。勢いそのまま深く落ちた言峰を確認してから、その水を鋼鉄へ変質させる。

「生き埋めだ」

しかし変質させきる前に言峰が水面から飛び上がった。相変わらず人外じみた身体能力を発揮する様に驚きながら、変質を空気にまで及ばせる。

大気を、業火へ。一切の予備動作無く現れた炎に流石に対応が間に合わなかったのか、火炎から抜け出した言峰は全身の至る所に火傷を負っていた。

だいぶ使い方に慣れてきた。もう少し応用するでしょう。

「次」

地面を薄く水へ変える。焼け落ちたカソツクの端に掌を向け、触れること無く変化させる。生み出された電撃が、水へ触れる。

「いつ、が、ああア!!?」

全身がずぶ濡れになった言峰の身体を電気が走る。火傷などで剥き出しになった皮膚の下から体内にまで容赦なく電流が流れていく。

大気を、刃に。生み出したナイフを手に、駆ける。深呼吸を、一つ。

「——直死」

銀閃が走る。まっすぐと伸ばされた腕が、その手に握られるナイフが、心臓に向けて

突き進む。鋒が、刀身が、言峰の身体へ沈んでいく。

ドスン

「……………」

ナイフから手を離す。そうするとゆっくり、言峰が背後に倒れた。

「……………」助かった」

勝った、という意識は微塵も無かった。使った力はその殆どが「私」由来。それにきつと、この男は息を吹き返す。キャスターが生存しているとはいえ聖杯を無理矢理顕現させることは可能な筈。本来の流れに比べればそのペースは遅々としたものだろうが、大聖杯は既にその呪いを吐き出し始めているはずだ。いずれこの地下駐車場も泥で満ちることだろう。

「逃げ……………なきや……………」

生き残った安心感からか、それとも「私」からのバックアップが消失したからか、全身を凄まじい倦怠感が襲う。油断すれば即座に気絶してしまいそうなほどのそれに抗いながら、私は外へ向けて歩き始めた。

破壊しなければ。全ての人は救えない。ならば少しでも多くの人を。

「……………」

会館の中を突き進むうち、彼は頭上を突き破って現れた黒い泥に呑まれた。その中で見た白昼夢。最後の最後に至るまで終わることの無いトロツコ問題の末、その地獄を拒絶した男は、やはり救済の為に歩みを続ける。

「……………」

遂に現れることの無かった言峰綺礼の存在に疑問と疑惑を抱えつつ、目の前で虚空に浮かぶ聖杯、かつて己の妻だった物を見据え、その先にいる血塗れのセイバーを確認した。

僅かな安堵が衛宮切嗣に与えられる。セイバーの宝具ならば聖杯の破壊は容易だ。そしてセイバーもまた、彼の存在に気が付いた。

「衛宮切嗣の名の下に令呪を以てセイバーに命ずる」

「……………」

「……………」

覚悟の下、打開の命令を待つセイバーに向け、彼は聖杯戦争を終わらせる為の命令を

下した。その意味を、意義を理解出来ぬまま、星の聖剣のその姿が晒される。セイバーの意に反して振り上げられていく聖剣をどうにか抑えようとしながら、セイバーは己のマスターに向けて問いを投げた。

「何故だ!?!切嗣ッ!?!よりにもよって貴方が何故ッ!?!」

その問いへの返答は、無い。なおも無慈悲に、令呪が行使される。

「聖杯を——」

「やめろ……………やめてくれ……………ッ!!」

懇願は、聞きいられることなく、

「——破壊しろ」

その輝きが解放された。

「……………あつ」

突如発生した揺れに足を取られる。立ち上がろうと腕に力を込めようにも、駄目だつ

た。

「ま……………ず……………」

無理矢理に蘇生した身体はとうに限界で、最早這う力すら残っていない。初めの大きな振動以後、僅かな揺れは今も尚響き続けている。恐らく、初めの振動はセイバーによるもので、続くこれらは流れ落ちた泥が解放されたが故のものだ。

(結局、死んじゃうな……………)

動くのをやめる。生き足掻くのを、やめる。つい先程まで生き残ろうとしていたというのに、どういう訳か私は現状を受け入れていた。

(桜は、ウエイバーがどうにかしてくれるかな。キヤスターは……………桜と契約すれば現界は保てるかな……………)

死にたくない。だけれど仕方がない。ここまで頑張ったのだから。所詮私はこの世界からすれば異物だ。私が居なくても、世界は続くし、廻り行く。

(桜を泣かせちゃうかもな……………)

ここまで助けようとしておいて、中途半端に投げ出すことに罪悪感を抱く。桜はその心に大きな傷を負うかもしれない。だけどきつと大丈夫だ。キヤスターが、ウエイバーが、きつとあの娘を立派に育ててくれる。その傷もきつと衛宮^{正義の味方}士郎が見逃さない。他力本願で身勝手な想定でしかないが、それでも桜の未来は明るいものになるはずだから。

そこまで考えて、ふと気がついた。

(そこに、私はいないのか……………)

それは嫌だな。

「やつ…………ぱり…………生き…………たい…………なあ…………つ！」

結局、私は生き足掻いている。受け入れた？そんな訳がない。そう言い聞かせていただけだ。死にたくなんてない。キャスターの、シエヘラザードの語る物語をもつと聞きたい。桜のことを抱きしめたい。一般などとは言えなくて、通常なんて消え去つて、普通などとうに捨て去つて、平凡は最早望めなくて、日常は既に程遠くて、それでも私は、この新たに与えられた非日常の中で幸せを掴もうとした。天涯孤独の小娘に、心の疲弊した幼子に、死を恐れすぎる英霊。そんなあまりにも歪な形でも、あの中にいた私は間違いなく幸せだったのだ。

視界の先、天井を突き破り、柱をくだき、どうしようもない呪いの泥の濁流が私に向かつてくる。せめて最後は少しでも楽に、そう思い、瞼をおろす。意識が、薄れていく。

「ごめ…………ん…………ね……………」

誰へ向けた謝罪なのか、自分自身でも分からないまま、私は意識を落とす——

「識姫さんっ!!」

——誰かの声が、聞こえた。

「……………あ、れ……………」

「お目覚め、ですか……………」

「キャス、ター……………」

どういう訳か、私は生きていた。全身を襲う倦怠感は未だ激しいものだが、先程に比べれば随分とマシになった。どうやらキャスターが助けてくれたらしい。

左眼を開く。空には煙が立ち上り、その煙が赤く照らされていた。大災害の真っ只中

といった所だろう。そして私がいるのはキャスターの空飛ぶ絨毯の上だ。一先ず泥の影響の無い場所まで向かっているのだろう。そこで、感謝を伝えていないことを思い出した。

「ありがとう、キャスター。でもあの状況からどうやって……………」

言葉と共に目を向けたその先に、信じ難い光景が広がっていた。キャスター、シエヘラザードは、全身の至る所が紅く黒い泥に侵され、苦しげな表情でただ前を向いていた。

「何……………で……………ッ！」

「申し訳、ありません……………多少、無理を、してしまつて……………」

「そういうことじゃ……………っ!!」

叫んでも意味が無いことに気が付き、私は令呪を行使しようと手を掲げる。だがその手をシエヘラザードが止めた。

「いけません、それだけは」

「……………!何でっ?!

「もう、少し……………ですから……………」

どういふ意味かを問うよりも先に、絨毯が少しずつ高度を下げていく。その後速度も少しずつ下がっていく。しかし完全に止まりきるよりも先に、絨毯が光の粒子となつて掻き消えた。唐突に空中に投げ出され、私は疲弊した肉体に鞭を打つてどうにか不完全

ながらも受身を取る。しかし重傷のシエヘラザードにはそんな余裕は無かった。ゴロゴロと血を撒き散らしながら転がっていく彼女の姿に、心臓が掴まれるかのような錯覚を覚えた。

「シエヘラザードッ!!」

襲い来る痛みすら忘れ、私は彼女の元に全力で走り寄る。改めて見た彼女の状態は、最悪と言っているものだった。呪いの泥は彼女の身体の至る所を侵し続け、右眼は失われ、右脚は膝から下が消えていた。あまりにも惨たらしい様相に、息を詰まらせる。

「どうして……………どうしてこんな無茶を……………ッ!!」

無駄な問いだ。何故? そんなの、私を助けるためだ。その為に彼女はこうして死にかけている。ここまで聖杯の泥に侵されてしまつては治療の余地すらない。

「死な、ないで……………! やだよ……………! まだ聞いてない話も、聞きたい話もいっぱいあるんだ……………!」

「すい、ません……………それは、少し、難しそうです……………」

流れる涙を気にかける余裕も無く、彼女の顔を見る。そこに浮かぶ表情はとても穏やかで暖かなもので、何故そんな顔をしているのかが、私には分からなかった。

「此度の聖杯戦争で、私は、何故、死にたくないのかを、思い出しました……………」

微笑みながら、彼女は泥に侵されていない左手で私の頬を撫でる。その仕草があまり

にも優しく、私はその手を握って、ただ彼女の言葉を聞くことしか出来なくなつた。

「私は、例え仮初でも、偽物でも、あの幸福を、失いたく、なかつたのです」

「でも、また、死んじゃう……………」

「ええ、ですが、私は、サーヴァントですから……………」

彼女の手から、力が失われていく。その死の訪れを感じさせる。逸る心を押さえつける。彼女の言葉を、一言一句聞き逃す訳にはいかない。

「識姫さんも、桜さんも、亡くなつてしまえば、終わりです……………」でも、私は、私なら、取り返しが、つきます」

「どう、いう……………」

「簡単、です……………いずれ、また、私を召喚して下さい……………」

「つ!?でもそれは……………」

その、彼女の願いを根底から覆す言葉に、耳を疑つた。

「死にたくないのは、事実です……………ですが、それ以上に、私は、貴女達と、生きていきたい……………」

「うん……………うん……………!!」

「識姫さんのことを、放つては、おけないですしね……………」

少しづつ、少しづつ、彼女の身体が解けていく。

「約束する……絶対！必ず！また、貴女を喚ぶから！だから………！その、時は………！」

「ええ、物語の続きは、その時に………では、結びとしましょう——」

——今宵は、ここまで——

「あ、う、ああ………ツ!!」

その言葉を最期に、ふわりと微笑みながらシエヘラザードが消えていく。もつと別の道はなかったのか、あの時違う選択をしていれば彼女は死なずに済んだんじゃないかと、無意味な問いが浮かんで消えていく。辛くて、苦しくて、悲しくて、哀しくて、悔しくて、それでも私はその感情を押し込めて、己の背後へ眼差しを向けた。

そこには、緩慢ながら未だに止まることなく地獄を広げようとする紅黒い泥の波があつた。孔が閉じてなお、この泥は無慈悲に、理由なく命を奪い続けている。

そうだ、この惨状は防げたものだ。だからまだ、やるべきことがある。

「この結果は、私の自業自得だ。だからこれは………」

全身全霊の八つ当たりでもある。

懐にしまっていた、英雄王から下賜された、無駄に豪華な装飾が施された瓶を取り出

す。その蓋を開け、一気に飲み干した。カツと、胃が熱くなるのを感じながら、私は右眼を開いた。

蘇生の後、私の左眼から直死の魔眼の力は失われている。だが直死の魔眼は問題なく使える。それは、眠っていた分も含めて直死の魔眼に関わる全ての力が私の右眼に収束したからだ。

「魔眼、臨界」

その輝きは、黄金では到底及ばず、宝石など敵うはずも無く、虹程度では届かず、星の光すら凌駕する。例えるならそれは

「」の魔眼

「死ね」

言葉と同時にピシリという音と共に、右眼からヒビが走った。そして聖杯の泥は、私の視界の外に至るものまで含めて全てが消し飛んだ。

一瞬の激痛と、それが凄まじい速度で無くなっていくのを感じながら私はその場に倒れ込む。意識が薄れていく。

「私、は……………」

その意識の中、私は言葉を紡ぐ。終ぞ口にする事の無かったその言葉を。

死にたい、などでは無い。

死にたくない、では足りない。
生きてみよう、でも届かない。
そうだ、私は――

「私は、生きていたい」

Epilogue

「お前なあ……………」

「はい、すいません……………」

病院のベッドの上、私は見た事がないほどに呆れ返った表情のウェイバーに説教をくらっていた。なお、100%私が悪いので反論の余地は微塵も残っていない。

あの後、バツチリ気絶した私はレスキュー隊に救出され、病院に緊急搬送された。のだが、右眼がどうやっても開かない（開いたらヤバイ）こと以外はなんら問題が無いという状態にお医者様は大層困惑されたらしい。更には全く問題ないのになんと1週間丸々眠っていたそうだ。

そうしてようやく目を覚ました私を出迎えたのはギャン泣きする桜とキレ散らかしたウェイバーであった。ちなみに桜は今私にしがみついて寝ている。

「まあ、説教はまた後々にするとしてだ」

「え、終わりじゃないの？」

「お前これで終わると思ったのか…………？」

「アツハイ……………」

ふざけたやり取りはそこまで、ウエイバーの瞳に真剣なものが宿った。

「お前、その右眼がどんな状態か把握してるか？」

「……………うん、大凡は」

「説明は…………」

「ごめん、あまり話したくないかな」

嘘だ。実際はこの眼がどんなものか、何ができるか、全て完璧に把握している。だがウエイバー相手とはいえ流石にこれをそう易々と他人に伝える気にはならない。

「はあ……………まあいい。とりあえずこれ付けとけ」

「これは？」

「ケイネス先生からだ」

投げ渡されたのは黒い布、というか眼帯だ。

曰く、私の容態を確認したケイネスが彼の義手を作った人形師に即依頼を飛ばして作らせたものらしい。聞けば彼のポケットマネーの大半が費やされた逸品だとか。同時に渡された手紙には、淡々と感謝が綴られていた。

「まあ、僕もお前に恩があるから深くは追求しない」

「そっか、ありがとう」

感謝を伝えると、ウエイバーは若干頬を染めて照れ臭そうにした。しばらく目を逸ら

していたウエイバーだったが、ちらりと私に視線を向けると、何やら意外そうな表情を浮かべた。

「お前、笑うんだな」

「私を何だと思ってるんだ」

「だってお前が笑ったの初めてみたぞ」

その言葉に虚をつかれた。桜やシエヘラザードといった時はもしかしたら笑っていたのかもしれないが、確かにウエイバーという時は常に気を張っていた。

「じゃあそろそろ帰るからな」

「分かった。用がある時はマツケンジーさんとこ訪ねれば良い？」

「ああ、またな」

病室を出ていくウエイバーに手を振る。なんともまあ奇妙な縁だ。今までまるで関係の無かった人間が、たった数日の関わりで私が信用出来る人の中でも上位に位置する存在になったのだから。

「……………ふう」

ウエイバーがいなくなったのを確認してから、桜を起こさないようゆっくりベッドに寝転がった。安堵の表情でぐっすりと眠る桜の姿に微笑ましい気分になりながら、私は思考を廻す。

(何をしよう、何から始めよう)

やるべき事は山積みで、やりたい事は数え切れなくて、だけどそこに込められた想いは数日前のものとは180度違ったものだ。多分、こういうのを生きがいと言うのだろう。

(まあ、とりあえず)

恐らくは、私が今一番にやるべきことがある。約束したことだ、違える訳にはいかない。

桜を抱き返し、瞼をおろす。

(退院したら、先輩に叱られに行かないと)

ここ数日で初めての、寝物語の無い入眠。そこに寂しさを覚えながら、それでも私は穏やかな気持ちで微睡んでいった。

幕間の物語

想いは嗣がれ、記される。

私が魔術を使う上での何よりの問題は魔術回路の少なさだ。色々と調べる内に肉体のスペックがおかしな事になっていることは分かったが、魔術回路は普通の一般人クラスの貧弱な代物。余裕でウェイバーのそれに劣る雑魚っぷりだ。

「どーしたもんか………」

一応、コレに関しては解決すべき問題ではあるが、実は聖杯戦争が終結した時点で解決の目処は立っていた。初動が死ぬほど時間がかかる上に、その後も継続的に管理しなければいけないが、成功すれば理論的には使える魔力は際限なく増える方法。

はたしてその試みはつい一週間前に成功した。したのだが………

「まーさか即効で封印指定食らうとは………」

聖杯戦争が終わってから、早3年。これまでのらりくらしと何とか避けていたそれが、問答無用で襲いかかって来た。

「とりあえず、お姉ちゃんは無事なんですね？」

「ああ、何とか執行者が来る前に逃げ出したよ」

ウェイバーのその言葉に、桜は安堵の息を零した。第四次聖杯戦争終結直後、識姫と桜は

ケイネスの伝手でエルメロイ一派に抱えられた。魔術回路がほぼ全損したとはいえかつてのロードであり、何より現行の天才である彼は二人を直弟子として預かったのだ。もちろんそこにはいくらかの打算が含まれてはいたが、それは彼なりの恩返しだった。彼曰く、「その眼帯は私の分、君達を弟子に取るのはソラウの分というだけだ」とのことである。

以来3年、二人は各々魔術の研鑽を積み、喜ばしいことでは無いが識姫は封印指定を食らう程の成果を上げ、桜は元々の才能もあつてか齡十にも届かぬうちに開位を獲得した。また、ウェイバーも旅を終え、ケイネスよりエルメロイ教室を譲り受け、その授業の評判の良さが生徒に知らしめられ始めたところだった。

「でも良く逃げられましたね、封印指定からたった1時間後に執行者が投入されたって

聞きましたけど……………」

「まあ、アイツに恩がある奴は多いからな……………」

ウェイバー自身に、桜、ケイネス、ソラウは当然として、この3年で識姫が作り上げたコネクションは凄まじいことになっている。現状とある理由からエルメロイ一派は基本識姫に頭が上がらず、鉱石科の魔術師達からは神の如き扱いを受けるのが識姫だ。もちろん、ほぼ全員打算塗れなのだが。

「……………しばらく会えないですね」

「……………いや、アイツの事だからむしろ数日後には会えるよう画策してるんじゃないか？」

「普通に電話使えばいいじゃん！」

つい先程までどうやって連絡を取るか考えていたのが馬鹿らしくなる。何故わざわざ魔術を使って通信しようとしていたのか。コレガワカラナイ……………」

「ちよつとした連絡にわざわざ魔道具使う馬鹿共が携帯の通信傍受出来るわけねえわ……………」

時計塔の魔術師は「魔術 is JUSTICE!!」を地で行く集団だ。桜とウエイバーは私の影響でそういうのは無いが、色々柔軟になったケイネスですら未だに機械類を使う事には難色を示している。本人同士が盗聴されないように気を付ければそれで問題無いのである。

という訳で桜に連絡し、私が現在潜伏している場所を伝えておいた。
「さてと……………」

これで桜の方の心配は消えた。とすれば今私が考えるべきはこの場に、冬木市にきた目的を果たすことだ。私が潜伏している魔術工房は全く別の場所にある。ここに来たのは、ある人物に会うためだ。

魔術関係で私がやるべき事は未だ山積み、そんな中で襲い来る執行者を薙ぎ倒すのに時間を食っている訳にはいかない。とはいえ執行者は全員が全員戦闘特化のプロフェッショナル。下手をすれば例の伝承保菌者ゴッスホルダーとやり合う羽目になる可能性もある。

「それなら、こつちもプロに頼ればいい」

餅は餅屋。魔術師は魔術師殺しだ。

目の前の屋敷に目を向ける。その表札には「衛宮」の文字がある。門を通り、その先

の玄関チャイムを押せば、数秒後に「はい！」という少年の声と共に扉が開かれた。

「久しぶり」

「蓮ねえ!」

出てきた少年、衛宮士郎に片手を上げて軽く挨拶をすれば、彼は「蓮ねえ」という愛称と共に驚きの表情を浮かべた。

この3年間の生活は、基本は時計塔周辺で魔術を研鑽しつつ生活し、数ヶ月ごとに、あるいは記念日に冬木に帰ってきてはのんびり過ごすというものだった。本格的に冬木で生活を始めるのは桜が中学に上がってから、それまではあの娘に自衛の手段を手に入れさせることも目的として魔術中心の生活をするつもりだ。

で、初めて時計塔から冬木に帰ってきていた時、桜が士郎と出会ってしまったのだ。そうやってしまえば関わりを持たない訳にもいかず、結局現在は衛宮切嗣とも顔見知りになっている。

「帰ってくる時期だったっけ?桜は?」

「いや、ちよつと急用でさ。私一人で来たんだ。ところで切嗣さんいる?」

「爺さんは今出掛けてる」

「じゃあ帰ってくるまでお邪魔してもいい?」

「もちろん!」

私はだいたい士郎に懐かれている。おそらくは格闘技を教えたのが原因だ。しかも超実戦的でガチなヤツ。記録の起源で忘れないのいいことに色々な格闘技を習得し、良いとこ取りの末に完成した、言うなれば『蓮葉流格闘術』。我がことながらやっちゃった感が凄まじい。

ただ切嗣さん曰く魔術への拘りは多少なりとも薄れたらしい。めつちや複雑な表情で感謝された。

「蓮ねえはお昼はもう食べたのか？」

「いや、まだ」

「そっか、なら丁度今から作るところだからご馳走するよ」

「マジ？ありがとうございます」

居間に通され、士郎が料理をする様子を見守る。ちなみに私もそれなりに料理は出来るが、どこまでいってもレシ記ピ録通りなため既に士郎はもちろん桜にも料理の腕は負けている。アレنجシしようとする**と必ず失敗するのだ。**

「今回は用事が終わったらすぐ帰っちゃうのか？」

「いや、しばらくは日本にいるよ。冬木では無いけど」

「なら時間がある時でいいからさ……」

「いいよ、切嗣さんとの話が終わったら組手しようか」

「よっしやー！」

まだ10歳、年齢相応な態度にほっこりとした気分になりつつ、私は切嗣さんの帰宅を待つのだった。

「ただいま〜！」

「おかえり爺さん、お客さんだぞ」

「僕に？」

そんな会話が聞こえ、目を覚ました。どうやら寝てしまっていたらしい。ここ数日慌ただしかつたこともあつてろくに眠れていなかったからだろうか。

いつの間にかかけられていた毛布をどけて立ち上がり、伸びをする。疲れは取れた、がこれから更に疲れる話をしなければならぬ。

「ああ、識姫ちゃんか」

「どうも、お久しぶりです切嗣さん」

聖杯戦争の最中は敵同士、何なら殺し合ったような仲だが、それはもう過去の話。既にそこら辺の確執は取り除いている。今は共に士郎と桜の情操教育の為もあって、普通に良好な関係を築けている。

「ちよつと急用で、相談したいことがありますて」

「急用？何かあつたのかい？」

「ええ、まあ。ただそれより先に……………」

いい匂いが漂ってくる厨房を指差す。

「冷めたら士郎に悪いですし、先にお昼食べちゃいましょう」

「それで、相談って？」

「……………」

自分から持ちかけた話でありながら、口籠る。彼は既に戦いから身を引き、穏やかな日常の中にいる。今から私がしようとしているのは、それをほんの少しでも戦場へ引き戻そうとする行いだ。

意を決して、口を開いた。

「起源弾を譲ってほしい。」

「っ……………！」

彼は驚いた表情で私を見返す。目を逸らす事無く、私は続ける。

「つい一週間前、私は封印指定を受けました。ただ生憎と執行者を相手取っている暇はない。」

「……………隠れる為の工房は作ったのかい？」

「ええ、冬木ではありませんが日本に」

「なら、問題ないと思うけどね。執行者は余程の事がなければわざわざ追ってくるなんて事はしない。」

その言葉に、私は無言で首を横に振った。ダメなのだ。

「私の起源がそれを邪魔する」

記録。この3年でわかったことだ。この起源は、隠蔽や隠匿という種別に類する魔術、行動にゴミのような相性を発揮する。私の行動の全ては私が認識していない領域含

めて無意識的に記録される。またその記録を見る者も、本来なら認識不可能な記録を無意識に受け取り、それを直感という形で出力し始めるのだ。それ故に、どれだけ上手く隠れても私はその直感によって見つけ出されてしまうのだ。

キャストの英霊が作り上げるレベルの工房ならともかく、現在の魔術師が作る工房ではろくに隠蔽効果は望めない。どれだけ高性能な結界でも一年以上はもたないだろう。

「……………」

沈黙し、目を閉じ思考する彼からの返答を待つ。カチカチという無機質な秒針の音だけが響く。やがて目を開いた切嗣さんは無言のまま首肯した。

「ありがと「その前に、だ」……………」

「一つ、聞かせて欲しい」

真面目な表情のまま、彼は私を真つ直ぐと見据えた。

「君は、何の為に戦っているんだい？」

「……………」

「僕は、桜ちゃんと穏やかに、なるだけ魔術に関わらないよう過ごす方が君達は幸せになれると思う。魔術は関わるだけで何かを奪っていくものだ。僕は、君がわざわざ茨の道突き進もうとする理由が、分からない」

今度は、私が黙考する番だった。一度何もかもを失った男と、一度何もかもを奪われた私。きつと彼は今の私を見て、過去の自分と重ね合わせているのだろう。私が、破壊の道突き進もうとしているように見えてしまっているのだろう。

「約束を、守りたいんです」

「約束？」

再び彼女と出会うために。今の私も幸せだ。だけどそこで妥協してしまえば、私は一生消えない後悔に苛まれることになる。

「私は貴方とは違う。私は、どこまでも自分勝手に、身勝手に、我儘な願いのために戦おうとしているだけだから」

「———そうか」

フツと微笑んだ後、少し待っていてくれ、と彼は部屋を出た。数分の後戻って来た彼の手には小さな箱が握られていた。手渡されたそれを開ければ、そこには弾丸が一つだけ収まっていた。

「もう使わないと思っていたから、それ以外は処分してしまつてね」

「いえ、充分です。ありがとうございます」

「構わないさ。それと、これは提案なんだが———」

その提案は、私にとって渡りに船とでも言うべきものだった。

四年後。

「……………不つ味」

衛宮切嗣は数日前。眠る様に息を引き取った。士郎から渡された、ここ数年倉庫の肥やしとなっていたという彼のタバコ「煙龍」の不味さに驚愕しながら、私は目の前の箱、その中に収められた一枚の手紙に目を向けた。

「想いは嗣ぐとも」

地獄を歩み続けた男の、その終わりが穏やかなものであったことに安堵し、私は煙を燻らせた。

ほぼ奇襲

私自身は起源故に隠れることが難しい。だが私が何かを隠すこと自体は実はそう難しくは無い。そのため、今私は魔術工房とは全く別の、何ら魔術的な要素の無いマンシヨンの一室にいる。作り出した礼装等は世界の至る所に作った工房に隠し、私は全く別の場所に滞在することで研究の成果がおじやんになるのだけは避けるという寸法だ。

「Oh……」

そんな中、遂に一人、私の居場所を突き止めた魔術師が現れた。今済んでいるマンシヨンの警備会社は買収済なので監視カメラは見放題なのだが、そこに現れたその女性の姿に思わず頭を抱える。別にそれ自体は特に驚くことも無い。いずれは必ず起こり得る事で、覚悟もしていた。とはいえ初手でそれは流星に心臓に悪過ぎる。

「いや、ええ？マジか、ええ??」

語彙力が消失したがそれもしょうがないと思う。なんせ初めは来るにしても名も知らぬ執行者とかだと思っていたのだから。それが初手この人って。

彼女は警備も防犯システムも知るかと言わんばかりに素通りし、着々と私の部屋に近づいて来ている。そうして彼女が辿り着いたのは私の部屋の扉の前。チャイムが押さ

れ、ピンポーンという無機質な音が私の耳に届いた。

「ツスウー……」

同じマンションに彼女の知り合いの魔術師が潜伏してる可能性なものすら無いらしい。ここまでこられては逃げようも無い。意を決して扉を開いた。

「貴女が蓮葉識姫さん？」

「はい……」

「私、その眼帯の製作者なんだけど……」

そこまで言って、彼女は眼鏡を外した。

「少し、話を聞かせてもらってもいいかな？」

「はい……」

蒼崎橙子。現状唯一、この世界において最高を意味する冠位《グランド》を戴く人形師が私の目の前に現れた。



「それで、なんで私なんかを？」

「なんかとは随分な言い草だな、その眼帯を着けて平然としているというのに」

その言葉に首を傾げる。この眼帯は橙子さんが作ったもの、それは確かに付加価値が生まれてもなんら不思議では無いが、所詮魔眼を封じる眼帯というだけのはずだ。

しかし、彼女は私のその様子に目を見開き、「まさか聞いてないのか？」と零した。

「その眼帯、三回も突き返されたんだぞ？効果弱過ぎる」とな

「は？」

「結果それは、マトモな魔眼では完全に機能不全を起こし、それどころか数代に渡って魔眼を持つことが出来なくなるような呪いの品だ」

「そんなやばいもんだったのこれ!？」

聞いてないぞそんなの!？」

「では、そんな眼帯を着けて平然としているお前の右眼は一体なんなのか、という話だ」
「……………見せろと？」

その言葉の直後、彼女の眉がピクリと動いた。いけない、無意識に殺気が洩れたらしい。深呼吸し、ため息をつく。本気で殺りあえば勝てるかもしれない、というか彼女はそこまで準備している訳ではないようだからこの場で勝つだけならどうにかなるだろう。が関係悪化は私も望む所では無い。

「他言無用でお願いします。後、瞼は開けられせんよ」

「それはどう、いう……………」

言葉の途中、解放された私の閉じられた右眼を見て橙子さんが絶句した。私の視界に混ざり込む紅黒い線の群れに鬱陶しさを感じつつ、ペーパーナイフを作り出し、机上にあつた馬を模した置物（記録錬金で作った）を殺してみせた。

「この眼は直死の魔眼だったものです。なので直死の魔眼としての機能も備えてはいません。あとそろそろ頭痛くなってきたんで眼帯着けていいですか？」

「ああ……………」

眼帯を着けつつ視線を橙子さんに送る。流石に彼女でもこの眼は相当な驚愕に値する代物らしい。ようやくと再起動した彼女は得心がいったと言わんばかりに頭をかいた。

「そんな物を持つていれば封印指定にもされるか……………」

「いや、これの存在を知っている人間は貴女を含めても四人しかいませんよ。何かあると勘づいている人間ならわんさかいますけど、ここまでだと考えてる人間はいないと思います」

「私以外の三人は良く君を見逃しているな」

「まあ、相応の恩を売っているので」

「そうか」

ところで、と彼女は続ける。

「そんな物を、何故私に明かした？奪われるとは思わなかったのか？」

「いざ奪われかけたら捨て身で魂ごと消し飛ばせば良いので」

「怖い事を言ってくれるな……………」

多分、それやったら橙子さんでも復活出来ない。直死の魔眼、ないし普通の殺害行為による死を英霊の消滅に例えるなら、この眼による死は座そのものから消滅するのと同義だ。そうなれば、流石の冠位人形師でもどうにもならないだろう。

「一応、貴女に話した意図はあります」

「というと？」

「私は、この眼を使い潰すつもりです」

こんなもの、役割を終えたら私の未来には必要無い。使い切ればそれこそ用済み、出洩らしになった後なら魔眼蒐集列車に売り飛ばしても構わないくらいだ。

「ただ出洩らしとはいえ、宿っていた物がモノ。なんの効果もなくても、その内に眠る神祕は少なくとも黄金、高い確率で虹のそれに匹敵する。そんな物を何処その名も知れない馬の骨に売り渡すのは気が進まない」

という訳で初めは桜にそれを渡そうと提案した。が、

「曰く、『そんな物を渡されても使い道がない』」

桜は魔術師ではない。自分の身を守る為に学んでいるに過ぎない。現時点で将来の夢を聞くと顔を赤らめ、モジモジとしながら「士郎さんの……」とモゴモゴ言い始めるので身に付けている常識や思想はかなり一般寄りだ。そもそもとしてあの娘にとつて強さとは平穩を維持するための手段に過ぎず、根源も求めているものではないのだ。

では、魔術師であるウェイバーに提案してみれば、

「曰く、『周りの魑魅魍魎に狙われる理由が増えるだけでマトモに扱い切れるものじゃない』」

魅力的には魅力的らしいが「今の僕が手にした所で、知らない間に奪われるか殺されて奪われるのが関の山だ」というのがウェイバーの言葉だ。また、仮にこの眼を保持し続けられても、結局手を付けられるのが数十どころか数百先の代の子孫になりかねないとも言っていた。

ケイネスにも提案したが『今の私の身には余りある』と断られてしまった。

「だとしても、今日会ったばかりなんだぞ？ 私達は」

「例え初対面でも、現状唯一の冠位の魔術師。馬の骨は馬の骨でも幻想種の馬の骨が良いつてことです」

「言い方どうにかならんのかお前」

呆れ顔で眩いた後、彼女は沈黙する。その数秒の静寂の後、彼女は「わかった」と言葉零した。

「その提案を受けよう。ただし、一つ条件がある」

「条件？」

「私に対価を請求しろ」

..... What?

「はあ……良いか？契約というのは、双方に双方が納得するメリットがあつてはじめて成り立つものだ」

「私にとつてみればこの眼を誰かに押し付けられるのはメリットなんです……」

「言つただろう双方が納得するメリットだ。お前は納得していても私が納得していない。私からすればお前が一方的に損をしているようにしか感じない」

「それが何故ダメなんですか？」

「信用できない。相応のメリットを与え合う事は、万一裏切られた際に相手を糾弾する理由付けにもなる。今のままでは直前で『やっぱりやめる』と言われても私は文句の一つも言えん」

「要するに私が裏切つた時にぶち殺す為の正当性が欲しいと」

「だから言い方どうにかならんのか。合ってるけど」

なるほど、と納得の声を上げる。この眼が魔術師にとって値千金の代物であることは私も納得している。要するに先程までの私は「特に見返りは要らないけど100億円上げるね☆」とでも言っている不審者と同様の存在だったわけだ。

「なら、いくつか条件を出しますね」

「ああ、大概の事は聞こう」

「ではよろしく願います」

「……………私としては納得がいつていないんだがな」

玄関で釈然としない表情の橙子さん。私が提示した条件は『後々桜に魔術を教えること』『私にルーン魔術を教えること』の二つだ。これ以上は私自身条件が思い付かなかった。

「それなら、私ではなくいずれ妹に返してください」

「……………そうさせてもらおう。では、」

その言葉を最後に彼女は再び眼鏡をかけた。

「またね」

「ええ、また」

優しい微笑みと共に去っていく橙子さん。その背が見えなくなり、家の中に戻り、自室のベッドの上に転がったところで、私の口から意図せず言葉が洩れ出した。

「こ、怖かった……………」

今まで会ってきた誰よりも風格のあるその様。その場では彼女に勝っても、最終的には完膚無きまでにボコボコにされるに違いない、という根拠が無い筈なのに妙な信憑性を誇る確信のせいで、私はその日中萎縮しっぱなしになるのだった。

増殖ロータス

アメリカ、シカゴ。

「……………」

目の前に聳え立つ超高層ビルを見上げ、私はポツリと眩いた。

「調子に乗りすぎたかもしれない……………」

今日から、このビルは私のものである。

「ふう……………」

最上階の一室にて、その窓からの眺めをソファに座りながら一眸する。さながら100万ドルの夜景と言った所か。

「……………お酒飲みたくなってきた」

封印指定から、聖杯戦争の準備を進めつつ早2年。執行者と殺し合いを繰り広げ、礼装を作り上げ、橙子さんからルーン魔術を学び、と私は忙しい日々を過ごしていた。そんな中ある物の管理に困り、購入したのがこの高層ビル。今日は私もここで過ごすが見つかると困る為明日には別に用意した拠点へ向かうつもりだ。

「おーいーちよつとお酒持ってきてー！」

奥のキッチンに向かつて声をかける。しばらくして現れたのは、表情の乏しい顔に若干の呆れを滲ませた私だった。その服装はクラシカルなメイド服で、デザインだけ私と同じ眼帯を左眼に付けている。見た目は丁度15歳の時の私と同じだ。

「そう、自堕落で他人に任せ切りなのはどうかと思います」

「他人じゃないよ私だよ」

「屁理屈を……………」

彼女は持ってきたアイスペールにシャンパンを突っ込み、それを机に置いてから私の隣にドカリと座った。私はシャンパングラスを二つ作り出し、片方を彼女に渡してからグラスにシャンパンを注いでいく。

「私は未成年ですが」

「私が成人してるから無問題」
モーマンタイ

グラスを軽くぶつけると、チンツという軽い音が響いた。

そう、彼女こそが私が封印指定にぶち込まれた決め手。その精神は別々でありながら、肉体年齢以外は全く同じ肉体を持った《私自身》。呼称を『ハスバドル』としている。

「んー美味しい！流石に高いだけあるわ」

「俗……」

私にとつて何よりの問題は使える魔力の少なさだ。この問題の打開策として、初めに私が考へ着いたのが『擬似的な令呪の活用』だ。魔力を“令呪”という形に押し留め、必要な時に解放して使うという方法。これ自体は間桐の資料のおかげもあつて成功したし、実際私の身体には今もいくつかの擬似令呪が刻まれている。が、使い勝手がゴミな上、今はともかく以前の私では3年で1画作り出すのが精々と、とてもじゃないが準備が間に合わないということが始める前の時点で分かりきつていた。

そして私が至ったのが『記録錬金で自分自身を増やし、実質的な魔術回路の総量を増やす』というもの。まず素体となる人形を幾つか作り出し、完成した擬似令呪を消費しての記録錬金によつてそれら全てを私そのものに変じさせ、また間桐の資料を活用し自分同士でパスを繋げ、私含む全ての個体間での魔力の受け渡しを可能にした。

果たして目論見は成功し、私は3人のハスバドルを完成させた。結果、私は実質的に本来の4倍の魔術回路を使える様になったのだ。

「姉さまはもう少し教養を身に付けた方がよろしいかと」

「俗なくらいな方が人生楽しめるって」

「桜に格好が付きませんよ」

「口ばかり上手くなりおって……………」

彼女はその3人の内の1人、名を『瑪瑙』。現状ではハスバドールはもつといるのだが、この娘の様に自律的に行動できるようにしているのは初めに作った三体だけだ。他は自我を持たせないまま保管し、眠らせている。その為の施設がこのビルという訳だ。

「ところで、明日からの管理は私に一任されるということでしょうか?」

「とりあえずここはね」

「…………まさかあの倫理観が消し飛んだ光景を別の場所にも作るつもりで?」

「まあ、まだまだ足りないからね。あと二箇所は作るつもり」

第五次聖杯戦争時点での完全な聖杯の解体、それに必要な総魔力はまだまだ足りない。あと2年はハスバドールを作り続けるつもりだ。

「すつかり魔術師、ですな」

「いいや、私は依然魔術使いだよ」

死なない程度に自分自身を雑に乱用する。それが私の主義だ。他人に迷惑をかけてしまうことはあっても、他人を犠牲にすることだけはしない。それを守る限り、私は魔

術師にはならない筈だ。

「あんなものを私に埋め込んでおきながら、良くもまあほざきやがりますね姉さま」

「……………それは、ごめん」

「……………いえ、口が過ぎました。こちらこそごめんなさい」

表情を曇らせて顔を背けた瑠璃の頭を撫でる。自分で自分を撫でるといふのは中々不思議な気分になる。とはいえ、自我を与えてから2年も経てばそこに個性が生まれ、顔立ちも当時の私とは異なってきたため、結構普通に妹扱いしてしまっているのだが。

「ま、大丈夫だ！瑠璃も私自身な以上、誓って死なせない。もう二度と、誰一人として私の目の前で死なせたりなんかしない」

その為に、私は力を蓄えているのだから。

「執行者ぶち殺しまくってるのに良く言いますね」

「それはご愛嬌……………」

翌日。識姫がそのビルを去った後のこと。

「さて……………」

ハスバドール、瑪瑙は一人準備を進めていた。下ろしていた髪を夜会巻きに整え、自室に備え付けられた金庫から一つの箱を取り出した。その箱から現れたのは一丁の拳銃だ。豪華な装飾が施されたリボルバー式の逸品。弾速を向上させ、反動を軽減する魔術が組み込まれた礼^{アンティーク}装だ。

「はあ、面倒……………」

一言と共に、その銃を右手に彼女は部屋を出てエレベーターに乗り込んだ。扉が閉まったのを確認してから、彼女は階を表す数字のボタンを何かの順番に沿って押した。その数列を認識したエレベーターはどの階とも違う別の空間へと瑪瑙を運んだ。そこには壁や天井以外に何も無く、無機質な白が広がるのみだった。その中心で佇む男に向けて、彼女は言葉を投げた。

「冠位魔術師直伝の対侵入者用の魔術結界。何も分ならずこの場に飛ばされた気分は如何で？」

「冠位……………なるほど、あの傷んだ赤色とも知り合いなのか」

「えっ？馬鹿すぎる……………」

サラツと禁句を言つてのけた男に、思わず最大限の侮蔑の言葉が洩れた瑪瑙。その言葉に気を悪くした男、執行者である彼は、パチンツと指を鳴らした。それとほぼ同時に、彼の服の中から枝が群れとなつて現れた。その材質は、鋼鉄。黒鉄の枝はのたうち、男から離れるとその場に根を張り出す。

「行け」

その言葉に従い、枝から樹へと姿を変えた鋼鉄の群れが瑪瑙に迫る。未だ彼女を識姫と思つている男は、眼帯に隠されたその眼に警戒していた。

だが、その予想は彼にとって想定外の方向に裏切られる。

「えい」

そんな軽い掛け声。それとはかけ離れた技量と膂力のもとに放たれたのは、聖堂教会が誇る異端狩りの専門家、代行者の武器である『黒鍵』だった。

鉄甲作用。そう称される技術によって放たれたその刃は、男の鉄魔術の枝術を容易く穿ち、砕いていく。

「随分脆いですね」

右手に銃を握り、左手の指の隙間に黒鍵の柄を挟み、瑪瑙は構える。対して男は懐から真つ黒な種のようなものを取り出し、周囲にばら撒いた。それらの種は地に落ちると同時に急速に成長し、生み出された枝は獣の形へ変じていく。そうして彼の周りに計7

体の鉄の獣が現れた。

「行けっ!!」

掛け声と共に、先程の枝を超えた、獣と言うに相応しい俊敏さでそれらが瑪瑙へ襲いかかる。それに対応する瑪瑙は、やはり気怠げな様子そのままに黒鍵を投擲していく。三本の黒鍵が、3体の魔獣を穿ち抜いた後、瑪瑙は左眼の眼帯を外した。

「なっ?」

男が見たのは、彼女の左眼を中心に刻まれた、宝石の結晶を思わせる七つの呪印だった。それそのものに驚いたのでは無い。彼は、そこに込められた莫大な量の魔力に驚愕していた。

擬似令呪

サイヴァント

使い魔への命令権としては使えずとも、その魔力量は本来の令呪と同等のもの。

「擬似令呪解放」

その内の一画が、光と共に消失する。その莫大な魔力の塊が瑪瑙へ与えたのは、ただの身体機能の強化。しかしその強度は通常の魔術のそれを大きく凌駕する。

ズガンツ!!という何かが壊れる音。それは彼女の脚が、今正に飛び掛からんとしていた魔獣の頭部を蹴り碎いた音だった。残り3体となった魔獣に向けて瑪瑙は再び黒鍵を投擲する。全ての魔獣が破壊され、動揺する男に向けて瑪瑙は銃口を向けた。

「では、さようなら」

乾いた音と共に放たれた弾丸が男の右肩に着弾する。貫通はしない。弾丸そのものの威力はその弾丸には意味が無い。理由は単純、その一撃には着弾こそが何よりも重要だからだ。

「起動」^{Open}

その言葉と同時に、男の肩が爆ぜた。

「が、あ、ああつ?!」

胴体から右腕が分離し、その激痛に悶える男に向けて瑪瑙は黒鍵を投擲する。対物ライフルを受けたかの如く吹き飛ばされ、黒鍵によって壁に縫い付けられた男に、彼女は弾倉に込められた全ての弾丸、起源弾^{Open}を男へ叩き込んでいく。

「ふう、起動」

言葉に呼応し、着弾箇所が爆ぜ、燃え上がる。その火力に、骨すら残すこと無く燃え尽きた執行者だった物を一瞥してから瑪瑙は眼帯を拾い上げ、再びエレベーターに乗り込んだ。

「本当に面倒な仕事^{掃除}を残していきやがりますね、姉さまは」

後片付けを後回しに、昨日のシャンパンを飲み干してやろうと心に決めながら、瑪瑙は自室に戻っていった。

多分ゴリラとかそういう類の生命体

封印指定、そして執行者。魔術師にとって見れば目の上のタンコブでしかないそれにも、実力の優劣がある。最上級の執行者と最下級の執行者では、その力量には雲泥の差がある。

例えば3年前に瑪瑙が対応した執行者。あれは雑魚だ。いや魔術師全体で見れば相当強い部類ではあるだろうが、生憎と私は戦闘特化。それこそ素でもアサシンかキャスターは殺せるくらいの力を目指している。で、恐らく現時点で持ちうるリソースを全て費やし、瑪瑙含むハスバードルズの助力込みならば、対百貌のハサンなら勝ち目があるくらいには私は強い。

ではコルネリウス・アルバ赤なら工どうだろう。丁度今の時期から1年前、実は彼とも殺し合ったのだ。これも………まあ一応私が勝った。いや勝ったと言っていないのかあれ？

事の顛末は単純で、なんともまあ間の悪い事に橙子さんとの電話中に襲いかかって来たせいで”あの名”を呼んだ事を本人に聞かれてしまったのである。本格的に殺し合う前に『蒼崎橙子 参戦!!』の後瞬殺されたので実力差はよく分からない。でも多分勝

てたとは思う。

では私の目の前にいる女性はどうか。

スーツに身を包み、手袋を付け、金属製の筒を抱えた男装の麗人。こと人間としては杜撰極まるが、代わりにその実力は規格外と言って差し支えないだろう。

バゼット・フラガ・マクレミッツ。

当代、いや歴代最強と言っても過言ではない執行者が、私の目の前に立っている。

「見逃してくんない?」

「出来かねますね」

「そっかあ……………」

ならば、仕方あるまい。深呼吸を一つ。

刀を、銃を創り出す。弾丸は全て私か切嗣さん製の起源弾。殺意MAXな装備だが殺す気は無い。というか今死なれるのは困る。彼女にはランサーを召喚してもらわなければならぬ。

「悪いけど、捕まる訳にはいかんのよね。だから……………」

全力で足止めして逃げる!!

「疾ッ!!」

短く息を吐きつつ繰り出される拳。およそ人間が出している威力じゃないそれを、識姫は合気道の技術を使って受け流す。その拳圧のみで凄まじい風が起こる事に戦々恐々としつつも、内心では努めて冷静に状況を精査する。

バゼットに比べて識姫が勝っている点は、リーチと決定力、そして手札の多さだ。刀と銃識姫VS拳バゼットなら有利は識姫に傾く。そして何より、彼女は死の線をなぞることによる防御無視の必殺の一撃がある。バゼットの拳が頭にでも当たればそれも即死だろうがそれはお互い様だ。最後に攻撃の手段。殴る蹴るor斬フり扶ラる戦神ラッの剣クのみのバゼットに比べれば識姫の攻撃手段は膨大な数と言ってもいいだろう。

「ふっ!!」

識姫の顔面に向けて真っ直ぐ伸びてくる死の予感。そこに刀を置く。バゼットの手袋には硬化のルーンが刻まれている。だがそんなものは識姫の右眼の前には無意味だ。

識姫の刀は手袋を容赦なく切り裂き、その拳へ切り傷を刻み付けた。

「なっ!?!」

驚きを顔にし、一瞬硬直するバゼット。その隙を見逃す程識姫は甘くない。容赦なく袈裟斬りを放った。しかしその刃はバゼットの服を切り裂くだけで留まる。跳び退くバゼットに向けて識姫は銃を乱射する。しかしその全てが拳によって弾かれるか避けられた。弾かれたものは地面に着弾すると同時にルーンが刻まれ炎を上げる。驚くべきことに、彼女は切嗣製の起源弾は綺麗に避け、識姫製の起源弾のみを弾いて見せたのだ。

(獣かよ……………)

イカれた精度の第六感に呆れながら、識姫は空になった銃を投げ捨て、正眼の構えをとる。しかしそれは見せかけだ。そも拳を武器とするバゼット相手に近接戦、あるいはクロスインファイト超近接戦を挑むなど自殺行為も良いところだ。

(ま、近接戦のリスクは見せられたでしょ)

今、識姫とバゼットがいるのは識姫が購入したマンシヨンの15階だ。壁を全てぶち抜き一部屋と化したその階は魔改造の末、外部からの攻撃に限ればほぼ地下シエルターと同レベルの防御力を誇る。そしてそれは、識姫が全力で暴れても良いように設計されたものだ。

「ふううふうう……………」

深く息を吐き、如何にも今から斬り掛かるぞ、といった様子を見せる。しかし次の瞬

間、識姫は足元にナイフを一本削り出し、その柄を蹴り飛ばした。魔術によって強化された脚力で放たれたナイフは虚を突いたことと、そこその速度があることもあってバゼットの対応を僅かに遅らせたが、代行者の黒鍵を受けたこともある彼女がそれに当たると道理は無い。首を軽く傾げるのみでそれを避け、これで識姫は体勢を崩したはずだと攻め入らんと前傾姿勢に入る。

しかしそこで彼女が見たのはどういふ訳か体勢を元に戻し、何かをこちらに投げ付ける識姫の姿だった。

「p r e s e n t f o r y o u ★」

「?」

「?????」
巫山戯きつた識姫の言葉直後、投げ付けられた何か、レコーダーから異常な程に圧縮され、最早人間の耳では雑音にしか聞こえない音が洩れる。

直後、レコーダーを基点に凄まじい威力の爆発が起こった。

「ぐっううう!!」

直撃は避けたバゼットだったが、避けきることは出来ず火傷を負う。回避直後のバゼットを狙い、識姫は黒鍵を投擲。バゼットはそれを拳で砕きつつ、どうにか識姫に近付こうと駆け出した。

(レコーダーは効果薄めだな……………)

一度見せたこともあって、恐らくはもう通用しないだろうと考えつつ、識姫は若干の後悔に襲われていた。今のレコーダーは、1つ製作するのに一週間を要する。識姫の持つ礼装のなかで唯一記録錬金を持ってしても創り出せないものだ。

コストに対して与えたダメージの少なさに不満を抱きながら、識姫は刀を脇に放り投げつつ、再び銃を創り出した。創り出したのは対物ライフルレットM82。この銃は識姫によって魔改造を受けている。具体的な内容は……

「Fire!!!」

ドガガガガガガガガ!!!

本来セミオート式の所をフルオート式にしているという点だ。強化魔術によって耐久性を上昇させなければ弾倉が空になるよりも先に銃がイカれるという頭のおかしい性能。一発一発が主装甲でなければ戦車すら貫くそれを一切の容赦なくバゼットに向けて乱射する。加えて弾丸は全て識姫製の起原弾。着弾と同時に地面が時に爆発を起こし、時に凍結し、時に切断されていく。

(当たんねえ!)

しかしそれら全てを器用に捌き切るバゼット。ジグザグと、柱を壁にしつつジワジワと識姫へ近付いていく。その様子に内心で悪態をつきながらも掃射は止めない。識姫の打つ銃に弾切れの概念は存在しない。弾薬が無くなったと同時に弾倉の中に記録錬

金で弾薬を補充できるからだ。とはいえこのまま撃ち続けても決め手にはならない。一度弾薬の創造を止めるか、と考えた時だった。

「後……り出……先……断つ……の」

銃撃の音に紛れての言葉。途切れ途切れのその文言の意味を、蓮葉識姫は知っている。

バゼットが柱から飛び出す。その右拳、その数cm先に、刃を伴い、雷撃の如き閃光を迸らせた球体があつた。それは、バゼット・フラガ・マクレミッツの真骨頂。その二つ名、伝承保菌者の由来。

「斬り決る戦神の剣!!!」

刃が迫る。だが識姫は切り札など使っていない。つまりこの刃には元来の『切り札に対する絶対的なカウンター』という性質は無い。早い話がただの宝具の解放だ。だが、宝具は宝具。現存する武装では軌道を変えるところかその威力を僅かばかり減衰させることすら不可能。唯一打開可能な死の線をなぞることによる宝具の破壊すら、手元に刃の無い識姫では間に合わない。

(あ、やば……………)

「驚きましたね……………」

抑揚の無い、しかし恐らく本当に驚愕しているであろう声音が耳に届く。

フラガラックの一撃を受けた私は、まあぶつちやけ瀕死だ。刃は右胸に突き刺さった。既に再生成した刀で殺したので刃は存在しないが、右胸の傷からダクダクと流れ出ていく血がその一撃の重みを分かりやすく表している。

傷口を左手で抑えながら、記録錬金によって体内で絶えず血液を精製する。これでもりあえず失血死はしないだろう。

「はあ……………ふ、うう……………」

「無理はしない方が良い。大人しくするなら、命だけはどうかきましょう」

激痛に表情を歪ませながらも何とか立ち上がる。無理？笑わせちゃいけない。この程度で無理だの無茶だの言っていたら私の目的は達せられない。幸いなことに、本当に幸いなことに、ギリギリ心臓には傷一つ無い。本来の使い方では無かったからだろう。

「7……………いや8かな……………」

「……………？何を……………？」

その疑問に答える訳も無い。左手を掲げ、虚勢で笑みを浮かべた。痛みもあるが、ここまで消費するのは想定外。正直痛手だが、それでも命あつての物種だ。

「擬似令呪八画解放：記録錬金」
A r s M a g i c a

私自身に、数分前の無傷の私自身を上書きする。疲労は無くなり、傷が失せた。

「なっ……………!!?」

「ドツキリ大成功！なんてね」

実質的な完全回復。ドクエで言うところのベ○マだ。多少の傷でも擬似令呪を一画は消費する上、部位欠損などしようものなら現状持ち合わせている擬似令呪を全ツツパしても足りないクソ燃費だが、如何なる傷であろうと一瞬で治癒できる、私にだけ許された魔術だ。

「何をした!?!」

「さあ?」

そこそこ到手傷を負った彼女に対して、無傷の私。服は直らないし武装も元には戻らない、もちろん魔力は消費されたままだが、身体だけは万全だ。流石の彼女も結構動揺しているらしい。なら、今が畳み掛けるチャンスだ。

刀を地面に突き刺し、拳を構える。

「……………何のつもりですか?」

「いや、殺す訳には行かないから」

舐められていると思つたのだろう、眉を顰め、苛立つた様子を見せる。全然そんなことないのであまり怒らないで欲しい。殺す訳には行かないのは事実で、死の線を見る私では刀は使えない。となればステゴロになるが、これも私では實力不足。ならどうすれば良い？

簡単だ。相手より速く動けばいい。

「固有時制御・四倍速」

踏み込み、肉迫する。一瞬でバゼットの目の前にまで迫り着いた。腰を落とし、腰辺りに右手を、左手を掲げるように構える。

「鉄山靠」

「ガッ!!?」

ズガンツ!!という鈍い音と共に、バゼットが柱へ衝突した。クレーターを生み出したその威力に我がことながら戦慄する。見た限り死んではいけないが、流石に気絶してくれたい。放置していてもそのうち勝手に動き出すだろう。………なんでこれで死なないんだろう?………?

「とりあえず逃げよう」

次に目覚められたらマジで勝ち目がない気がする。その予感をヒシヒシと感じなが

ら、私は逃走準備に入るのだった。

第五次聖杯戦争編

Prologue

とあるビル目の前。ここ数年ですつと探していたある人物が所有するビルだ。ようやく見つけ出したのは良いが、どうやら手遅れだったようだ。

「やはり、さつさと召喚するべきだったのでは？」

「まあ、知らんサーヴァント呼ばれるよりは遥かにマシだから」

「……それもそうですね。どの道何かあった時対処するのは私ですし、イレギュラーはなるべく削るのが好ましい」

「そういうこと、とっ!!」

刀を振る。線をなぞる。ビル全体に掛けられていた結果が崩壊するのを目の当たりにしつつ、私は左手にキャリコを創り出し、瑪瑙は両手に三本ずつ黒鍵を手にする。

「部下は？」

「無力化」

「アトラム・ガリアスタ^標は？」

「殺害」

「犠牲者は？」

「救出」

「サーヴァントは？」

「懐柔！」

「了解」

「それじゃあお互いに……」

「健闘を祈る！」ります

最終確認の後、私達は駆け出した。

「何だ?!何があった?!」

けたたましい警報音が工房に鳴り響く。アトラム・ガリアスタはそれに取り乱し、慌てて背後に控える部下に警報の要因を確認するよう命令を下した。結果、判明したのは侵入者の存在。結果が、そして仕掛けた幾つもの対侵入者用トラップが、その尽くが破

壊され、侵入者は一切歩調を緩めることなく、今アトラムとキャスターのいる工房へと突き進んでくる。

「一体何も……の……」

あらゆる対策が無意味に潰されていくことに焦燥を覚え、彼は部下から監視カメラの映像を写す端末を奪い取る。そしてそこに写る女の姿を確認して、言葉を失った。彼は端末を取り落とし、まるで何かから逃れるように後退る。

「マスター……?」

その様に疑問を覚え、キャスターが訳を聞くよりも先に、工房の扉が砕け散り、その向こうから2人の女が現れた。

「ヒュー、いいね、すっかりクズだ」

「手心不要で良いですね。罪悪感を覚えなくて済みます」

ゾーンズにワイシャツというラフな格好に合わない呪いと言うべき程に強力な魔術が掛けられた眼帯を右眼につけた女と、デザインこそ同じだが魔力を隠す程度の眼帯を左眼につけたメイド服の女。各々が武器を手にしていることから敵だと判断したキャスターは飛び上がり、魔術を起動する。

「マスター、ここは私が」

「………な、ぜだ」

「?」

キャスターの言葉は、アトラムに届いていなかった。最早、彼に彼女の言葉を気にかける余裕は無かった。普段の薄ら笑いすら消滅し、怯えと、恐怖にその内を支配されている。それを何とか振り払おうとしてか、彼は悲鳴の様な声を上げる。

「何故ここに!?蓮葉識姫!?!」

「双貌塔イゼルマ以来だな。アトラム・ガリアスタ」

言いながら、識姫は刀の鋒をアトラムへ向ける。

瞬間、アトラムはかつて触媒の獲得の為訪れた双貌塔イゼルマでの識姫との邂逅を思い出した。持ち合わせるありとあらゆる魔術、戦術、技術、その全てを行使し、その尽くを、今正に彼へ向けられた刀によって斬り伏せられた。そしてそれは、彼の心を折るには充分過ぎた。

「わた、私を、殺すのか!?!」

「そうだね」

「何故だ!?!私が何をした!?!何故私の命を狙う!?!」

「説明面倒だから言わな—い、—というか——」

——これから殺す奴に、教える必要無いよね?

「ひっ!」

およそ、感情というものが宿っていない淡々とした言い草に彼は小さな悲鳴を上げた。

そして、静寂が訪れる。時計すらない為か、極わずかな呼吸の音が各々の耳に届いていた。識姫は刀を、瑪瑙は黒鍵と銃を、キヤスターは魔術陣をそれぞれの標的に向ける。そして、

初めに動いたのは、識姫だった。

「Time Alter Tri-accellerate
固有時制御・三倍速!!」

常時の三倍の速度で、識姫はアトラムの身体に走る線を辿らんと駆け出す。その識姫を見逃すことなく、キヤスターは魔術陣の照準を向ける。六つの砲身。それは、例えサーヴァントであつてもまともな喰らえば一撃だけで致命傷になり得る超火力の魔力砲。だがそんなものを易々と撃たせる訳が無い。

空へ浮かぶキヤスターへ向けて、無数の刃が弾丸の如く襲い来る。その刃の名は黒鍵。対霊体には凄まじい威力を誇る聖堂教会の礼装だ。サーヴァントと言えどキヤスターは戦士では無い。その身体に直撃してしまえば軽傷では済まない。

「ちっ！小賢しい！」

苛立ちを顕に、キヤスターは防御魔術を発動して刃を受ける。だがそれを待っていたと言わんばかりに瑪瑙は銃口をキヤスターへ向けた。放たれるは起源弾。その効果は、

切断と結合。

「っ!？」

その効果にいち早く勘づいたキャスターは防御魔術を解き、回避の体勢に入る。しかしその隙に、瑪瑙は残りの弾丸をキャスターの周囲に浮かぶ魔術陣^術へ放った。キャスターは慌てて魔術陣を消す。しかしその際、視界の端に入ったのはあと数秒も無くアトラムへ斬り掛かるであろう識姫の姿だった。キャスターは苦し紛れに唯一残った魔術陣を識姫へ向け、魔術を機動した。魔力の奔流が高速で識姫へ迫る。回避が間に合わないことは戦いの専門家ではないキャスターの目にも明らかだった。だが、

「直死」

「なっ!？」

魔力砲は斬り伏せ^殺られた。それどころか、崩壊は伝播し、魔術陣さえも砕いてみせた。しかしキャスターは尚も諦めない。遠隔で、自身が可能な限り強力な防御魔術をアトラムへかける。

「じゃあなアトラム・ガリアスター」

それを、識姫はまるで何の障害も無いかのように斬り^殺、彼女はアトラムの首へ刃を振るった。

「さっつてと……………」

血払いの後、納刀しながら識姫はキヤスターへ視線を向けた。

「少し、お話ししたいから降りてきてくんない？」

識姫の視線に瑪瑙も武器を納める。敵前でありながら武器から手を離し、それぞれか一切の敵意、殺意を見せないその様にキヤスターは一先ず話を聞こうかと地面へ降り立った。

1. 冬の日、運命の夜

「誰だッ!!」

アーチャー、ランサー兩名の戦い、それに、邪魔者が入ったのはしばらくしてからだった。己の宝具たる槍を構えたランサーとそれを迎え撃つ体勢に入ったアーチャー、ここに生まれた僅かな“間”、そこに立てられた足音。ランサーはそれを聞き逃すことなく足音の主の追跡を開始した。

対して、足音の主、衛宮士郎は恐怖にその心を支配されていた。帰り際、士郎は葛木宗一郎より藤村大河からの伝言を受け、弓道場の掃除に勤しんでいた。それを終えた時、彼はグラウンドから鳴り響く音を聞いた。そこにあつたのは、人の姿でありながら、明らかに人外の領域で繰り広げられる剣と槍の応酬。掛け値なし、微塵の容赦も介在しない殺し合い。そんなものを目撃してしまった自分が如何なる結末を迎えるかを、彼は正確に理解出来ていなかった。

「はあ……はあ……は、がッ……!?!」

逃げ切った、追っ手の気配を感じず、校舎の中でそう思い違いました士郎の心臓を、真紅の刃が穿つ。そして目の前、誰も居なかつたはずの空間からランサーが現れる。槍が

引き抜かれ、士郎は倒れた。

「運が無かったな坊主。ま、見られたからには死んでくれや」

灼熱の中、淡々としたそんな言葉を最後に衛宮士郎は意識を失った。

少し遅れて、そこに現れたるは一騎のサーヴァントとそのマスター。アーチャーヘラ
ンサーの追跡を命じたマスターの少女、遠坂凛は被害者である少年へ近付いていく。そ
してその正体を知り、彼女は酷く狼狽した。

「明日から……どんな顔であの娘に会えば良いのよ……っ！」

少女は顔を覆い、天を仰ぐ。そこで、はたと気付いた。

「まだ、手はある……」

その手には、赤い宝石のペンダントが握られていた。

凛がその場を去ってから、まだ一分も経たない頃。意識の無い士郎のすぐ側の教室、
その扉が開いた。そこから現れたのは、小学生高学年程の体躯に和風のメイド服に鼻と

口元を覆うガスマスクというアンバランスな装いの少女だった。彼女はボブカットの髪を揺らしながら士郎へ近付いていく。そして懐から携帯電話を取り出した。

『もしもし』

「衛宮は無事だ。存分に桜に怒られる、姉貴」

『ふうーーーーー………』

電話越しに聞こえる声には安堵の様子が見て取れた。自ら目の前の惨状を作り出したくせに、と柘榴が呆れていると、「お姉ちゃん……？」という声が電話の向こうから響いた。多方面で現蓮葉家最強の存在の登場に慌てて弁明を始める識姫に内心いい気味だ、と毒づきながらも、彼女はそれを制止した。

「先に報告だ。説教はその後存分にしてくれ」

『はい………隠れるのに使った擬似令呪の数は？』

「4画。あのクーフリーン相手にルーン魔術を使って、でこれだ。結果としては上等だろっ」

『そうだね想定内。よし、今日はもう帰ってきて休んで良いよ』

「いいのか？衛宮がセイバーを召喚する前に死ぬかもしれないだろ？」

『逃げ腰と覚悟を決めた後じゃ話が違う。それに衛宮邸の方には瑠璃を向かわせてるから。あと何より——』

——もうすぐ術式が完成するから。

「……………そうか、真っ直ぐ帰ることにする」

『士郎起こさないようにね〜』

「了解。桜、説教再開していいぞ」

『ちよおm』

識姫が何かを言う前に通話を切断し、柘榴は士郎を一瞥した。

「姉貴に目をつけられて不憫にな……………」

割と本気の哀れみを込めた視線を向けた後、彼女は踵を返した。

「あのハピエン^姉厨^貴に目を付けられたんだ。お前の行く末はバッドエンドどころかメリバ

すら許されんだろうよ」

「なんだこれ」

帰宅した柘榴に呆れ切った視線を向けられる。そんな私の首には反省中の文字が刻

まれた木版がぶら下がっている。ついでに正座で地べたに座っている。

「反省中です」

「ふーん」

「もうちよい私に興味持とう?」

辛辣な反応におよよと泣き真似をするが尚もガン無視される。仕方ないと立ち上がろうとしたところで、長時間の正座の結果足が痺れに襲われた。

「うぐおおおおお……!」

「一体何を遊んでいるのですか……?」

足の感覚に悶えつつ視線を声のした方へ向けると、呆れ顔のキャスターがそこにいた。ごめんごめんと軽く謝罪しつつ、頼んでいた仕事術式の進捗を聞いた。

「完成したわ。後は貴女の準備だけよ」

「OK、何すればいい?」

「術式用の礼装があるから、それに着替えてちょうだい」

「へーい」

そう言つて案内された部屋の中へ入ると、その中心にはトルソーに着せられた真っ白なドレスと、そのドレスに合わせた真っ白な布地にバラの装飾が施された眼帯があった。明らかにデザインにキャスターの趣味が多分に含まれている。

「全部終わったら桜の分作ってもらおうか」

そんな戯言を呟きながらドレスに袖を通す。サイズはピッタリだ。眼帯を付け替える。どうやら性能は橙子さんの眼帯と変わらないらしい。サラッとそんな物を作り上げたキャスターの手腕に戦慄しつつ、部屋の鏡でおかしな点がないかを確認する。

「……………よし」

部屋を出て、工房へ向かう。私達が居を構えている場所は第四次聖杯戦争後、切嗣さんが爆薬で作り上げた魔力の吹き溜まりのある位置の真上にある。今回の聖杯戦争が40〜50年後に起こる、という見積もりの元に作られ、その前にこの吹き溜まりが崩壊し、連鎖的に大聖杯ごと大空洞を崩壊させる算段だったらしい。これも放置してるととんでもない災害になりかねないので利用することとしたのだ。

（ようやく始まる）

10年。長い、とても長い準備期間だった。

擬似令呪、ハスバドールによる魔力量の問題の解決。起源弾及び各種礼装による戦闘能力の向上。バゼットの持つ現存する宝具と使い魔越しに見た魔天ヘカティック・ホイールの車輪。

そして、最果ての槍。

（もうすぐ終わる）

工房の扉を開ける。役者は既に揃っていた。

「覚悟はいいかしら？ 識姫」

英霊としての装束を身にまとったキャスターが問い掛けてくる。

「そんなもの、10年前には終わってる」

僅かな光を放つ召喚陣の中心へ向かう。私から見て北にはキャスターが、南には柘榴が、東に桜が、西に瑪瑙が位置している。

深呼吸を一つ。

「始めよう」

その言葉を合図に術式が機動する。

——これは、約束の為の物語だ。

2. ランサーVSライダー

「よお」

「……………」

冬木市。その新都に立つ一際存在感を放つタワークレーンの上。二騎のサーヴァントが邂逅を果たしていた。

一方は、髪の高い女だった。その両眼をバイザーで隠し、その両手にダガーが握られている。

他方は、青いタイツを身につけた男だった。その手には真紅の槍が握られ、その眼光は獣の如き鋭さを誇っている。

「あの騒ぎはお前の仕業か？」

「ええ、そうですが、何か？ 気に触りましたか？」

「いや別にいい？ 追いつめられりやあ俺も似た様な事をするかもしれねえしよ」

「では、何故こんなところまでいらっしやったのですか？」

「はっ！ んなもん……………」

嘲笑の後、男、ランサーは獰猛な笑みを浮かべ、槍を構える。それに呼応し、女もダ

ガーを構えた。

「デメエをぶち殺す為に決まってるがア!!」

ガンツ!と地を蹴り、ランサーは神速でもってライダーへ肉迫する。対するライダーも両手のダガーで朱槍を迎え打つ。

ケルト神話の大英雄、クランの猛犬と、ギリシャ神話の怪物、石化の眼差しを携えた女神の殺し合い。槍の一突きが、ダガーの一振り、その全てが致命となりうる死の領域が生まれた。

「フツ!!」

ボツ!と槍が空気を叩く。常人が見れば全力の一撃としか見えぬそれは、しかし英霊同士の殺し合いにおいてはただの様子見に過ぎない。

「シツ!」

ギイイイン!と槍とダガーがぶつかり合う。火花が散らしながら、ライダーはその猛攻を捌いていく。突きを逸らし、薙ぎを弾き、打ちを躲す。そしてその間隙を見逃すことなくダガーを振るい、それを避けられ、防がれる。一見互角に見えるそのやり取りは、しかしその実ライダーの不利に進んでいた。

「つらア!!」

「っ!」

鋭い一刺し。その鋒がライダーの頬を掠る。対したダメージでは無いとはいえ、この戦いにて先に傷を負うというのは、そこにある実力差を如実に表していた。

されどそれは即座の決着を意味しない。これはランサーもライダーも預かり知らぬことだが、この戦い、双方共にマスターから枷が掛けられている。ランサーは令呪によつて、ライダーはあくまで口頭での指示に過ぎないが、本人がそれに忠実に従うつもり故にこの場での決着は許されない。

(罫が明きませんね)

頃合いを見て、ライダーは自ら僅かな隙を晒した。それをランサーは見逃さない。あからさまな、攻撃して下さいと言わんばかりの隙だ。タイミングも、丁度槍を放つには足りず、脚撃ならば間に合うであろう程度の間。何かを狙っているのが丸わかりだった。だが、ランサーはそれに乗つてやると蹴りを放つ。

「ぐっ！」

最速、と称される槍兵の脚撃。まともにくらえば、それだけで霊核を砕かれかねない一撃を、ライダーはダガーでもって受けた。しかしその勢いは殺す事は出来ず、クレインの端まで後退する。

しかしその勢いを殺すことも無く、ライダーはクレインから飛び降りた。

「はあ？逃げんのかよー！」

ランサーは慌ててライダーを追う。対してライダーはその追跡を気にすることもなく地上、そこに準備しておいたハーレーダビッドソンへ飛び乗った。そしてすぐさま保有するA+ランクの「騎乗」スキルに任せて走り出した。

「ちっ！」

着地したランサーは舌打ちの後ライダーの追跡を開始する。その敏捷性は此度の聖杯戦争においては随一。しかし”馬”に乗ったライダーに勝るか、と言われればそうでは無い。

「クソが」

小回りではランサーが勝るが、直線距離ではライダーに追いつくことが出来ない。しばらくは追跡を続けることになるであろうことに、ランサーは苛立ちを隠すことも無く速度を上げた。

「物凄く心臓に悪い……………」

一連の流れを使い魔越しに観測していた桜は、ライダーが何とか逃げ出したのを見てから深いため息と共に椅子に座り込んだ。

(後10分程で到着します。このまま向かって問題ありませんか?)

(うん、私も瑠璃お姉ちゃんも準備は済ませているから、そのままお願い)
(了解しました)

ライダーとの念話を終え、再び桜はふうとため息をついた。天井を仰ぎ、瞳を閉じて彼女はポツリと呟いた。

「お願い、しますね」

直後、桜の影から何かが解き放たれた。

柳洞寺。その敷地内に存在する湖の中心。逃走をやめたライダーは一人佇んでいた。

「何だ、もう逃げねえのか腰抜け」

「酷い言い草ですね」

特に気にする様子も無く、背後に降り立ったランサーへ言葉を返す。そんな彼女をランサーは嘲笑する。

「事実を言っただけでそう言われちゃ世話がねえ」

「おや、本気で言っているのですか？流石に気付かれていますか？と思っていましたが」

「……………はあ……………面倒くせえ。やめだやめだ！下らねえ探り合いなんざ性に合わねえ。何だか知らねえが狙いがあんだろ？乗ってやるからさっさとしろ。真正面から叩き潰してやる」

鋒を向け宣言するランサー。そんな彼にライダーは、ではお言葉に甘えて、と零した後、彼の背後を指さした。

「後ろ、気を付けた方が良いですよ」

「あん？……………ツ!？」

言葉の意味が分からず疑問を呈したランサーは、直後全身を襲った悪寒に即座に構えを取り、自身の背後へ最速最短最大威力の一撃を放った。しかし、手応えは無い。そして彼は瞠目した。放たれた朱槍は間違い無く自身の背後を取った存在を貫通している。だがそこから血は流れず、それどころか抵抗感一つ感じない。そればかりか、その様相は明らかに人間のものではなかった。

身長は、3 m程。手足は長く、スーツを身に付けている。顔は真っ黒でのっぺりとし

ていて、一切のパーツが欠如していた。そしてその頭からは、僅かだが禍々しい紅の光が洩れている。

——スレンダーマン

彼は、声を聞いた気がした。

「う、おとおつ!?!」

次の一撃を放とうとするよりも先に、彼の脚に何か巻き付いた。その何かは彼の身体を真横に引き摺り始める。それが何かを確かめる間もなくランサーは空へ放り出された。何とか空中で体勢を立て直した彼は、先程の怪物から赤黒い、帯のような触手が伸びているのを確認する。だがそんな間も直ぐに無くなる。飛び上がり追撃の蹴りを放つライダー。その蹴りを槍で受けた彼は、空中故に踏ん張れる訳もなく吹き飛ばされ水面へ叩き付けられた。

そうして水中へ戻ってきた彼を、即座に触手の群れが追撃する。

(クソが……)

内心で悪態をつきつつ、ランサーは槍を振り回す。触手を弾き、切り裂き、それでも捌ききれないものは避けていく。だが水中ではそんな攻防も長くは続かない。彼は湖底を蹴り、水上へ飛び上がった。そして比較的水の浅い場所に着地した。

(チクシヨウが、数分前の自分を殴り飛ばしてやりてえ気分だぜ)

考えながら、ランサーはルーン魔術を使用した。持ちうるルーン全てを使った結界。それは宝具すら防ぎうる程のものだ。しかしそんな事知るかと言わんばかりに周囲の湖面から触手が現れる。襲い来る触手を無視して、ランサーはライダーの姿を探す。

「見つからないよ」

その声が聞こえた直後、結界が一瞬の内に砕け散った。

「何っ!？」

再び背後、そこにいたメガネを掛けたメイド服の女、瑠璃はいた。不安げな表情の彼女の右手には特殊な形状のナイフが握られている。

虚を突かれつつもランサーは咄嗟に瑠璃に向けて槍を振るう。だがそれよりも速く触手が殺到した。槍は瑠璃に届くことは無く触手によって止められる。それどころかランサーの腕が、脚が次々と拘束されていく。されど相手は大英雄。それだけで止められるほど甘くは無い。

なら、二重三重の手を用意するのは当たり前だ。

「あ、がつ!？」

全身が無理矢理に硬直させられる。魔力の流れから、ライダーを見つけたランサーは彼女がバイザーを外し、こちらを見ていることに気が付いた。

「魔……眼……!？」

効果は石化。最早正体を隠す気も無い。持ち前の対魔力と破壊されたとは言え全てがダメになったわけでは無い結界の効力によって何とか持ち堪えているが、全く身動きが取れなくなるのは時間の問題だった。ランサーは何とか直接ライダーの視界に入っていない左手の指先でルーンを刻む。

だがルーンを刻み終えるよりも先に、瑠璃の持つ短剣が彼の身体を切り裂いた。大したダメージでは無い。だが彼は、英霊にとつて命と同義である繋がりが切断されたことを理解した。

「て、めエ……!!」

「ひっ……!!」

瑠璃は怯えた表情でランサーに背を向け逃げ出した。

「キャスター!!早くしてえええ!!死んじやううう!!」

(ちっ!端っから組んでいやがったか!!)

ルーンを刻み終えたランサーは魔眼の効力を弾き、触手を吹き飛ばす。

(最悪契約は戻って結び直しや良い!まずはあの女がこれ以上余計なことをしねえ様に確実に殺す!!)

ライダーがこちらに駆け寄る様子もあるが、それよりも自分が女に追いついて心臓を貫く方が早いと判断したランサーは魔力を迸らせ、走り出した。

それを察知した瑠璃は、多分な怯えをその顔に浮かべつつもランサーの方へ向き直った。そして、その左手の甲、そこに刻まれた令呪を見せつける。

「令呪をもって命ずる！」

その言葉に、自身の中に新たな繋がり^{ツナガリ}が生まれていることにランサーは気が付かされた。とはいえ彼はそれで殺すのを止めるような男ではない。

「私に、」

槍を構える。

「危害を、」

令呪の強制力が働き始める。

「加えるな!!」

そして――

ドオオオオオオオン!!!

「……………クソツタレ……………」

サーヴァントの速力を、同じくサーヴァントの膂力によって無理矢理に押し留めたが故に湖面が爆ぜる。爆ぜた湖面から大量の水が巻き上がり、雨の如く降り注いだ。ランサーの槍は瑠璃の胸部から数cmの所で留まっていた。

「は、う……………」

その状況に限界を迎え、瑠璃は腰を抜かした。そうしてその場に、死ぬ程機嫌の悪いランサーと、死ぬ…………死ぬ…………と呟き続ける瑠璃という意味不明な光景が生み出された。

3. 交渉

「んで、テメエらの狙いはなんだ？」

柳洞寺を後に、瑠璃達はランサーを連れて蓮葉邸へ戻った。そしてそこで、ランサーと桜は対峙していた。もしもの時に備え彼女の背後にはライダーと瑠璃が控えている。部屋自体もキヤスターによって一つの魔術となっており、緊急時にはランサーの身体を拘束するようになっていた。

「貴方を私達の陣営に引き込むことです」

答えられるとは思っていなかった間に答えが返され、ランサーは眉を顰める。桜の言葉は、まるで元々自分を知っているかのような口振りだ。

「最悪、貴方を言峰綺礼のサーヴァントである、という状態から解放出来ればそれで充分なんですけどね」

「……………何者だ、テメエ……………？」

露骨に、ランサーは警戒を露にする。彼は言峰をいけ好かない、と思っではいるが、有能であることと確かな実力の持ち主である事は認めていた。それ故に、目の前の少女が言峰と自身の主従関係を知っていることは不可解極まりないものだった。

桜を睨め付け、威圧する。気の弱い者ならば祿に言葉を発する事も出来なくなるような重圧。それを一身に受けながら、桜は飄々とした態度のまま話を続ける。

「別に貴方に何かしてもらう必要は無いんです。用があるのは貴方自身では無くてもあくまで貴方の霊基ですから」

「……………」

「あれ？理由聞かないんですか？」

「聞いたところで答える訳じゃねえだろ」

「いえ別に全然答えますよ？協力してくれるならその方が都合が良いですし」

「んじやあ何でだ？」

「とあるサーヴァントを召喚するためです」

「……………」

マジで言うのかよ……と呆れの感情を表情から滲ませつつ、桜の言葉を訝しむ。サーヴァントは七騎召喚された、聖杯戦争は始まった、それはどちらとも言峰から聞き及んでいたことだった。故に全てのサーヴァント相手に戦いを挑み、倒すこと無く生還しろなどという令呪が下されたのだから。

「確かに、サーヴァントは七騎全て召喚されました。だけれど、アサシンはその真名が確定していない」

「何言ってるんだ……?」

「サーヴァントが召喚されるプロセスご存知ですか?」

そうランサーへ問い掛けながら、桜は影からグラスを一つ取り出した。

「これはサーヴァントのグラスです。通常の召喚の場合、触媒と関係のある英霊の霊基や召喚者と共感性の高い英霊の霊基で中身を満たして、それからこちらの世界に喚ぶんです」

パチンツと指を鳴らし、桜はグラスの中を水で満たす。そしてそれを机の上に置いた。

「私達はここに干渉しました」

桜は再び影からグラスを取り出し、それをそのまま机の上に置いた。

「私達はアサシンという入れ物^{グラス}だけを召喚しました。それで聖杯にサーヴァントが七騎揃ったと誤認させたんです」

まあその為の術式はキャスターさんにおんぶに抱っこだったんですけどね、と桜は苦笑した。

「……………何が目的だ」

「……………私達の目的は、この聖杯戦争を破壊することです。その為に、私達は――」

『――』を召喚します。

驚愕にランサーは目を見開いた。同時に自身の霊基を求めたことにも合点がいった。そして、彼は怒気を孕んだ様子で声を上げた。

「正気かテメエ……!!」

「正気です」

「ハッ！なら尚更タチが悪い！下手すりやこの街どころか世界が終わるぞ!! 聖杯戦争どうこうの話じゃねえ!!」

桜の胸倉を掴み、声を荒げる。すぐさま瑠璃が左手を掲げようとし、ライダーがダガーを構える。だが桜はそれを制止した。

「別にそれそのものを喚ぶわけじゃありません。喚ぶのはその能力のみです」

「無理だ！能力を呼び声にその意識も喚ばれる！」

「それならそれで、問題ありません。意識は塗り潰せます」

その、あまりにも確信を持った物言いに、ランサーは何かを感じ、胸倉から手を離す。

「……………説明しろ」

「ええ、喜んで」

桜はフワリと微笑んだ。

衛宮邸。

「ん、ん……………」

「あら、お目覚め？」

「遠坂か……………遠坂ア!？」

目を覚ました士郎は、自室に平然という遠坂凜の存在に驚愕し、同時にその意識を一気に覚醒させた。

「一応治療してあげたって言うのに随分な反応じゃない」

「あ……………そうか、昨日バーサーカーとの戦いで……………」

昨晚の戦いを思い出し、士郎は自身の身体を見る。悪いな遠坂、と士郎が言うと、凜は首を振った。

「気にする必要は無いわ。私自身、打算込みの行動だったから」

「打算？」

「ええ、まあ用があるのは衛宮君じゃなくてセイバーなんだけれど」

そこまで言って凜は立ち上がり伸びをした。そこで、ぐくと腹の虫が鳴いた。部屋の

中にいるのは士郎と凜の二人だけ。そしてその鳴き声の主は士郎の腹の中にはいない。

早い話凜は空腹だった。気まずい空気が流れる中、凜は士郎を睨みつけた。

「アンタの看病で朝からなんにも食べてないのよ!! 文句ある!?!」

羞恥のあまりに顔を真っ赤にして叫ぶ凜に、士郎は苦笑で返すのだった。

「んん! 恥ずかしい所をみせたわね……………」

羞恥が抜けきらず頬を染めたままの凜が言う。真顔のままなんの事か分からず首を傾げるセイバーと苦笑する士郎。昼食を終えた三人は衛宮邸の居間に集まっていた。

「早速だけど本題に入らせて貰うわ」

表情を改め、姿勢を正した凜に呼応して士郎も背筋を伸ばす。凜の口から飛び出てきたのは、言ってしまえば同盟を結ばないか、ということだった。

「わかった。組もう」

「アンタねえ……………」

「士郎……………」

「な、なんだよ……………」

ノータイム同盟締結に呆れの視線を向ける二人にたじろぐ士郎。まあ都合がいいし私はいいんだけど……と呆れを滲ませたまま嘆息する凜と、あまりにも無防備なマスターに意識改革をしなければと考えるセイバー。未だ呆れられた理由が分かっていない士郎にセイバーが叱責を、と話を始めた。

「士郎、同盟を結ぶならば、せめて相手が何を求めているか、相手からの対価は何かを知ってからにして下さい。実力のある魔術師ならば、先程の肯定の言葉だけで士郎の行動の全てを縛ることすら可能なのです。もう少し危機感を持つて下さい」

「そりゃあ、俺だって何も知らない奴ならもう少し考えるさ。遠坂はそんなことしないだろ」

「衛宮君が魔術師のことを何も分かってないのがよくわかったわ……………」

これは現時点で何を言ったところで意味は無い、と判断した凜は本題、何故士郎達に同盟を持ち掛けたかを語り始めた。

「今回の聖杯戦争、既に同盟を締結してる陣営がいるわ」

「！」

驚きの表情を見せる士郎に凜は続ける。

「どのサーヴァントかまでは分からないけど、二騎のサーヴァントが連携して襲いかかってこられたら大概の場合は手も足も出なくなるわ。だからその同盟相手を倒すまで協力して欲しいのよ」

「凜、口振りからして、マスターが誰かは分かっているようですが」
「ええ、その通りよ」

「では、各個撃破は出来ないのですか？陣営同士が離れているうちに」
「……………まあ、それは、私の実力が足りないのよね」

悔しげな表情を浮かべ、伏し目がちに呟かれた言葉に士郎は疑問を抱いた。

「遠坂でも実力が足りないのか…………？」

「ムカつくけど、相手はどっちも格上よ」

「それで、相手は誰なんだ？顔とか名前とか」

「それは……………」

士郎の問いに凜は言い淀む。しかし数秒して、覚悟を決めた表情で士郎を真っ直ぐと見据えた。

「これは、衛宮君にとってショックなことだと思うけど言わせてもらおうわ」

「俺にとつてショック？」

自身の内に広がる葛藤を露知らず首を傾げる士郎に、凜は深呼吸一つの後、その名

を口にした。

「相手の名は、蓮葉桜と蓮葉識姫。典位プライドを戴く魔術師と封印指定の怪物よ」

「なっ!?!」

士郎にとって家族同然の少女とその姉の名を。

4. 告白

「大丈夫ですか、士郎？」

「……………ん？あ、ああ。大丈夫」

生返事を返す士郎にセイバーは心配そうな表情を向けた。

あの後、姉代わりである藤村大河からの電話が来たことで話は一旦切り上げられた。凛は用事があると言って衛宮邸を離れ、士郎は弁当を届ける為に穂群原学園に向かっている最中だ。

「士郎、貴方にとって桜と識姫という二人はそれ程大切な方々なのですか……………？」
「……………ああ、桜は家族同然だし、蓮姉は俺の恩人だ」

暗い表情のまま歩を進める士郎に、セイバーはそれ以上の追求を出来なかった。

穂群原学園。そこにある弓道場に、桜はいた。彼女は髪を結び上げ、弓道着を身に纏い、弓に矢を番えた状態で集中し――

(はあ、士郎さんまだかな……)

てはいなかった。的の方に目を向けてこそいたが、あまりにも上の空。微塵も集中していない。その頭の中は使い魔越しに感知した士郎が来訪する、という情報でいっぱいだった。

今回の聖杯戦争、桜は識姫から一つ助言を受けていた。それは、出来る限り士郎との接触を避ける、というもの。初めこそ疑念を抱いた桜だったが、識姫が無意味にそんな事を言う訳もないと了承していた。とはいえ、

(士郎さんの方から接触してくるんですから、不可抗力ですよねー)

接触するのは避けるが、接触されるならば問題ない。彼女はあえてそう曲解した。と、そんな思考がフワフワした状態で矢は放たれた。

(あ、ズレた)

的に当たりこそすれど中心には当たらないであろう軌道。だが、

「お・ど真ん中！流石うちのエース！」

「ありがとうございます」

美綴の言葉に桜はニコリと笑みを向ける。

(これを単純な技量だけでやるんですから、士郎さんは凄いですよねー)
想い人の来訪を心待ちにする桜の影は、ゆらりゆらりと揺れていた。

「……………なるほど」

ビギイツ!!と、桜の額に青筋が走る。瞬間、弓道場に凄まじい殺気が迸った。そのあまりの圧に、弓道場にいた面々は冷や汗を流しながら桜へ視線を向け、そして桜の殺気を一身に受ける少女、セイバーもまた瞬間的に身構える程だ。

「先輩?少し良いですか?」

「は、はい……………」

士郎の手を取り、桜は人気の無いところへ向かう。そして当然の如く着いてくるセイバー。聖杯戦争、敵対する陣営である桜と己のマスターを二人きりにするなどという愚行を彼女が犯すことはない。

だが、今回ばかりは相手が悪かった。

「なっ!？」

早歩きで土郎の手を引き、角を曲がる桜。それを急いで追ったセイバーだったが、彼女が追い付いた時には忽然と土郎も桜も居なくなっていた。

「はあ、全くしつこい人ですね……………」

真つ黒な、暗くは無い、ただ黒い空間で、少女は外で未だに士郎を探し続けるセイバーに嫌悪感を隠すことすらなく、呟いた。

「(、)は……………」

「有り体に言えば、影の中です。私の魔術による虚数空間ですから、逃げられるなんて思わないでくださいね？ 士郎さん」

呆然とした様子で周囲を見回す士郎の様子に暗い悦びが湧き上がるのを押さえ込みながら桜は影で出来た椅子に腰掛けた。士郎もまた椅子に座ってはいるが、拘束され、身動きは取れない状況だ。

「遠坂の言ってたことは本当だったのか……………」

「はあ、やつぱり遠坂先輩の仕業ですか……………」

これはお姉ちゃんの事もバレてますね、と考えながら彼女はため息をついた。

「なあさ「協力なら、出来ませんよ？」……………」

士郎の提案を、聞くまでもなく跳ね除ける。現状の策を成功させる為に士郎と協力関係になることは出来ない。恋愛感情 私情に従うのなら同盟を結びたい。だが私情に流されて捨てられる程、彼女の識姫への思いは軽くなかった。

「桜、俺は、お前とは戦いたくない」

「そもそも私と士郎さんは戦えませんか？」

「……………？何を言ってる……………」

「だって私の方が強いもの。そもそも戦いになりませんよ」

この現状が何よりも物語ってますよね？と呟いて桜は微笑んだ。この虚数空間に桜自身以外の生物を連れ込むのは相当な難易度になる。そもそもほぼ無抵抗でなければ連れ込めないのだ。

仮に識姫と桜が戦うのなら、桜はここに連れ込むこと自体成功しないだろう。仮に凛と桜が戦ったなら、連れ込んだとしても即座に逃げ出されるだろう。だが士郎はそもそも連れ込まれないことも、この空間から逃げ出す事も出来ずにいる。

何も言うことが出来ず黙り込んだ士郎に、桜は虚構を混ぜつつ自身の戦力を告げている。

「ここからさらに、お姉ちゃんも加わります。士郎さん、魔術無しでも勝てた事ないですよね？」

「それは……………」

「遠坂先輩も、士郎さんも私達の相手になりません」

「だとしても、俺は……………」

「士郎さん、そも勝ち目の無い戦いに挑むのは勇氣でも挑戦でも無いんです。士郎さんじゃ、ただ無駄に命を散らして、無意味に無価値に潰えるだけですよ？それでも戦うんですか？」

「……………」

沈黙し、俯く士郎の姿に桜は胸の内がチクリと痛むのを感じた。だが彼女に容赦する気は微塵も無い。

（これで、降りてくれるなら……………）

” 士郎は戦わなくちゃいけないし、どれだけ言おうが妨害しようが巻き込まれて来るよ。この戦いはあの子の中にある色々なことに決着を付けるためのものでもあるから”

士郎を参戦させることに難色を示した桜に、識姫はそう言った。士郎の中に巣食う歪みには桜も気が付いている。そして、今の今までそれをどうにか出来ないかと考え続けてきていた。

（今のこの現状はお姉ちゃんの知る未来から完璧に外れてる。なら、士郎さんが諦める未来だって——）

だがその希望は、打ち碎かれた。

「それ、でも……………俺は戦わなくちゃいけない……………」

その言葉に、桜は目を伏せた。

(ああ、やつぱり……………)

歪みは正せなかった。それならばと、桜は立ち上がる。

「分かりました。なら、ここから出たと同時に、私と土郎さんは敵になります」

「……………見逃してくれるのか?」

「言つたじゃないですか。戦いにならないって。なら、殺さずに済ませます。少なくとも、私にもお姉ちゃんにも土郎さんや遠坂先輩を殺すなんて選択肢はありませんから」
でも、と続ける。

「それ以外は、分かりません。だから、一つ、楔を打たせて貰いますね」

「楔……………? どういうんむっ!？」

唇を、重ねる。その甘い痺れに身を任せたくなる衝動を押さえ込み、少女は土郎から離れた。そしてその胸に身を寄せた。

「好きです。大好きです。どうか、死なないで……………!」

隠すことはなかった、されど告げてもないなかつた想いをぶつけた。

土郎の身体を押す。倒れ行く土郎は、桜に向けて手を伸ばした。

「桜っ!!」

二の句を告げるよりも先に、土郎は影の外へ放り出される。先程と同じ場所だ。こち

らに駆け寄るセイバーの姿を捉えながら、少年はぶつけられたその想いにただただ戸惑っていた。